近　岡　遺　跡

1 9 8 6

石川県立埋蔵文化財センター

近　岡　遺　跡

1　9　8　6

石川県立埋蔵文化財センター

例　　言

1　本書は石川県金沢市近岡町所在の近岡遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、金沢港泊地造成事業に係るもので、運輸省第一港湾建設局の委託により、昭和58年7月11日から昭和59年3月30日まで石川県立埋蔵文化財センターが実施し、費用は同建設局が負担した。

3　調査担当者は戸澗幹夫、三浦純夫、芝田　悟であり、山津康義、石浦めぐみ、栃木英道がそれを補助した。

4　調査および出土遺物の整理・検討にあたっては、次の方々の指導・助言・協力を得た。記して感謝の意を表する。

浅香年木、荒木繁行、伊林永幸、狩野　久、小林忠雄、櫻井甚一、田川捷一、土肥　孝、滋井真、用田政晴、宮本哲郎、出越茂和、楠　正勝、増山　仁、吉田　淳、清水哲広、宮下栄仁、山本泰幹、横山貴広、小野澄江、河村裕子、河村真紀、小林直子、小屋玲子、田植孝子、土井真知子、前田すみ子、村沢仁雄、中島雄二、北野スイ、北村芳子、坂井かず子、坂田あや子、高崎春子、高崎道子、高村正雄、高村松子、高村　緑、高柳美代子、竹山くに子、田中たまき、中栄みゆき、西川愛子、宮沢　妥、宮田ハル、村田清子、最里健太郎、井高ひろ美

5　遺物整理は社団法人 石川県埋蔵文化財整理協会（担当―辻森由美子、馬場正子、正木直子、山瀬千奈美、北田琴美、勝島栄蔵）に委託した。

6　本書の執筆分担は次のとおりである。

第1章 …… 三浦純夫
第2章 …… 芝田　悟
第3章、第4章第1節1・5～7、第2節、第4節(土器)、第5章、土器観察表… 栃木英道
第4章第1節2・4、第2節遺物の一部(砥石)、第4節(石器) …… 山本直人
第4章第1節3、第3節 …… 戸澗幹夫

7　本書の編集は執筆者各員との協議のもと、干場道治(鹿島郡鳥屋町教育委員会・昭和60年度石川県立埋蔵文化財センター長期研修生)の協力を得て栃木が行った。

(1)　挿図中の方位はすべて磁北である。

(2)　挿図中の水平基準の数値は海抜高である。

(3)　挿図の縮尺については原則としてスケールを付し、表題末にも明示した。

(4)　本文中の註はすべて章末に掲げた。

8　写真撮影は、図版第2～6を戸澗・山津・栃木が、図版第7～15を干場・栃木が担当した。ただし、図版第14の左二枚「木簡」・「人形」は、福島正実の協力を得て赤外線テレビカメラにより得られた画像から撮影したものである。

9　本調査の遺構・遺物の実測図・写真、出土遺物等の資料は、石川県立埋蔵文化財センターが保管している。

近　岡　遺　跡

目　　次

頁

例　言 …… i

第1章　調査の契機と経過 ……（三浦純夫）… 1
　第1節　調査にいたるまで …… 1
　第2節　調査の経過 …… 2
　第3節　調査日誌 …… 2

第2章　近岡遺跡の位置と環境 ……（芝田　悟）… 3
　第1節　位置と地理的環境 …… 3
　第2節　歴史的環境 …… 5

第3章　遺　構 ……（栃木英道）… 13
　第1節　基本層序と遺構の概要 …… 13
　第2節　土　坑 …… 14
　第3節　溝 …… 14
　　1　近代溝、2　第3号溝、3　第5号溝、4　第6号溝、5　大溝
　第4節　旧河道 …… 20

第4章　遺　物 …… 21
　第1節　大溝出土遺物 …… 21
　　1　土器（栃木）、2　土製品（山本直人）、3　木器と木製品（戸澗幹夫）
　　4　石器と石製品（山本）、5　鉄器、6　植物遺体、7　動物遺体（栃木）
　第2節　第3号溝出土遺物 …… 70
　　遺物　土器・木器（栃木）・砥石（山本）、小結（栃木）
　第3節　第6号溝出土遺物 ……（戸澗）… 72
　第4節　包含層出土遺物 …… 77
　　土器（栃木）、石器（山本）

第5章　考　察 ……（栃木）… 79
　第1節　大溝出土土器の検討 …… 79

大溝出土土器観察表 ……（栃木）…… 90

挿　図　目　次

頁

第１図　調査区位置図（Ｓ＝1/6,000）…… 1
第２図　近岡遺跡の位置…… 3
第３図　近岡遺跡周辺地形（明治43年発行）‥ 4
第４図　周辺の遺跡（Ｓ＝1/25,000）…… 6
第５図　近岡地内等における過去の発掘調査地点（Ｓ＝1/10,000）…… 9
第６図　発掘調査区模式図（Ｓ＝1/1,000）… 13
第７図　基本層序模式図 …… 13
第８図　調査区全体図（Ｓ＝1/180）…… 15
第９図　大溝・第６号溝遺物出土状況（Ｓ＝1/120）…… 19
第10図　旧河道出土龍一銭銅貨拓影（Ｓ＝1/1）…… 20
第11図　大溝中層・下層出土土器形式分類図（Ｓ＝1/6）…… 22
第12図　大溝中層・下層出土土器（Ｓ＝1/3）‥ 30
第13図　大溝中層・下層出土土器（Ｓ＝1/3）‥ 31
第14図　大溝中層・下層出土土器（Ｓ＝1/3）‥ 32
第15図　大溝中層・下層出土土器（Ｓ＝1/3）‥ 33
第16図　大溝中層・下層出土土器（Ｓ＝1/3）‥ 34
第17図　大溝中層・下層出土土器（Ｓ＝1/3）‥ 35
第18図　大溝中層・下層出土土器（Ｓ＝1/3）‥ 36
第19図　大溝中層・下層出土土器（Ｓ＝1/3）‥ 37
第20図　大溝中層・下層出土土器（Ｓ＝1/3）‥ 38
第21図　大溝中層・下層出土土器（Ｓ＝1/3）‥ 39
第22図　大溝中層・下層出土土器（Ｓ＝1/3）‥ 40
第23図　大溝中層・下層出土土器（Ｓ＝1/3）‥ 41
第24図　大溝中層・下層出土土器（Ｓ＝1/3）‥ 42
第25図　大溝中層・下層出土土器（Ｓ＝1/3）‥ 43
第26図　大溝中層・下層出土土器（Ｓ＝1/3）‥ 44
第27図　大溝中層・下層出土土器（Ｓ＝1/3）‥ 45
第28図　大溝中層・下層出土土器（Ｓ＝1/3）‥ 46
第29図　大溝中層・下層出土土器（Ｓ＝1/3）‥ 47

頁

第30図　大溝中層・下層出土土器（Ｓ＝1/3）‥ 48
第31図　大溝下層出土土器（１～８）・上層出土土器（９～13）（Ｓ＝1/3）…… 49
第32図　大溝出土土製品実測図（Ｓ＝1/2）… 51
第33図　北加賀における弥生時代～古墳時代前期の漁網錘出土遺跡分布図 …… 52
第34図　大溝出土木器・木製品（Ｓ＝1/4）… 56
第35図　大溝出土木器・木製品（Ｓ＝1/4）… 57
第36図　大溝出土木器・木製品（Ｓ＝1/4）… 58
第37図　大溝出土木器・木製品（Ｓ＝1/3）… 59
第38図　大溝出土木器・木製品（Ｓ＝1/4）… 62
第39図　大溝出土木器・木製品（Ｓ＝1/4）… 63
第40図　大溝出土石器・石製品（Ｓ＝1/3）… 67
第41図　大溝出土石器・石製品（Ｓ＝1/3）… 68
第42図　大溝出土鉄器（Ｓ＝1/2）…… 69
第43図　第３号溝出土遺物（Ｓ＝1/3）…… 71
第44図　第６号溝等出土遺物（Ｓ＝1/3）…… 72
第45図　第６号溝出土遺物（Ｓ＝1/2）…… 73
第46図　包含層（第Ⅻ層）出土土器（Ｓ＝1/3）…… 77
第47図　包含層（第Ⅳ層）出土石器（Ｓ＝2/3）…… 77
第48図　近岡遺跡大溝出土土器器種構成比‥ 79
第49図　甕形土器（Ａ～Ｃ類）の類構成比の分布 …… 81

表　目　次

頁
第1表　周辺の遺跡分布表 …… 7
第2表　大溝中層・下層出土土器器種構成比 …… 21
第3表　漁網錘一覧表 …… 50
第4表　弥生時代～古墳時代の漁網錘出土遺跡一覧表 …… 51
第5表　石器・石製品一覧表 …… 66
大溝出土土器観察表 …… 90～94

図　版　目　次

本文対照頁
図版第1　上　近岡遺跡（○印上）・戸水C遺跡（同下）周辺航空写真（昭和36年撮影） …… 3
　　下　近岡遺跡（○印上）・戸水C遺跡（同下）周辺航空写真（昭和57年撮影） …… 3
図版第2　上　調査区全景（南西より） …… 13
　　下　大溝完掘状況（南東より） …… 18
図版第3　大溝土器、石器、木器・木製品出土状況 …… 18
図版第4　大溝木器・木製品出土状況 …… 54
図版第5　第6号溝墨書須恵器・人形等出土状況 …… 72
図版第6　上　第6号溝人形出土状況 …… 72
　　下　第6号溝木器・木製品出土状況 …… 72
図版第7　大溝中層・下層出土土器 …… 21
図版第8　大溝中層・下層出土土器 …… 21
図版第9　大溝中層・下層出土土器・大溝出土土製品 …… 21・50
図版第10　大溝出土木器・木製品 …… 54
図版第11　大溝出土木器・木製品 …… 54
図版第12　大溝出土木器・木製品 …… 54
図版第13　大溝出土石器・石製品、鉄器、動物遺体、植物遺体 …… 66・69
図版第14　第6号溝出土木簡・人形 …… 72
図版第15　第6号溝出土遺物 …… 72

第１章　調査の契機と経過

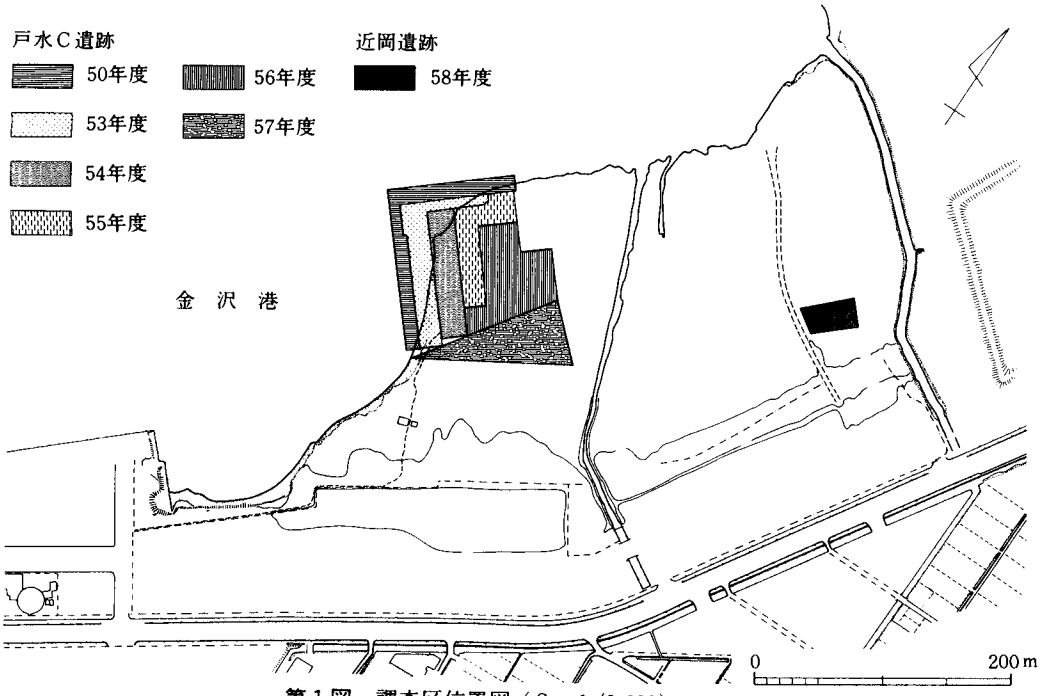
第１節　調査にいたるまで

近代に入って衰退の一途をたどる金石・大野の両港にかわって，新しい「金沢港」を建設しようとする産業界の動きは，昭和７年の金沢港修築計画にはじまる。その後，同港は昭和39年に重要港の指定をうけ，同41年10月には起工式が行なわれた。建設事業は，泊地の造成とともに，周辺の工業用地の開発も行ない，現在も第６次整備計画のもとに工事がすすめられている。

本遺跡の発見および発掘の契機は上記の事業に係り，昭和45年に実施された調査は，県が施行する金沢港南部地区造成工事，今回報告の調査は運輸省が行なう泊地造成工事を原因としている。

金沢港南部地区造成工事は，約300万m²にも及ぶ港周辺の工業用造成の一環で，周知の遺跡はなく，県教委にも埋蔵文化財担当として嘱託１名を配置するのみという状況下にあったため、分布調査を経ず着工された。本遺跡はこの工事中に縄文土器，磨製石斧，石匙等が発見されて世に知られることとなった。

県教委は事業主体である，県・金沢港開発公社と急きょ協議し，工事を一時中断し，発掘調査を実施することで合意に達した。



第１図　調査区位置図（Ｓ＝１/6,000）

調査は石川県教育委員会と石川考古学研究会が共同で，昭和45年６月９日から同６月13日にかけて実施した。調査方法はトレンチによるもので，５ヶ所設定し，68m²を発掘している。その結果，縄文時代晩期の配石遺構を確認し，中屋式および下野式の土器，石器（くぼみ石，すり石，磨製石斧，垂飾，石鏃等）の出土をみた。また，弥生時代後期（月影式）の土器，管玉，木製鍬も出土している。中世では，方形の枠をもつ井戸跡も検出している。なお，藤則雄氏は縄文時代晩期の土層の花粉分析により，イネの花粉を検出しており，同期に稲作が行なわれていたと発表され，稲作農耕起源論に一石を役じている。(1)

第２節　調査の経過

今次の調査は昭和58年７月11日より同59年３月20日にかけて，909 m²を対象に実施した。現地作業は昭和58年９月28日で終了している。

なお，これに先立って事業予定区域の分布調査を昭和57年９月に実施し，範囲を確定している。

この調査は本遺跡の西側に存在する戸水Ｃ遺跡の調査に継続するもので，ともに港泊地造成を原因事業としている。これは運輸省第一港湾局七尾港工事事務所（当時）との協議により発掘をすすめてきたものである。戸水Ｃ遺跡の調査は昭和50年度にはじまり，同51・52年度に中断したが同53年度より再開し、同57年度まで６次の調査を重ねている。したがって本遺跡の調査は港泊地造成事業にかかるものとしては第７次にあたる。（第１図参照）

調査は，現況が標高1.5ｍ前後の低湿地であるという地理的悪条件のうえに，長期の降雨にたたられ困難を極めたが，大きな溝状遺構を検出し，木簡や人形，墨書土器のほか弥生時代後期から古墳時代前期にかかる木製品の出土もあり，大きな成果をあげることができた。

現地調査の経過については，以下に掲げる日誌に拠られたい。

第３節　調査日誌（抄録）

７月11日(月)　調査区を設定し，表土・盛土の排土作業を開始するとともに，基本層序の確認を行なう。

７月12日(火)　表土・盛土の排土作業継続。作業小屋の設営と発掘機材の搬入を行なう。

７月20(水)～７月27日(水)　長雨と湧水により作業地盤が軟弱で表土除去が困難な状態となり，連日排水作業が続く。

７月28日(木)　表土・盛土の排土作業を再開。

８月２日(火)　第３層，第４層の掘り下げを開始し標高移動，調査区内の杭打ち作業を行なう。

８月５日(金)　遺構検出作業を開始し，近代遺構より掘り下げる。調査区の層序の実測作業も行なう。

８月12日(水)　調査区北端に大溝が検出され，掘り下げ作業に入る。

８月26日(金)　大溝掘り下げを継続。覆土下層より庖丁形木製品をはじめ多数の木製品が出土する。調査区南端より遺構の実測作業に入る。

８月31日(水)　大溝北側地点より木簡・人形・「依」と読める墨書土器が近接して出土する。

９月17日(土)　大溝掘り下げ作業継続。狩野久奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部長に出土木簡を実見していただく。

９月22日(木)　大溝掘り下げ作業および実測作業を終える。

９月26日(月)　調査区全域を清掃し，写真撮影を行なう。

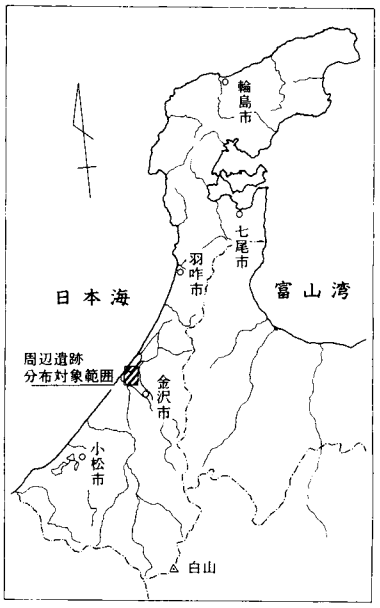
９月28日(水)　機材を撤収し現地作業を終了する。

註　(1)　藤　則雄・四柳嘉章「金沢の縄文晩期近岡遺跡からの稲の発見」『考古学研究』第17巻第３号　PP. ９～28　考古学研究会　1970年　岡山。

第２章　近岡遺跡の位置と環境

第１節　位置と地理的環境（第２・第３図・図版第１）

近岡遺跡は，金沢市街地の中心より北西約６kmの郊外にあたる近岡町地内に所在する。本遺跡は，市域の西寄りを縦断する国鉄北陸本線金沢駅より南東約4.2kmを測り，昭和60年，全国高等学校総合体育大会（インターハイ）のメイン会場となった西部緑地運動公園とは南西約５km隔てる。そして近年，金沢市のベッドタウンとして急激に発展してきた内灘町との境界は北東約1.2kmのところであり，本県の重要港湾として開港された金沢港泊地造成地内に位置する。

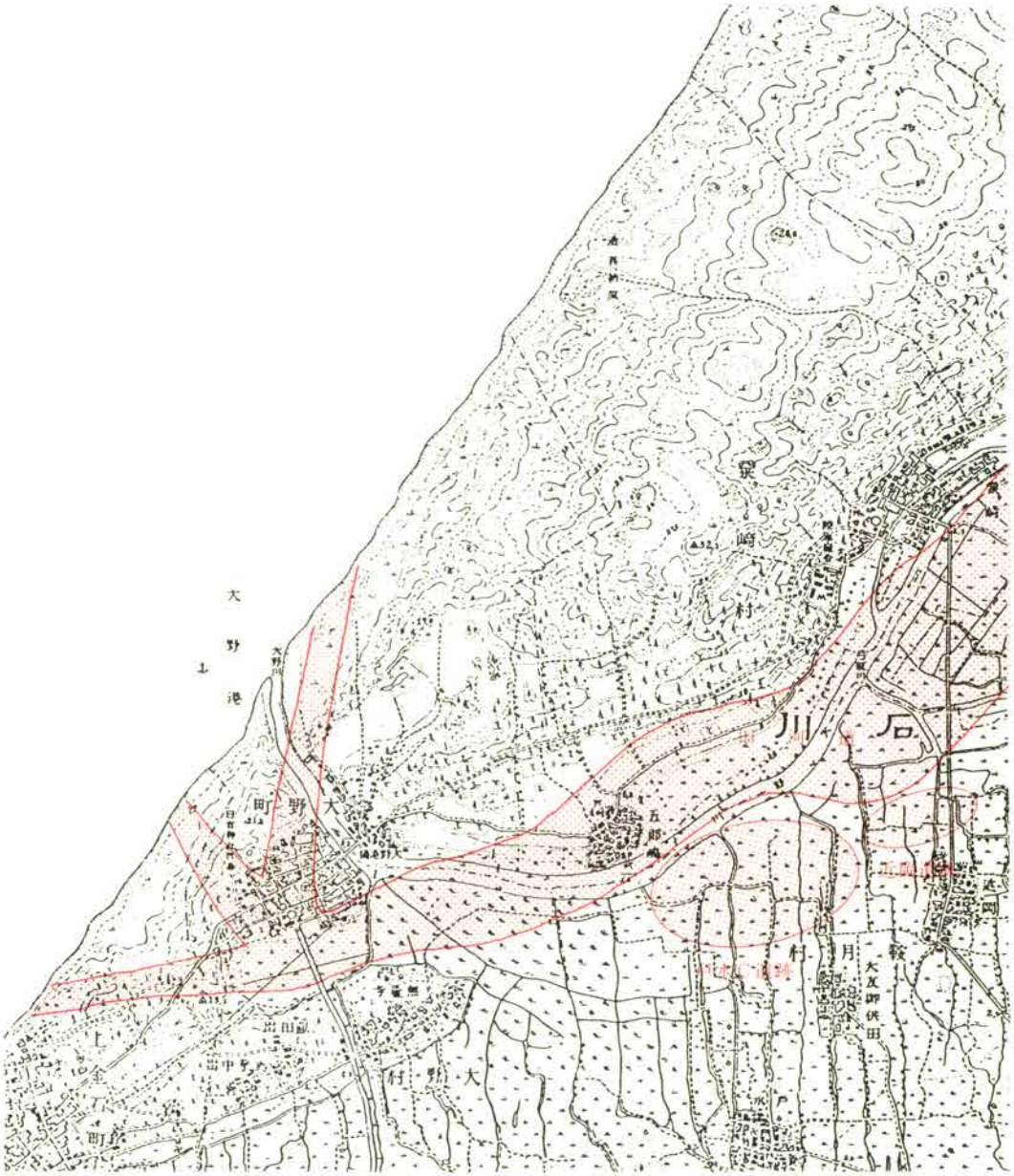


第２図　近岡遺跡の位置

石川県は，日本海に大きく突出したほぼ南北に細長い県である。金沢市はその中央やや南よりに位置しており，その地形は東部から南部にかけては，北陸の霊峰白山（標高2,702m）を中心に派生する加越山地の北端部にあたり，標高 1,000～1,500mの中山級山地がひろがっている。市域南東端の奈良岳（標高1,644m）は，市内における最高峰で北方の大門山（標高1,572m），月ヶ原山（標高1,170m），赤堂山（標高1,046m），大倉山（標高1,005m）などの峰々へ次第に高度を減じながら，医王山（標高939m）へと連なっている。その前山には，金沢城の石垣・辰巳用水の石管・兼六園の庭石などと利用の多い戸室石を産出する戸室山（標高547m）が立地している。

一方，西部から北部にかけては，県境近くの奥三方山に源を発する犀川，大門山系順尾山を源流にする浅野川の二大水系と伏見川・大野川などによって沖積平野が形成されている。また，当平野は県内における代表的な扇状地である手取扇状地（曲率半径12km，扇形開角度 110度）の北部扇端地域の複合平野でもある。犀川・浅野川の両河川は，市街枢要部をほぼ並行して流れ，急にひろびろとした沖積平野を蛇行しながら分・支流を合して日本海と河北潟に注いでいる。それらの河川の氾濫によって堆積層は重り合い，その地質構造は複雑な分布をみせている。地勢は微地形を呈しながら南東から北西に向って緩やかに傾斜している。

本遺跡は，当金沢平野北東域の末端部にあたり，大野川左岸に立地する。現標高は約1.5ｍを測るが，これは港湾造成工事の盛土・整地によるもので，本来は標高0.5ｍ前後の強粘質の低湿地帯である。付近一帯は自然湧水地帯で，古くからその豊富な自噴地下水は飲料水や自然灌漑用水として利用されてきたが，近年の工業化にともない地下水位は低下し，自噴がみられないのが現況である。



第３図　近岡遺跡周辺地形（明治43年発行）

ところで，『皇国地誌』石川郡近岡村の項には

地勢　大概平坦ニシテ盡ク田圃トナル。北方沼田多ク地稍低シ。舟ニ乗シテ植苗ヲナス。西北河北湖ノ尾流ヲ帯ヒ。運輸便ナリ。人家中央ニ位ス。

と明治期の当該地の状況を伝えている。北方の沼田（低湿地）地域が本遺跡の立地点にあたり，河北潟と大野川の後背湿地により灰色・青灰色土のグライ土壌が被覆している。この強粘性土壌は透水性が少く，そのため還元性の強い特性をもつことから，畑地に不適当であり，また水稲栽培においても根系障害の恐れが大きい地質である。田植え作業が田舟に乗って行なわれるなど，農作業時においてはきわめて困難であった状況が窺える。

かつてこの付近一帯は，大野川の旧流路や中州・自然堤防が島状に分布し，田舟を縦横に走らせ往来していたといわれ，この周辺域の輸送では，舟運が重要な役割を果していたのである。

弥生時代から長く続いてきた水田地帯も，1964（昭和39）年，北陸地方の地域開発の拠点として始められた金沢港の建設・金沢港泊地造成工事とともに，臨海工業地化が進み，その地貌は徐徐に変容している。

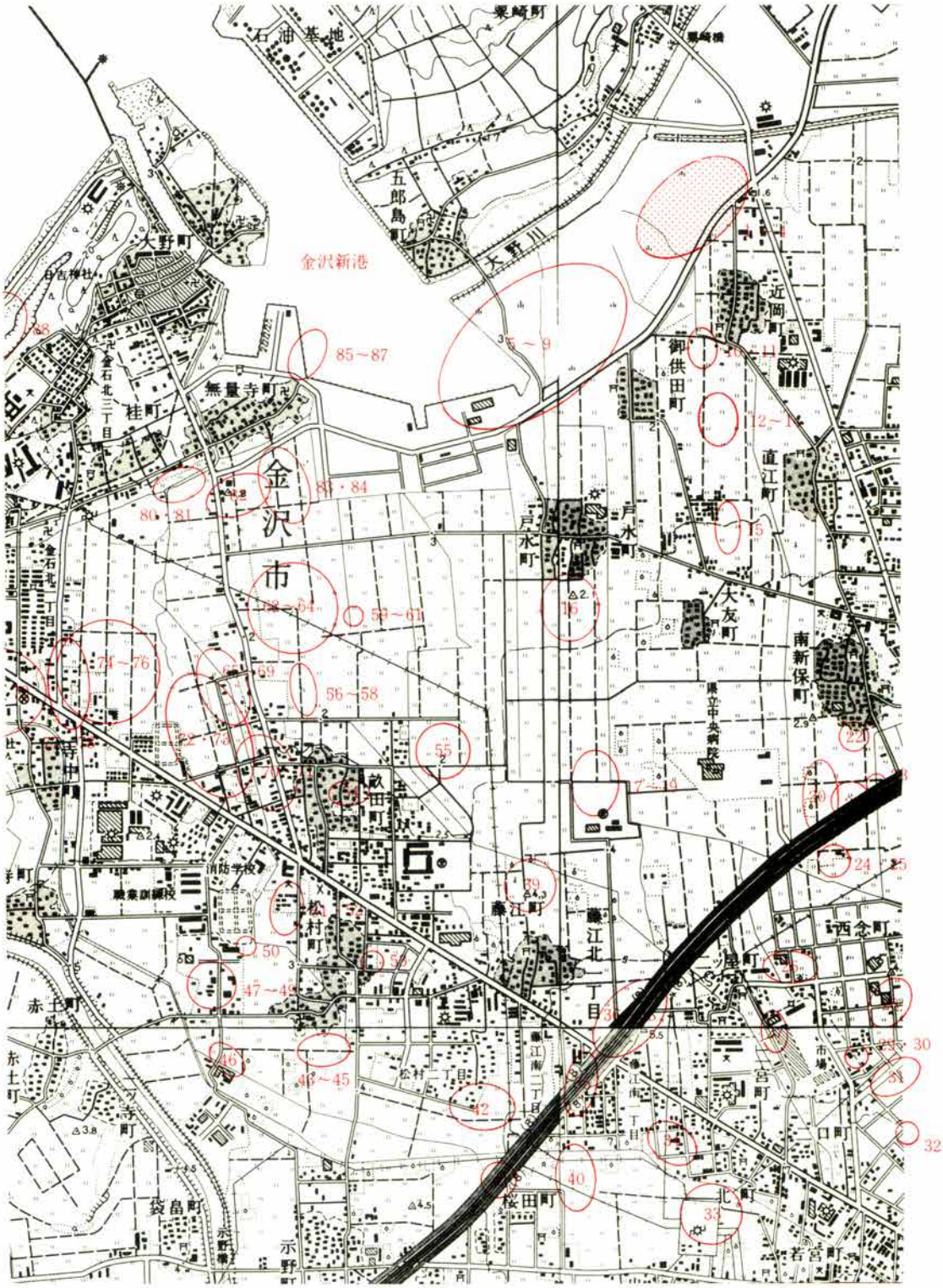
第２節　歴史的環境（第４・第５図）

近岡町には本遺跡（縄文時代晩期，弥生時代後期終末～古墳時代前期，奈良・平安時代，中世）をはじめ，近岡ナカシマ遺跡（弥生時代後期終末，平安時代），近岡カンタンボ遺跡（弥生時代後期，古墳時代中期，奈良時代後期）の３遺跡が所在する。今回，この遺跡を同一遺跡として取り扱うか検討したが，同時期に営まれていたこともあり，また，いないことも確認されていることから，同一遺跡とした場合少し無理があるようなので一応従来通り区別して取り扱った。

さて，本遺跡の周辺域を俯瞰すると，大きく二つにわけることができよう。一つは，東から南にかけて形成する標高200ｍ前後の丘陵地帯であって，その尾根上に構築されている墳墓は，平野部において集落を統治していた支配者層の奥津（おくつき）城である。他の一つは，犀川・浅野川・大野川など河川の沖積作用によって形成されたほぼ標高１～25ｍの金沢平野である。本遺跡の立地点は当平野の北西部にあたり，周辺には数多くの遺跡が分布しており，県下でも有数の濃密分布地域とされている。それらの確認は，地元に居住する荒木繁行・米沢義直・福田弘光など石川考古学研究会々員の日頃のたゆまぬ努力と粘り強い踏査活動に負うところが多い。

それでは以下に既往の調査と知見をふまえ，後者の地域，特に大野川・浅野川・犀川によって形成された当該地域を中心に歴史的環境の概略を述べていきたい。なお，第４図の遺跡番号と，第１表の番号は符合する。

金沢平野における最古の遺跡は，現在のところ本遺跡より南西約6.5kmに位置する下安原（しもやすはら）海岸遺跡である。福浦（ふくら）上層式の土器片が出土していることから，縄文前期末に位置付けられている。南南西約6.5kmに立地する古府（こぶ）遺跡は，北陸縄文土器の中期中葉の標式遺跡として著名である。この遺跡より北西約1.7km隔てる北塚（きたづか）Ａ遺跡は，中期中葉から後期前葉にかけて営まれた集落跡



第４図　周辺の遺跡（Ｓ＝１/25,000）

第１表　周辺の遺跡分布表

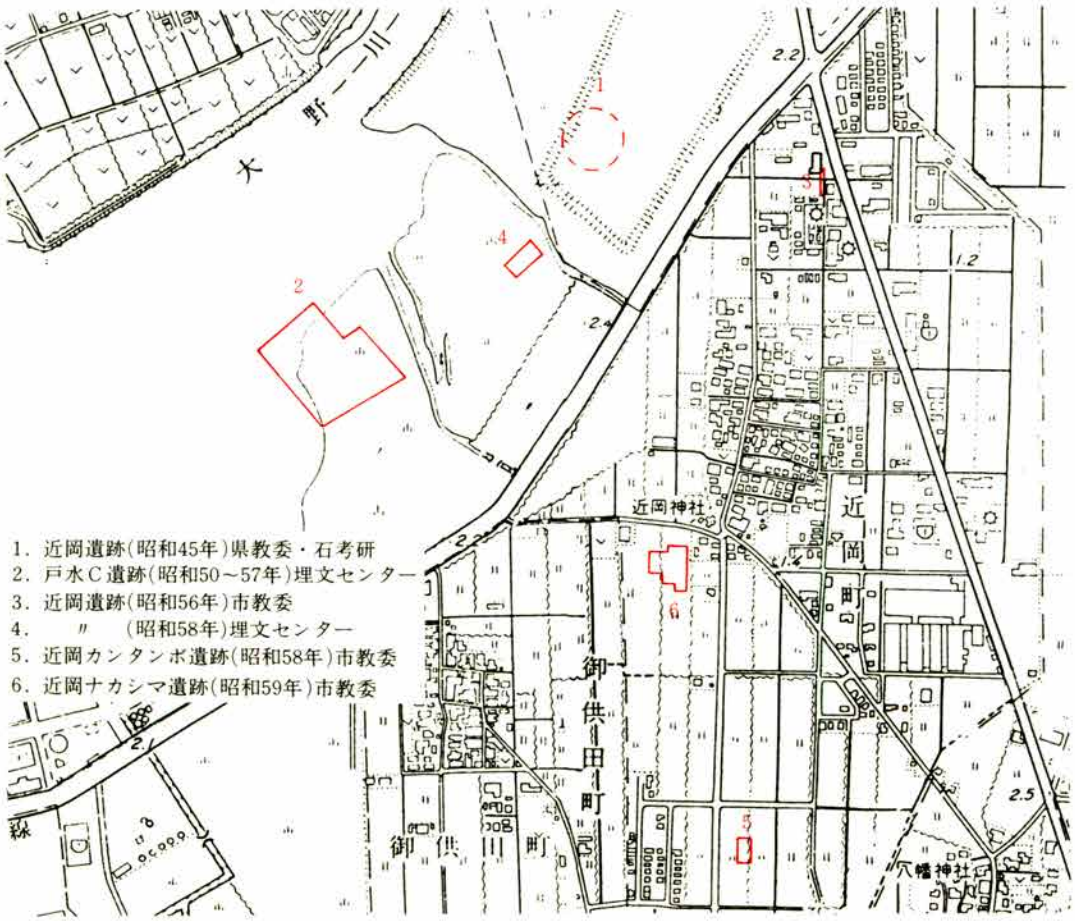
（番号は第４図と符合する）

No.	遺跡名	所在地(通称)	種別	現況	時代	出土品
1	近岡遺跡	近岡町(ヤシキ)	包含地	扇状地・港湾・宅地	縄文晩期	縄文式土器片多数, 磨・打製石斧, 稲の花粉, 磨石, 凹石, 石冠, 石剣
2	〃	〃（〃）	〃	扇状地端・〃	弥生～古墳	土師器多数, 木製鍬・鋤, 管玉, 庖丁形木製品
3	〃	〃（〃）	〃	〃・〃	平安	墨書土器, 木簡, 人形
4	〃	〃（〃）	〃	〃・〃	鎌倉～室町	珠洲焼, 越前焼, 土師質灯明皿, 曲物製井戸枠
5	戸水C遺跡	戸水町	包含地	海岸・金沢港湾内	縄文	土器
6	〃	〃	〃	〃・〃	弥生中期	〃
7	〃	〃	〃	〃・〃	弥生終末	土器, 琴柱型石製品
8	〃	〃	〃	〃・〃	奈良・平安	墨書土器, 灰釉陶器, 石帯, 和同開珎, 須恵器, 土師器
9	〃	〃	〃	〃・〃	中世	土器片, 土師質灯明皿, 珠洲焼, 越前焼, 中国青磁, 曲物井戸枠, 渡来銭
10	近岡ナカシマ遺跡	近岡町(ナカシマ)	包含地	扇状地・水田	弥生終末	土器
11	〃	〃（〃）	〃	〃・〃	平安	須恵器
12	近岡カンタンボ遺跡	〃（カンタンボ）	〃	〃・〃	弥生後期	土器片
13	〃	（〃）	〃	〃・〃	古墳中期	土師器片
14	〃	（〃）	〃	〃・〃	奈良後期	須恵器
15	大友遺跡	大友町	集落跡	〃・〃	奈良・平安	須恵器, 土師器, 墨書土器
16	戸水オモテ遺跡	戸水町(オモテ)	包含地	平地・水田	平安・中世	須恵器, 土師器
17	戸水B遺跡	戸水町, 藤江町（イッチョウダ）	〃	〃・水田・校地	弥生	弥生式土器, 砥石
18	〃	〃, 〃（〃）	〃	〃・〃・〃	平安	須恵器, 土師器
19	〃	〃, 〃（〃）	〃	〃・〃・〃	中世	珠洲焼
20	南新保三枚田遺跡	南新保町	〃	扇状地・水田	弥生終末	土器
21	〃B遺跡	〃	〃	〃・〃	弥生中後期	土器片
22	〃C遺跡	〃	〃	〃・水田一部畑地	古墳前期	土師器多数
23	〃D遺跡	〃	〃	〃・自動車道バイパス道路, 一部水田	〃	土師器片
24	西念・南新保遺跡	西念・南新保町	〃	平地・水田	弥生後期	土器多数, 石器, 木器
25	〃	〃	〃	〃・〃	奈良・平安	墨書土器, 須恵器, 土師器
26	二口六丁B遺跡	二口町	〃	扇状地・市場敷地	古墳前期	土師器片
27	〃A遺跡	〃	集落跡	扇状地端・工場用地	〃	〃
28	西念ネジタ遺跡	西念町	包含地	〃・宅地一部水田	弥生	土器細片, 打製石斧
29	〃クボ遺跡	〃	〃	扇状地・宅地	縄文	
30	〃	〃	〃	〃・〃	古墳前期	
31	二口シミズ遺跡	二口町	〃	扇状地端・畑地	土師器	
32	二口町遺跡	〃	集落跡	平地・造成地	弥生後期	弥生土器
33	薬師堂遺跡	薬師堂町	包含地	扇状地端・変電所用地	古墳前期	土師器
34	北町遺跡	北町	〃	平地・水田畑地	縄文	打製石斧
35	藤江A遺跡	藤江町	集落跡	扇状地端・北陸自動車道路敷	平安(前・後)	須恵器, 土師器
36	〃B遺跡	〃	包含地	扇状地・水田	弥生中期	弥生土器, 打製石斧
37	〃	〃	〃	〃・〃	古墳(前・中)	土師器片
38	〃	〃	〃	〃・〃	奈良・平安	須恵器, 土師器等
39	〃C遺跡	〃	〃	〃・〃	古墳前期	土師器片
40	出雲じいさまだ遺跡	出雲町(アラタマシ)	〃	〃・〃	平安	須恵器
41	示野中桜田遺跡	示野中町	〃	平地・水田・道路	〃	〃, 土師器
42	松村高見遺跡	松村町(タカミ)	〃	〃・水田	弥生	土器, 石斧, 管玉, 同未製品
43	松村B遺跡	〃	〃	〃・〃・宅地	縄文	土器・石斧, 石鏃
44	〃	〃	〃	〃・〃	弥生	土器
45	〃	〃	〃	〃・〃	江戸	伊万里染付
46	松村どのまえ遺跡	松村町(ドノマエ)	包含地	平地・水田・宅地	弥生	土器, 石鏃
47	松村A遺跡	〃	〃	〃・水田	縄文(後～晩期)	土器, 打製石斧, 石鏃, 磨製石斧
48	〃	〃	〃	〃・〃	古墳	土師器
49	〃	〃	〃	〃・〃	室町	井戸枠, 管状木器
50	松村平田遺跡	〃（ヒラダ）	〃	〃・〃	弥生	土器, 石斧, 石鏃
51	松村西の城遺跡	〃（ニシノシロ）	〃	平地・水田	古墳	土師器
52	〃	〃（〃）	〃	〃・〃	平安	須恵器
53	松村寺の前遺跡	〃	〃	〃・宅地	室町	五輪塔(空輪部)
54	畝田御台場遺跡	畝田町	堡跡	〃・〃	江戸	
55	畝田首戸遺跡	〃（ナベタ）	包含地	扇状地端・水田	平安前期	墨書土器
56	畝田B遺跡	〃	〃	〃・〃	弥生	弥生式土器・石鏃
57	〃	〃	〃	〃・〃	古墳	土師器, 須恵器
58	〃	〃	〃	〃・〃	奈良・平安	土師器片, 須恵器片
59	畝田C遺跡	〃	〃	〃・〃	弥生	土器片, 石鏃, 扁平片刃石斧
60	〃	〃	〃	〃・〃	古墳前期	土師器片
61	〃	〃	〃	〃・〃	奈良・平安	須恵器, 土師器
62	畝田無量寺遺跡	〃・寺中町・無量寺町	〃	〃・〃	弥生	土器, 石鏃
63	〃	〃・〃・〃	〃	〃・〃	古墳(前・後)	土師器, 須恵器
64	〃	〃・〃・〃	〃	〃・〃	奈良・平安	墨書土器, 須恵器, 土師器
65	畝田遺跡	〃（ホリノウチ）	〃	〃・〃	縄文晩期	土器片, 石錘, 小型磨製石斧, 凹石
66	〃	〃（〃）	〃	〃・水田一部宅地	弥生中期	壺, 甕, 高杯(弥生式土器), 環状石斧, 石鏃, 硬玉製勾玉
67	〃	〃（〃）	〃	〃・水田	古墳前期	土師器片, 碧玉原石
68	〃	〃	〃	〃・〃	奈良・平安	須恵器片・土師器片
69	〃	〃	〃	〃・水田一部宅地	鎌倉・室町	珠洲焼片, 井戸枠, 越前焼片, 土師器片, 青白磁小片
70	畝田・大徳川遺跡	〃	〃	〃・〃	奈良・平安	土師器, 須恵器
71	〃	〃	〃	〃・〃	鎌倉・室町	珠洲焼片・越前焼片, 曲物製井戸枠, 下駄
72	畝田寺中遺跡	〃・寺中町	〃	扇状地・水田	古墳(前・後)	土師器, 須恵器, 墨書土器
73	〃	〃・〃	〃	〃・〃	奈良・平安	須恵器
74	寺中B遺跡	寺中町	集落跡	扇状地端・水田	縄文晩期	打製石斧, 石鏃
75	〃	〃	包含地	〃・〃	弥生中期	土器片
76	〃	〃	〃	〃・〃	古墳前期	土師器
77	寺中遺跡	〃	〃	〃・〃	弥生中期	土器, 磨製石斧, 石鏃, 砥石
78	〃	〃	〃	〃・〃	古墳前期	土師器
79	金石本町遺跡	金石本町	集落跡	扇状地端・水田一部宅地	奈良・平安	土師器(甕, 高杯), 須恵器(甕, 杯), 墨書土器(「東」記銘)
80	桂遺跡	桂町	包含地	扇状地端・水田	古墳前期	土師器(甕, 高杯, 壺)
81	〃	〃	〃	〃・〃	中世	珠洲焼, 加賀焼, 越前焼, 美濃焼片, 石鍋片, 北宋銭
82	無量寺B遺跡	無量寺町	〃	〃・水田・宅地	古墳	土師器
83	無量寺遺跡	〃	〃	〃・宅地一部水田	古墳前期	土師器多数
84	〃	〃	〃	〃・〃	鎌倉・室町	珠洲焼片, 石臼, 越前焼片, 漆器椀
85	無量寺金沢港遺跡	〃	〃	扇状地端・金沢港湾内	縄文	土器片
86	〃	〃	〃	〃・〃	弥生中後期	〃
87	〃	〃	〃	〃・〃	古墳前期	土師器
88	金石北遺跡	金石北町	〃	平地・水田		〃

※　分布表は,『石川県遺跡地図』（改訂版）に一部加筆して作製している。

で，北塚式土器の標式遺跡である。北塚Ａ遺跡が後期前葉に廃絶した後，当平野では一時集落形成が途絶える。このことは縄文海進・海退と深い関係をもつものと考えられている。しかし，後期後葉頃になると南南西約6.8kmに巨大木柱遺構群の検出で全国的に注目された新保本町（しんぽほんまち）チカモリ遺跡（県指定史跡）が集落形成をはじめる。この遺跡より南西約1.2kmに，県下最大の縄文集落跡で著名な野々市町（ののいち）御経塚（おきょうづか）遺跡（国指定史跡）が位置し，西1.7km隔てて中屋（なかや）遺跡が立地している。いずれも縄文晩期の標式遺跡であり，1.7km内に鼎立するように大集落を構成しているが，そうした背景として，充分な食料資源が確保できる環境であったことと，豊富な地下水自噴の恵みなどが考えられている。

ところで，該期になると本遺跡近辺においても漸く遺跡が分布しはじめる。1970（昭和45）年，金沢港南部地区造成工事中に本遺跡が発見され，緊急発掘が実施されている。調査の結果，中屋式（晩期前～中葉）土器を主に下野（しもの）式（晩期後葉）土器が出土している。それと同時に稲の花粉が検出され，藤則雄氏は，この稲の花粉分析を通して「縄文晩期農耕論」を学界に提起している。



第５図　近岡地内等における過去の発掘調査地点（Ｓ＝１/10,000）

しかし，いまだ通説化するに至っていない。南西に近接する戸水C遺跡は，若干の縄文式土器片が採集されており，本遺跡との関連が想定されている。その西方には，無量寺金沢港遺跡が所在している。南西約3.5kmの距離にある松村A遺跡は，地表下約1.5kmの地点より中屋式土器が出土し，晩期前葉に比定されている。この遺物包含層の確認によって，河川の沖積作用による厚い堆積層下に該期の遺跡が，かなり存在することを予想させた。この遺跡東隣に松村B遺跡，さらに東方に西念クボ遺跡，北方には畝田遺跡，寺中B遺跡などが周知されている。中期以降，晩期前半にかけてみられる集落の丘陵地から低湿地への進出は，狩猟・採集による自然経済社会の転換の兆しを示唆する現象といえよう。

長く続いた縄文時代に終りを告げ，水稲耕作を主とする農耕文化の弥生時代になると，本遺跡南西に戸水C遺跡が所在する。北陸で最初の弥生式土器である柴山出村式（中期初頭）と後続する小松式（中期後葉）併行期の土器数片が出土している。南西部微低地上に立地する寺中遺跡は，数次にわたって調査されている。多数の土壙墓群と小松式土器と一部戸水B式土器とともに，稲作に関連すると考えられる石庖丁などが検出されており，当該地の中核的な集落と考えられている。南南西約2.3kmにあたる戸水B遺跡は，多量の凹線文系土器を出土し，畿内第Ⅳ様式に比定される標式遺跡である。南方約2.6kmにある西念・南新保遺跡は，住居跡・井戸・土坑・溝などの遺構と漆を施した木製大型高杯や石剣など多彩な遺物を検出し注目をあつめた。中期から後期にかけて営まれた大きな集落であることが判明している。その他の遺跡として，近岡カンタンボ遺跡，畝田・無量寺遺跡，藤江B遺跡，二口町遺跡，畝田C遺跡，無量寺金沢港遺跡，南新保B遺跡などが周知されている。

弥生時代の後期終末から古墳時代初頭の移行期になると，従来からの農業技術の蓄積と労働力の集約化によって，農業生産は大きく発展を迎え，これらを経済基盤として，各地には急激な遺跡増加現象がみられる。この付近では，本遺跡をはじめ戸水C遺跡，無量寺遺跡，同B遺跡，南新保三枚田遺跡，同C遺跡，同D遺跡，畝田遺跡，桂遺跡，寺中遺跡，同B遺跡など数多くの遺跡が分布している。

西南西約2.2kmの距離にある無量寺B遺跡では，月影式期の溝より五銖（こしゅ）錢をモチーフとした双頭龍鳳文鏡系（舶載鏡）の鏡が出土して注目された。今年度調査された畝田遺跡からは，南北方向に流路する大溝より，ヘラによる円弧・斜行線文様を施したきわめて特異な赤彩広口壺や，時期比定に好資料の完形品土器とともに，鍬・鋤・杵などの農耕具を中心に多数の木製品が出土している。本遺跡大溝からも多量の月影式土器とともに鍬・鋤などの木製品が出土しており，このような，自然遺物の保存状態が良好であるのは，低温の地下水の存在によって土壌中の酸素が不足し，腐植に必要な好気的微生物の活動が不活発になるためである。したがって当該地のように，地下水位の高いところでは自然遺物は静かに眠り続けているので，その寶庫であると言っても過言ではない。一方，墓制関係では戸水C遺跡から前方後方形周溝状遺構，畝田・寺中遺跡では方形周溝墓，南新保D遺跡より円形周溝状遺構などが検出され，当平野における墓制研究に重要な資料を提供している。

前時代と政治的・社会的な変革をみる古墳時代になると，本遺跡南南西約５.３kmに古府クルビ遺跡が所在する。該期では最も早い段階に比定される標式遺跡である。この遺跡より東方約600ｍ隔てる高畠遺跡は，畿内布留式併行期の標式遺跡である。多数の土壙墓とともに，石釧破片や管玉未製品などが検出され，玉作工人の集団墓地と考えられている。

当平野における有力支配者層が眠る古墳は，東方に連なる丘陵上に築造されている。森本丘陵では，弥生式時代後期末より継続的に造墓されている七ッ塚古墳群をはじめ，法華堂古墳群，小坂古墳群，神谷内古墳群が分布している。また，野田山山頂部には野田山三角点古墳，山麓では長坂二子塚古墳などが長坂古墳群を構成している。一方，平野部では平地に築造されていることで著名なおまる塚古墳を中心に北塚古墳群が形成されている。

律令時代になると，当周辺は越前国加賀郡八郷のうちの一つ大野郷に属している。しかし，越前の国域が広大で支配が行き届かない情況などから，平安前期の823（弘仁14）年，最後の一国建置策によって，加賀国として立国し，北半分は加賀郡に，南半分は石川郡に分割している。

ところで，本遺跡より「依」と銘記された墨書土器が出土している。 この墨書土器は， 周辺の遺跡よりこれまでにかなりの数が採集されており，文献資料の限界を克服する資料として貴重な成果を上げている。戸水Ｃ遺跡から，大型掘立柱建物跡・井戸・溝などの遺構，緑釉・灰釉陶器・硯・和同開珎・斎串とともに，「依」・「東」・「上」と記した墨書土器が出土している。一般集落跡とは大きく異なる多彩な出土品，建物遺構から，遺跡の性格をめぐって論議がかもされ，加賀郡津かと想定されている。南方約1.3kmの大友遺跡では，特徴のある方形単筒井戸をはじめ，柱穴・溝などとともに，「依」の墨書土器が出土している。南方約2.6kmの西念・南新保遺跡から，桁行４間×梁行２間の掘立柱建物跡と「東」・「庄人」と判読できる墨書土器が出土している。この遺跡より南西約１km隔てる藤江Ａ・Ｂ遺跡は，桁行６間×梁行３間の西廂を備えた掘立柱建物跡と多量の墨書土器を検出している。Ａ遺跡より「石」・「川」・「稲」の文字，Ｂ遺跡より「石田庄」・「石田」・「依」などの墨書土器が出土していることから，文献史料にみえない初期荘園「石田庄」の庄家跡と考えられている。南西約2.2kmの畝田無量寺遺跡は，桁行７間×梁行３間の大型建物跡をはじめ，数棟の掘立柱建物跡・井戸・柵列の遺構群が検出され，井戸内より出土した「庄」の墨書土器などから，官衛・荘家跡もしくは上級官人の居宅と想定されている。その他では，畝田首戸遺跡より「浄」・「上」の文字，金石東遺跡より「主」，その付近より「東」の文字が出土している。以上，周辺遺跡より出土した墨書土器を列挙してみたが，共通性をもつ「依」・「東」・「庄」・「上」の文字の存在は注視される。また，古代大野郷と，その周辺の集落分布を解明していく上で墨書土器のもつ意義はますます重視されていこう。

中世になると，本遺跡の所在する近岡・直江・大友などは倉月荘に含まれ，西の富積保と接している。本遺跡の中世遺物としては，珠洲焼・越前焼・土師質灯明皿などと曲物製井戸枠が出土している。この曲物製井戸枠の出土例は戸水Ｃ遺跡，畝田遺跡，松村どのまえ遺跡，普正寺遺跡など近距離の間から多量に検出されていることは注目される。

戸水Ｃ遺跡は，掘立柱穴群・溝・土坑などの遺構と珠洲焼・加賀古陶・瀬戸天目・土師質土器

・漆器・箸状木器などが検出され，港湾集落跡と理解されている。西南西約3.5km隔てた犀川河口には，中世港湾都市として著名な普正寺遺跡が立地する。1965（昭和40）年，犀川護岸工事中に発見され，五輪塔，寶篋印塔，板碑，蔵骨器などと付近から銅製懸仏，人形など宗教関係の遺物が出土し，荘官級の墓地跡であることが判明した。その後，1983（昭和58）年の調査では，中国製青・白磁，渡来銭，柿経，鞴の羽口，鉄滓など日常関係品が多量に出土している。こうした出土品から，中世後期の港湾都市にみられる鍛冶師や檜物師・石工・木工などの手工業者が居住し，商業経済活動が活発に展開されていたことが窺知される。この遺跡と中世の大野荘湊を直接結びつける資料は現在のところ見当らないが，その可能性は高いものと考えられる。

ところで，本遺跡に近接して流れる大野川は，日本海海運の隔地間交易の要港であった大野荘湊と後背地内陸部（生産地及び消費地）への物資の供給・輸送にと連結し，その周辺地域における商品流通の展開の上で，当河川の水運が重要な役割を果たしていたのである。

引　用・参　考　文　献（五十音順）

浅香年木・田川捷一他　『角川日本地名大辞典』17　石川県　角川書店　1981年　東京。

石川県立埋蔵文化財センター編　『石川県遺跡地図』　石川県教育委員会　1980年　金沢。

加能史料編纂委員会編　『加能史料』　奈良・平安Ⅰ　石川県　1982年　金沢。

――――――――　『加能史料』　平安Ⅱ　石川県　1985年　金沢。

河村好光他　『金沢市戸水C遺跡発掘調査概報―金沢港泊地造成事業関係埋蔵文化財発掘調査概要報告書―(4)』　石川県教育委員会　1981年　金沢。（以下「金沢港泊地…」は省略）

楠　正勝　『金沢市新保本町東遺跡・西遺跡　金沢市近岡カンタンボ遺跡』　金沢市教育委員会　1985年　金沢。

小嶋芳孝　「北加賀地域古墳群分布調査報告書」『石川考古学研究会々誌』第22号　石川考古学研究会　1979年　金沢。

高堀勝喜・櫻井甚一・浅香年木・吉岡康暢他　『普正寺』　石川考古学研究会　1970年　金沢。

出越茂和　『金沢市畝田・無量寺遺跡』　金沢市教育委員会　1983年　金沢。

――――　『金沢市無量寺B遺跡』　金沢市教育委員会　1984年　金沢。

戸澗幹夫・栃木英道　『金沢市近岡遺跡 (7)』　石川県立埋蔵文化財センター　1984年　金沢。

――――・――――・三浦純夫他　『北塚遺跡群』　石川県立埋蔵文化財センター　1985年　金沢。

橋本澄夫　「砂丘遺跡」『金沢周辺の第四系と遺跡』　北陸第四紀研究グループ　1975年　金沢。

――――・南　久和　『金沢市高畠遺跡』　金沢市教育委員会　1975年　金沢。

平田天秋・東四柳史明　『金沢市・戸水C遺跡発掘調査概報』　石川県教育委員会　1976年　金沢。

福田弘光編　『大徳郷土史』　大徳公民館　1970年　金沢。

藤　則雄・四柳嘉章　「金沢の縄文晩期近岡遺跡からの稲の発見」『考古学研究』第17巻第3号　考古学研究会　1971年　岡山。

南　久和　『金沢市二口六丁遺跡』　金沢市教育委員会　1983年　金沢。

宮本哲郎・楠　正勝　『金沢市大友遺跡・近岡遺跡』　金沢市教育委員会　1984年　金沢。

湯尻修平　『金沢市戸水B遺跡発掘調査報告』　石川県教育委員会　1975年　金沢。

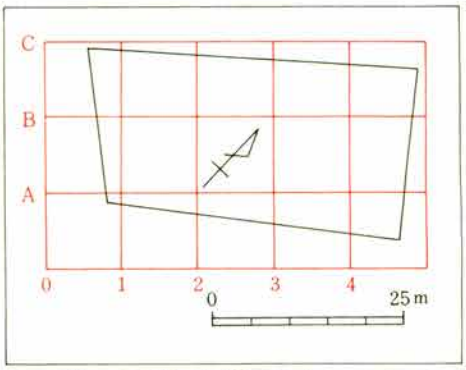
米沢義直　「金沢市松村晩期縄文遺跡概報」『石川考古学研究会々誌』第12号　石川考古学研究会　1969年　金沢。

第3章　遺　　構

第1節　基本層序と遺構の概要

発掘調査区（第6図）

発掘調査区は略台形を呈し，北西辺約43m，南東辺約39m，北東辺約23m，南西辺約22mを測る。面積は909㎡である。調査区全体に一辺10mのグリッドを組み，各区画を西隈杭名で代表させた。



第6図　発掘調査区模式図（S＝1/1,000）

基本層序（第7図・第8図）

調査区の現表面の海抜高度は約1.6mである。調査区全体に認められる土層は，表土層（第I層），盛土層（第II層），旧耕土層（第IIIa層）の3層であり，厚さは各々20cm程度を測る。それより下位の覆土は地点により異っている。大溝上には厚さ30cm前後の淡灰色粘質土層（第IIIb層）が堆積している。これは，第IIIa層と基本的には同一のもので，大溝上層覆土とした黒(灰)色粘質土をブロック状に含むものである。一方，大溝より西側では，厚さ20cm前後の灰色粘質土層（第IV層）が堆積している。これは近代の遺物が出土した旧河道（もしくは用水跡）上にも認められることから，近代以降に堆積したものと考えられる。それより下位の覆土は遺構覆土及び遺物包含層である。遺物包含層としては，旧河道より西側にみられた中世・近世の遺物を少量含む厚さ約10cmの黒褐色粘質土層（第VII層）と，旧河道～大溝間に部分的にみられた淡灰褐色粘質土層（第XII層）があげられる。後者の包含層からは，縄文時代晩期（中屋式）の深鉢片（第46図1）が出土した。調査区の地上面の海抜高度は50cm前後で，若干の高低差があるとはいえ，特定の方向への傾斜は示さず，ほぼ水平といってよいものである。

第7図
基本層序模式図

遺構の概要（第8図・図版第2）

本調査では，6基の土坑と7条の溝，そして旧河道が検出された。このうち調査区の南西側に位置する6基の土坑と3条の溝（第1号・第2号・第4号溝）は，覆土が基本層序で触れた灰色粘質土（第IV層）に酷似することから，近代以降の所産と考えられる。調査区の中央からやや北東よりに位置する旧河道からは明治時代の一銭銅貨が出土した。調査区の北側に位置する第6号溝は出土遺物から平安時代の所産である。調査区の中央に位置する第3号溝からは，古墳時代前期（高畠式期）の遺物が出土している。調査区の北東側に位置する大溝からは，弥生時代終末（月影期）の遺物が多量に出土した。調査区の北東側に位置し大溝に接続する第5

号溝は，出土遺物はなかったが，覆土は大溝中層覆土と同一の灰色弱粘質土であった。

第2節　土　　坑（第8図・図版第2）

各土坑の位置関係等

6基の土坑は，調査区中央から南西側（旧河道の西側）に近接して検出された。東西方向にのびる第4号溝の北側に，西から第1号土坑，第6号土坑，第6号土坑の北側に第5号土坑，その北側に第4号土坑，第4号土坑の西側に第3号土坑，その西側に第2号土坑が位置する。第1号・第2号土坑は，南北方向にのびる第1号溝の東側にやや離れて位置する。平面方形，断面逆台形を呈するものがほとんどであり，長径方位はすべてほぼ南北を示す。覆土は灰色粘質土の単一土層で，遺構の概要で述べたように，第1号・第2号・第4号溝と同様，近代以降の所産と考えられる。各土坑とも出土遺物はなかった。

各土坑の形状と法量等

第1号土坑　平面プランは，南東部がやや不整形ながら，概略方形を呈し，長径3.9m，短径2.5m，深さ約40cmを測る。

第2号土坑　平面プランは方形を呈し，長径1.3m，短径0.8m，深さ約40cmを測る。

第3号土坑　平面プランは，長方形と正方形を呈する2基の土坑がL字形に接続したような形状をなしているが，切り合い関係は確認できなかった。それぞれ長径3.2m，短径0.9m，1.8×1.8mを測り，深さはともに約30cmを測る。

第4号土坑　平面プランは台形に近く，長径1.5m，短径1.0m，深さ約40cmを測る。第3号溝を切っている。

第5号土坑　平面プランはほぼ正方形（2.7×2.7m）を呈し，深さ約30cmを測る。

第6号土坑　平面プランは，北側がやや不整形であるが方形に近い形状を呈する。長径4.2m，短径3.0m，深さ約50cmを測る。

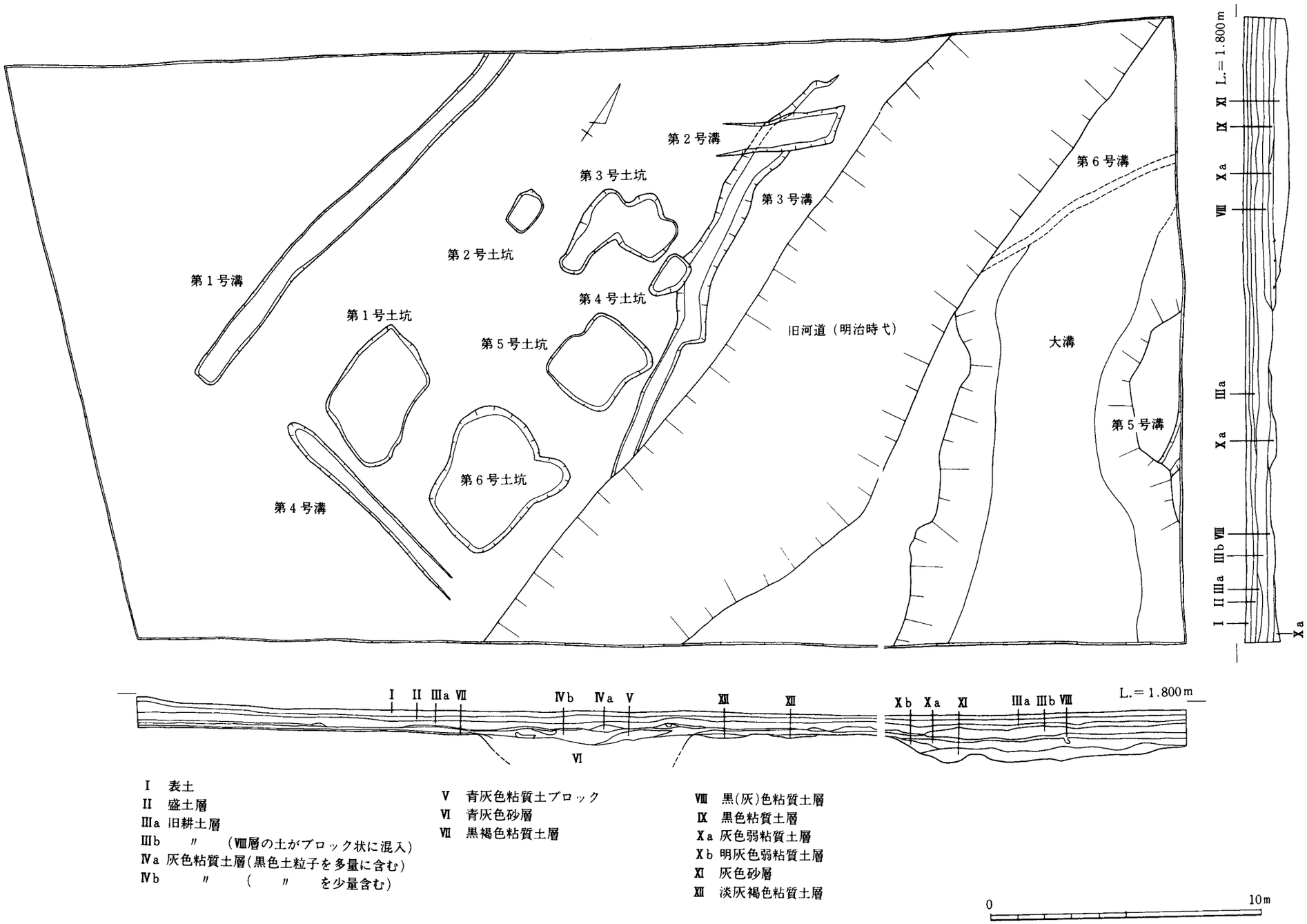
第3節　溝

1　近代溝（第8図・図版第2）

各溝の位置関係等

近代溝（第1号・第2号・第4号溝）は，前述の6基の土坑をとり囲むような位置関係にある。南北方向にのびる第1号溝は，第1号・第2号土坑の西側に，東西方向にのびる第4号溝は，第1号・第6号土坑の南側に位置する。第2号溝は北東から南西方向にのびるもので，第3号・第4号土坑の北側に位置し，第3号溝を切っている。覆土は灰色粘質土の単一土層で，摩耗した土器小片が少量出土したが，実測可能なものはなかった。

各溝の形状と法量等



第8図　遺構全体図（S＝1/180）

第1号溝　上幅0.8～1.1m，深さ10～20cmを測る。断面は逆台形，溝底面のレベル差はほとんどない。長さ16.5m以上，北側は調査区外へのびている。

第2号溝　上幅1.2～1.4m，深さ10～20cmを測る。断面は逆台形，南西側は徐々に浅くなり解消される。長さ3.5m。

第4号溝　上幅0.6～0.8m，深さ10～30cmを測る。断面は丸みをおびた逆台形，東側は徐々に浅くなり解消される。長さ8.5m。

2　第3号溝（第8図・図版第2）

位置関係等　調査区の中央（旧河道の西側）に位置し，ほぼ南北方向にのびている。北側では第2号溝に，中央付近では第4号土坑に，南側では旧河道にそれぞれ切られている。

法量と形状等　上幅0.5～1.3m，深さ10～20cmを測る。幅は南側では狭く北側では広い。断面は概ね逆台形を呈し，覆土は黒色弱粘質土の単一土層である。北側は徐々に浅くなり解消される。遺物は北側を中心に土器・木器・石器（古墳時代前期高畠式期の所産）が少量出土している。（第4章第2節参照。）

3　第5号溝（第9図・図版第2）

位置関係等　調査区の北東側（大溝の東側）に位置する。ほぼ南北方向にのびると思われるが，北側は調査区外へのび，南側は大溝に接続し，長さ約1.5mを確認したにとどまった。

法量と形状等　上幅0.8m前後，深さ10～20cmを測る。断面は逆台形を呈し，覆土は大溝中層覆土と同一の灰色弱粘質土の単一土層である。出土遺物はなかった。

4　第6号溝（第9図・図版第2）

位置　調査区の北側(隅)に位置し大溝を切っている。西側は旧河道に切られ，北東側は調査区外へのびている。

検出状況　同地点は遺構（大溝）検出時および大溝上層覆土掘り下げ時には，多量の弥生土器が出土しており，大溝の他の地点と何ら変わるところはなかった。ところが，大溝中層覆土掘り下げ時に，同地点から木簡・人形・「依」と墨書された須恵器坏が出土し，調査区北東壁のセクションを精査したところ，大溝中層覆土を切って黒色粘質土が堆積しているのが確認された。もとより大溝とともに旧河道に切られており，激しい涌水のなか，調査区の北隅にあたるという制約もあって，遺構を平面的に把握するのは困難であったが，遺物の出土状況と先の北東壁セクションを主たる根拠として，本書では溝状遺構として扱った。

法量と形状等　上幅4m以上，深さ約20cmを測る。断面は南東側のたちあがりが丸みをもちゆるやかで，溝底面は若干の高低差はあるものの比較的平坦である。南北あるいは北がやや東へふれるような方向にのびるものと考えられる。覆土は黒色粘質土の単一土層である。遺物は木簡・人形などの木器・木製品，墨書土器をはじめとする須恵器（いずれも平安時代の所産），および古墳

時代後期の須恵器が少量出土している。(第4章第3節参照。) このうち，古墳時代後期の須恵器の出土から，該期の遺構の存在も考えられるが，確認はできなかった。

5　大　　溝（第9図・図版第2・3）

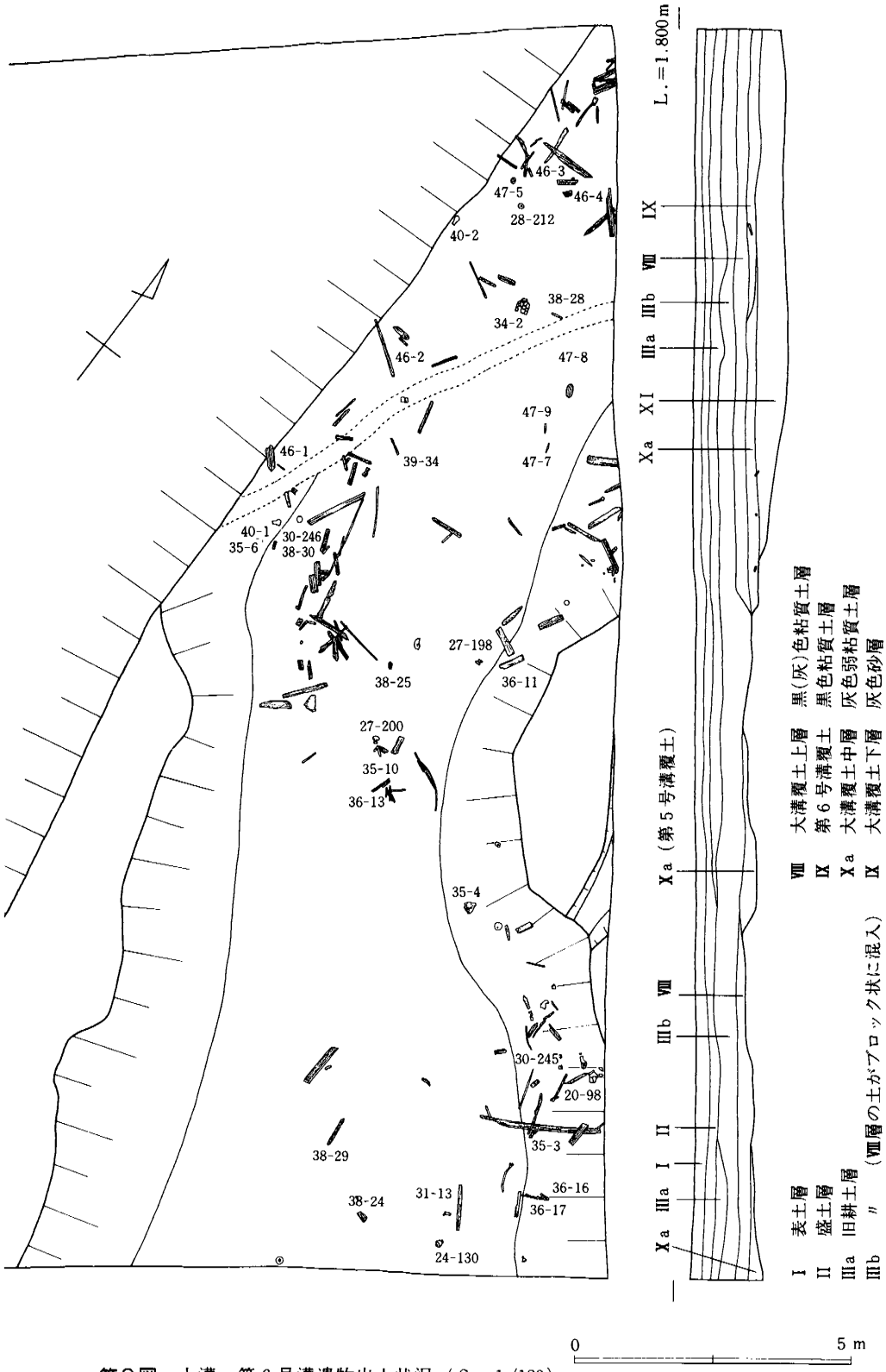
位置　調査区の北東側に位置し，南東側は調査区外へのび，北西側も第6号溝・旧河道に切られてはいるが，調査区外へのびている。東側では第5号溝が大溝と接続している。

法量と形状等　上幅は6～10m，深さは約80cmを測る。南東から北西方向にのびるが，溝底面のレベルは海面下30cm前後でほとんど差がない。断面は丸みをおびたU字状をなし，肩部の立ちあがりの角度は約25度を測る。

覆土　覆土は三層を判別し得た。上層（第一層）覆土は黒(灰）色粘質土層（厚さ10～30cm)，中層（第二層）覆土は灰色弱粘質土層（厚さ20～40cm)，下層（第三層）覆土は灰色砂層（厚さ20～60cm）である。なお，大溝南西側の立ちあがり部分では，中層覆土に準ずる明灰色弱粘質土の堆積が認められた。このうち上層覆土は，大溝の南西側（旧河道側）では，大溝の上端を越えてなお薄く（厚さ10～20cm）堆積をのばしており，また北西側では第6号溝覆土の上に堆積していることから，厳密には大溝覆土とするには無理がある。これにたいして中・下層覆土は，程度の差こそあれ砂質土を含むもので，特に下層覆土は中層の弱粘質土がブロック状に多量に混入している箇所や，灰色砂層よりさらに粒子の粗い灰色粗砂層となっている地点があり，かなり混然としている。これらのことから，下層覆土堆積時には相当の水流（自然涌水を含む）があり，中層覆土堆積時にもある程度同様の状況が続いたと考えられる。上層覆土は，大溝が中・下層覆土の堆積によって溝としての機能を失ったのちに，いまだ鞍部である中層上面から徐々に堆積したものであろう。

遺物出土状況　遺物は土器・土製品，木器・木製品，石器・石製品，鉄器，植物遺体，動物遺体が多種・多様に出土している。このうち，覆土との関連を出土土器についてみると，遺物整理箱32箱分の出土土器のうち，上層出土は2箱，中層出土は10箱，下層出土は20箱となっており，上層の出土量が圧倒的に少ない。遺存状況は中・下層出土品は良好であるが，上層出土品は摩耗が著しい。時期的には縄文時代晩期の所産（中屋式土器）・弥生時代中期～後期のもの（小松式～法仏式土器）が若干量あるが，圧倒的に弥生時代終末のもの（月影式土器）が多く（第4章第1節参照)，大溝が主として機能していた時期も同期と考えられる。

遺構の性格　本大溝より西側では，高畠式期の第3号溝が存在するのみで他の遺構・遺物（弥生時代～古墳時代）は皆無に近く，また調査区のさらに西側には戸水C遺跡との間に大きな鞍部が介在することが分布調査の結果判明しており，本大溝は近岡遺跡の（南）西端に位置するものと考えられる。ところで本大溝が自然の河川であるのか，あるいは人為的な掘削によるいわゆる遺構であるのかという問題については，調査範囲の制約や軟弱な地盤と激しい涌水という悪条件を考慮すれば一元的な規定は困難である。しかしながら，遺物の遺存状態は上層出土のものを除けば良好であり，かつ完器も相当数含まれることから，それらは単なる流れ込みではなく，該期(月



第９図　大溝・第６号溝遺物出土状況（Ｓ＝１/120）

影期）の人々の本大溝にたいするなんらかの働きかけの結果といえよう。したがって，水流（自然涌水を含む）によって至る所に混乱はみられるものの，覆土は全体としてはほぼ水平堆積していることから，自然の河川を利用したという可能性は否定すべきではないが，肩部の立ちあがりが比較的明瞭に判別し得た箇所もあり，調査区内に限っていえば上流も下流もないことから，本大溝は部分的な改修の可能性を含めて一定程度人為的なものであろうと考えている。

第４節　旧河道（第８図，図版第２）

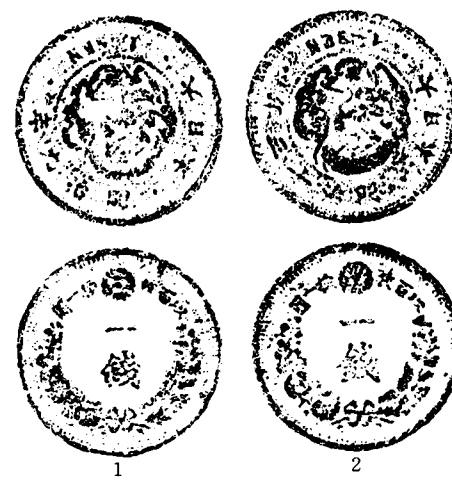
位置　調査区の中央からやや北東よりに位置し，北および南側はともに調査区外へのびている。南西側では第３号溝を切り，北東側では第６号溝および大溝を切っている。

法量と形状等　上幅は６～８ｍを測り，ほぼ南北方向にのびる。覆土は青灰色砂層からなり，激しい涌水のために掘り下げと同時に周辺から砂が崩れ落ち埋没する状態となり，河底の確認はできなかった。

出土遺物（龍一銭銅貨）**等**　近代以降の所産と思われる少量の磁器類とともに一銭銅貨が２枚出土している。また，方向が第１号溝に並行し第４号溝に直交することから，調査区の南西側に位置する近代溝（第１号・第２号・第４号溝）および近代の土坑（第１号～第６号土坑）と同時存在したものと考えられ，旧河道あるいは用水跡と思われる。

出土した２枚の一銭銅貨は，ともに龍一銭銅貨といわれるもので，明治６年～同21年（1873～1888年）までに488,174,149枚発行された。第10図１・２は，それぞれ直径27.90，28.05㎜(規格は27.272㎜)，重さ6.70，6.85ｇ（同7.128ｇ）を測る。表には口を結んだ右向きの龍を中心に，右回りに「本日大」・「年九治明」（第10図２は「年三十治明」）・「１ＳＥＮ」の文字が刻まれ，裏には中央縦に「一錢」，右下に菊，左下に桐，上に菊花を狭み「圓一換」（菊花）「枚百以」の文字が刻まれている。

この龍一銭銅貨は，明治10年までは龍の鱗が魚鱗といわれるタイプが発行され，同年以降は波鱗といわれるものに変わっている。第10図１は前者で，同図２は後者のタイプである。



第10図　旧河道出土龍一銭銅貨拓影（Ｓ＝１／１）

参考文献

青山礼志編著　『新訂　貨幣手帳』　ボナンザ　1982年　東京。

第4章　遺　　物

第1節　大溝出土遺物

1　土器（第12図～第30図1～247・第31図1～13）

大溝から出土した土器は実測し得ただけでも上層で5点，中層・下層で255点（底部片17点を含む）を数える。このうち上層出土土器は，第3章で触れたように上層覆土が厳密には大溝覆土とするのに無理があるため，中層・下層覆土出土土器とは別個に扱うこととする。また，大溝出土土器の主要な所属時期が弥生時代終末（月影期）であるため，弥生時代中期以前等の出土土器（図化し得たもの8点）についても同様に別個に扱いたい。

中層・下層出土土器（第12図～第30図1～247・図版第7～9）

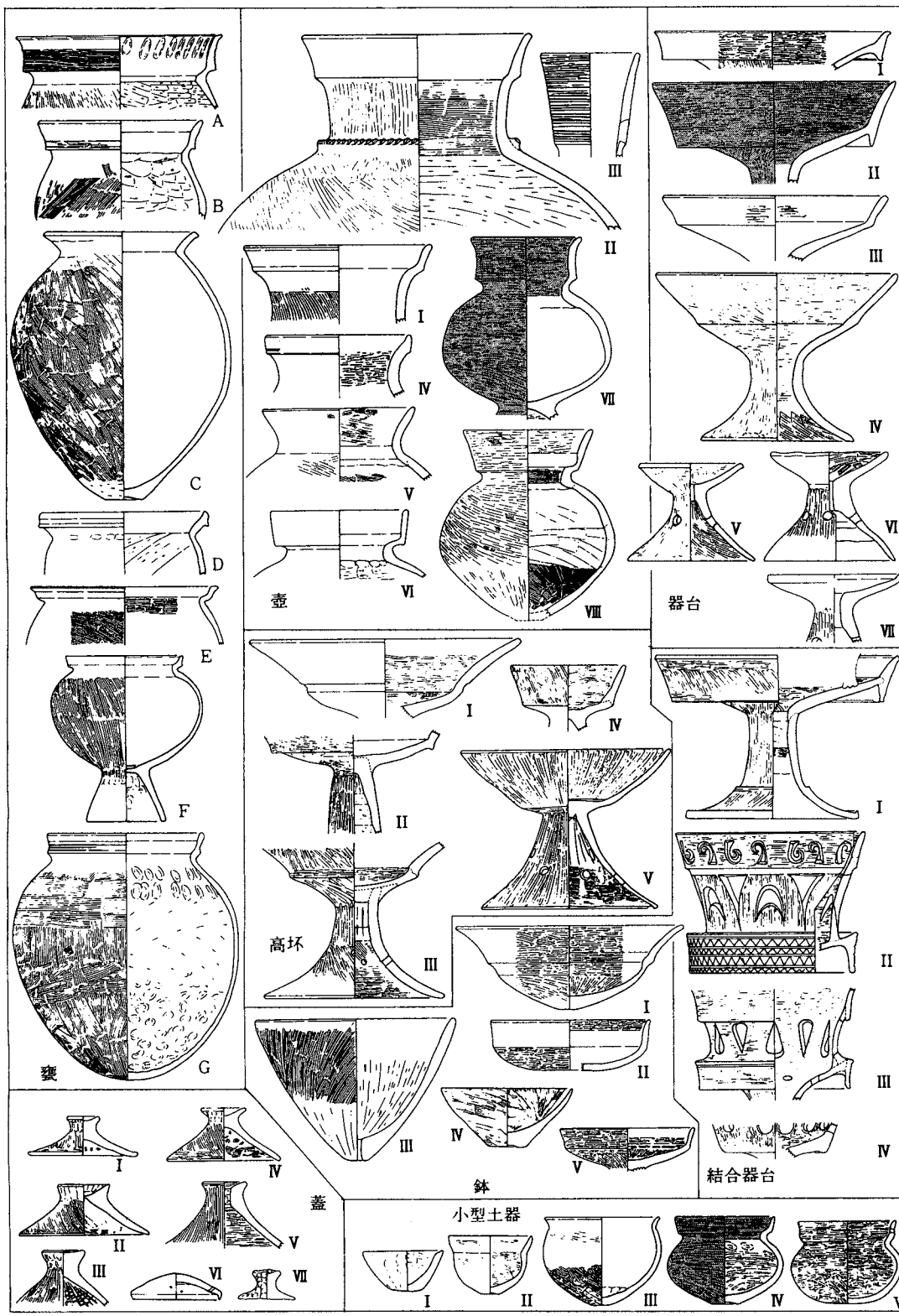
中層・下層出土土器は，総体としては時期差があると思われるが，第3章で触れたとおり，間層をおかず覆土自体にも混乱がみられるため，個々の出土土器に層位にもとづいた時期差を認めるには無理がある。事実中層出土土器と下層出土土器が接合されることも少なくないため，実測図の掲載及び土器の説明は強いて区別しなかった。器種としては，甕形土器・壺形土器・蓋形土器・高坏形土器・器台形土器・鉢形土器・小型土器があり，（個々の出土土器の出土層位，法量，胎土，焼成，色調等は土器観察表を参照していただきたい。）図化不能なものを含めた器種構成比は右表のとおりである。（底部片は含めていない。）なお，図化不能なものの個体数は，甕・壺・鉢・小型土器については口縁部片を数え，全周の¼程度のものを0.25，⅛程度のものを0.125点とし，蓋は鈕部片を，高坏・器台は脚上位屈曲部を含む破片を数え，それぞれ第1位を0か5の概数として表わした。

第2表　大溝中層・下層出土土器器種構成比

器種		構成比(%)	個数	実測個数
甕	A類	30.0	201	51
	B類	11.9	80	20
	C類	2.1	14	9
	D類	2.1	14	9
	E類	1.5	10	3
	F類			2
	G類	0.6	4	4
甕小計		48.2	323	98
壺		10.9	73	33
蓋		7.4	50	30
高坏		15.2	102	12
器台		6.3	42	12
結合器台		3.0	20	10
鉢		6.3	42	22
小型土器		2.7	18	13
合計		100.0	670	230

(1)　**甕形土器**（第12～20図1～98）

甕形土器は，口縁部の形態差によって7つに大分類した。すなわち，擬凹線有段口縁系のものを甕A類，無文（ナデ）有段口縁系のものを甕B類，「く」の字口縁系のものを甕C類，甕B類・甕C類のどちらにも属さず，後述する甕E～G類とも区別されるものを甕D類（付加状口縁系など），受口状口縁系のものを甕E類，「S」字状口縁系のものを甕F類，山陰系のものを甕G類とした。さらに甕A類を10小形式に，甕B類を5小形式に，甕C類を5小形式に，甕D類を2小形式に，甕G類を2小形式に細分類した。細分類についても



第11図　大溝中層・下層出土土器形式分類図（S＝1/6）

口縁部の形態差によるところが大きいが，法量の差によった場合もある。

甕A類（第12～16図1～51）

有段口縁をもつ甕のうち，口縁帯の外面に擬凹線を施したもの。口縁部の形態差および法量の差によって10小形式に分類した。器面は外面頸部及び肩上位をヨコナデ，胴部をハケ，内面は口縁部～頸部をヨコナデ，胴部をヘラ削りで仕上げる。口縁内面に連続する指頭圧痕をもつもの，内面頸部及び肩上位にハケ状具痕を残すものも相当数ある。また外面に煤，内面に炭化物の付着が認められるものがほとんどである。

A Ⅰ類（第12図1～3）　口縁部が短いもの。擬凹線は3～7条。口径16.1～20.0cmを測る。3は1・2に比較して薄手である。

A Ⅱ類（第12図4・5）　口縁部は比較的長いが，わずかに外反する程度でほぼ直立するもの。口縁部の器肉は一様である。擬凹線5～8条。口径15.1～17.0cmを測る。

A Ⅲ類（第12図6～10）　口縁部は外傾・外反するが、丸縁の端部は比較的厚く、口縁内面には連続する指頭圧痕を残すもの。擬凹線7～9条。口径17.6～19.8cmを測る。

A Ⅳ類（第12図11～15・第13図16～20）　口縁部が外傾・外反し，端部が先細りの丸縁となり,口縁内面に連続する指頭圧痕を残すもの。擬凹線6～9条。口径17.4～20.8cmを測る。

A Ⅴ類（第13図21・22・第15図45）　内面口縁端部がはねあげ状に肥厚するもの。擬凹線8～10条。口径22.0～33.6cmを測り，21・22はやや大形，45は大形品でもある。

A Ⅵ類（第13図23～29・第14図30・31）　口縁部は外傾・外反し，内面屈曲部がヨコナデによって凹み，その上端に稜をもつもの。指頭圧痕はもたない。擬凹線7～9条。口径15.8～20.2cmを測る。

A Ⅶ類（第14図32～36）　口縁部が外傾・外反し，内面が「く」の字状を呈するもの。比較的短く肉厚である。擬凹線4～8条。口径14.8～21.6cmを測る。

A Ⅷ類（第14図37～42）　口縁内面の屈曲が弱く，厚さを徐々に減じながら先細りの端部へ至るもの。口縁内面に指頭圧痕はもたない。擬凹線7・8条。口径17.0～19.9cmを測る。

A Ⅸ類（第15図43・44・46・47・第16図50・51）　口径20.6～33.6cmを測る大形品。擬凹線7～10条。43は外面肩部に波状文を施す。44は口縁部が内傾する。また，完形の51は口径30.6，底径5.6，器高45.0cmを測り，なかでも大形である。

A Ⅹ類（第16図48・49）　口径12.0～13.8cmを測る小形品。擬凹線を5～7条施す。

甕B類（第17図52～64・第18図65～71）

有段口縁をもつ甕のうち，口縁帯の内外面をヨコナデによって調整したもの。口縁部の形態差によって5小形式に分類した。器面は胴部外面をハケ，同内面をヘラ削りによって仕上げるものがほとんどであり，ほかに口縁部内面や頸部内面に連続する指頭圧痕をもつものがある。

B Ⅰ類（第17図52～59）　口縁部が長く，端部が先細りの丸縁となるもの。口縁部は概ね外傾・外反する。口径13.4～24.6cmを測る。52～56はやや小形，59はやや大形。

B Ⅱ類（第17図60）　口縁部が内傾するもの。端部は比較的肉厚の丸縁。口径21.9cmを測る。

B Ⅲ類（第17図61・62）　口縁部が短く，内面では「く」の字状を呈するもの。口径15.6～19.0cmを測る。

B Ⅳ類（第17図63・64・第18図65）　口縁部は短いが，内面の屈曲が比較的明瞭なもの。口径13.8～16.4cmを測る。

B Ⅴ類（第18図66～69）　口縁端部が肉厚な丸縁で，外面屈曲部上位を強いヨコナデによって凹ませているもの。口径12.8～19.9cmを測る。66はやや小形。

このほか，口縁部外面に斜向刻目をもつ第18図67，胴部外面下半をハケの後ナデによって仕上げた小形の第18図68（口径10.4，底径1.7，器高14.9cmを測る）も甕B類に属するが，67は細片であること，69は全体的な印象が他と異なることから，小分類は行わなかった。

甕C類（第19図81～89）

「く」の字口縁をもつもの。口縁部の形態差と調整方法の差によって5小形式に分類した。器面はハケ・ナデにより仕上げるものがほとんどであるが，第19図86は胴部内面ヘラ削り，第19図87～89は胴部外面をタタキで仕上げている。

C Ⅰ類（第19図81）　外反する口縁の端部に明瞭な外傾する面をもつもの。口径13.9，底径3.5，器高25.3cmを測る。

C Ⅱ類（第19図82・83）　外反する口縁の端部がやや肉厚な丸縁となるもの。口径14.8～16.4cm（83の底径は3.0，器高は25.2cm）を測る。

C Ⅲ類（第19図84・85）　外反する口縁の端部が先細りの丸縁となるもの。口径13.5～18.6cm（やや小形の84は底径1.9，器高17.4cm）を測る。

C Ⅳ類（第19図86）　やや内湾する口縁の端部（丸縁）付近が内外から押えたようにわずかに凹むもの。口径14.4cmを測り，やや小形。胴部内面はヘラ削りで仕上げている。

C Ⅴ類（第19図87～89）　胴部外面をタタキで仕上げるもの。口径14.6～19.6cmを測る。87は平縁。やや小形の88は丸縁。89は頸部と口縁上位で二度ゆるく屈曲し，端部は内湾ぎみ。

甕D類（第18図72～80）

甕B類・甕C類のいずれにも属さないもの。口縁部の形態差によって大きく二つに分類し得る。器面はハケ・ナデによって仕上げられるが，胴部内面はヘラ削りで仕上げられる。

D Ⅰ類（第18図72～77）　口縁端部にやや幅広な面をもつが，内面では内上方へ短く屈曲する程度のもの。72・74の面は丸みをもつが，73・75～77はヨコナデによって凹む。75～77の内面端部はナデによってはねあげ状を呈する。口径12.0～19.2cmを測る。74はやや小形。

D Ⅱ類（第18図78～80）　口縁部は平縁「く」の字状を呈するが，短く屈曲の弱いもの。78・79は内面端部がヨコナデによって凹む。口径11.9～14.0cmを測る。

甕E類（第20図90～92）

受口状口縁系のもの。器面はハケ・ナデによって仕上げられるが，91の胴部外面はタタキによっている。口縁端部はいずれも水平な面をもつ。92は外方向への引きだしが顕著で，逆に90はほとんど突出しない。口縁内面は92が全体的に凹むが，90はあまり屈曲しない。口径15.2～17.2

cmを測る。

甕F類（第20図93・94）

「S」字状口縁系の脚台付甕。口縁部内面はゆるやかに凹む。94は胴部外面以外を，93は胴部以外をナデによって仕上げている。口径10.8～11.4，脚台径7.2～7.5，器高15.6～19.4cmを測り，94はやや小形。

甕G類（第20図95～98）

有段口縁の屈曲部外面が外下方へ突出し，明瞭な稜を形成する山陰系のもの。器面は口縁部をヨコナデ，胴部外面をハケ（肩部は横方向，他は縦方向），同内面をヘラ削り（97は肩部と底部には指頭圧痕が残る）によって調整している。95と完器で丸底を確認し得る97は屈曲部の稜がやや不明瞭。口径13.6～25.2cm(97の器高は23.2cm)を測る。98は大型品で，外面肩部に斜向列点文を施す。

(2)　**壺形土器**（第21～24図99～131）

壺形土器は，口縁部をはじめ各部および全体の形態差と法量の差によって8小形式に分類した。壺形土器は他の器種と比較すると多様性にとんでいるため，分類のための分類にならぬよう，1点のみの出土は分類の対象から除外した。器面はヘラ研磨・ナデによって仕上げるものが多いが，ハケ・ヘラ削りで仕上げる部位やものも少なくない。

I類（第21図99・100）　有段口縁壺で，口縁屈曲部上位が短いもの。頸部外面をハケによっている他は，口頸部はナデ調整。口径16.4～17.2cmを測る。

II類（第21図101・102）　大型有段口縁壺。口縁屈曲部上位がやや長い。口径20.4～21.6cmを測る。

III類（第21図104～106）　細頸有段口縁壺。口縁屈曲部上位が長い。104・105は口縁部外面に擬凹線（22・35条）を施す。105・106は外面と内面口縁上位を赤彩。口径8.6～9.0cmを測る。

IV類（第22図111～113）　口縁端部に面（幅1.4～1.7cm）をもつ壺。112は丸みをもつ面に擬凹線（3条）を，113はやや凹む面に波状文（3条）を施す。口径13.4～16.4cmを測る。

V類（第22図115・116）　「く」の字口縁壺。115は厚手でやや粗製品である。口径14.2～16.2cmを測る。

VI類（第22図117・118）　有段口縁壺で，やや内湾する口縁部がわずかに外傾するもの。口径12.6～16.8cmを測る。

VII類（第23図123～125）　台付有段口縁壺。123は胴部外面中位に突帯（擬凹線を3条施す）をもつ。124・125は外面と内面口縁部を赤彩。口径9.9～10.2cmを測る。

VIII類（第23図126・127・第24図128・129）　有段口縁壺で，口縁部が外傾・外反するもの。127・128はやや厚手，126・129は薄手。口径11.0～13.3cm，129の底径は3.1，器高は15.1，128の器高は推定で17.7cmを測る。

このほかに図化し得たものが12点ある。第21図103は有段口縁壺で，頸部から胴部にかけてはなだらかに広がる。胴部最大径は下位にあり，取手と突帯状の面を有する。口径14.6cmを測る。第22図107～110は口径9.8～11.2cmを測る小形の壺で，107・108・110は有段口縁壺。107は口縁部外面

に擬凹線（９条）をもつ。109は「く」の字口縁系，口縁部は長い。第22図114・第23図120～122は，胴部が球形（114・121）あるいは球形に近い楕円体（120・122）を呈し，口径（114は16.0cm，120～122は10.4～11.6cm）に比較して胴部最大径はかなり大きい。このうち114は外反ぎみの「く」の字口縁をもち，端部は面取りを施している。122は直立する口頸部をもち，平縁の端部は短く外側へ屈曲する。120・121は有段口縁壺で，120の口縁部は屈曲部上位が短く，121は逆に長い。第23図119は，屈曲部上位がかなり長い有段口縁壺で，口縁部外面には擬凹線（22条）を施し，内面上位は赤彩痕が残る。口径15.4cmを測り，大形品か。第24図130は胴部最大径を底部（径4.5cm）付近にもつ中形の壺で，口縁端部を欠いている。第24図131は装飾壺の胴部片で，平行櫛描文と山形文を施す。外面は赤彩しているようである。

また，主として甕・壺のものと考えられる底部片が約240点出土している。このうち第24図132～148の17点を実測した。132は壺Ⅷ類のものと思われる。133も壺であろう。134・135・139～144・148は甕である。145～147は底部穿孔品。136～138は短い脚台あるいは脚台状の突出部をもつものである。なお，底部については，口縁部との重復を避けるため器種構成を考えるうえでの器種には含めていない。

(3) **蓋形土器**（第25図149～178）

蓋形土器は，主として鈕部の形態差をもとに７小形式に分類した。Ⅰ～Ⅳ・Ⅶ類の鈕部上面は凹む。器面はヘラ研磨・ナデ（指頭による押えを含む）によって調整するものが多いが，一次調整のハケ状具痕を残すもの，ハケのみで仕上げたものもある。

Ⅰ類（第25図149～158）　鈕端部に外傾する面をもつもの。鈕部径1.9～4.4cmを測る。156～158はやや小形品（157の体部は直線的）である。

Ⅱ類（第25図159～162）　鈕端部が先細りするもの。鈕部径3.8～4.8cmを測る。159は大形品。159・161は器面（外面）をハケで仕上げている。159～161は器面に煤が付着している。

Ⅲ類（第25図163～169）　鈕端部が比較的肉厚で丸く仕上げるもの。鈕部径2.6～4.2cmを測る。163～166は鈕部上面があまり凹まない。167は鈕部が直立している。168・169はやや粗製品。165・166は赤彩品。167には煤が付着している。

Ⅳ類（第25図170～174）　鈕端部が比較的薄く外へ引きだされるもの。鈕部径3.2～4.2cmを測る。173は体部が内湾ぎみで，鈕端部に水平面をもち，やや小形の赤彩品。174は鈕端部がやや反転する。

Ⅴ類（第25図175・176）　鈕部にいわゆる通気孔をもつもの。鈕部径3.6～3.8cm，孔径1.1～2.1cmを測る。

Ⅵ類（第25図177）　無鈕のもの。口径8.2，器高2.5cmを測る。内湾する体部に二孔一対の孔（径３mm）をもち，口端部は短く内下方へ屈曲する。やや小形の赤彩品。器面はナデ調整。

Ⅶ類（第25図178）　手捏ねによる小形粗製品。口径5.0，器高2.9cmを測る。鈕部上面は凹むが，体部は中実。

(4) **高坏形土器**（第26図179～190）

高坏形土器は，主として坏部の形態差と法量の差をもとに5小形式に分類した。器面はヘラ研磨によって仕上げられるが，部位によってはナデ・ヘラ削り・ハケなどで仕上げる箇所もある。

Ⅰ類（第26図179～184）　坏部が有段のもの。口径21.0～28.0cmを測る。坏底部は内湾し，口縁部は外反する（180・181はあまり外反しない）。179～181は薄手，182～184は厚手である。180・181はやや小形で，181は内外面ともに赤彩品である。

Ⅱ類（第26図185）　坏部は屈曲するが段はもたず（外面では稜をもつ），坏底部が内湾するもの。脚部も内湾するが，下位との境界では屈曲すると思われる。口縁部は外反するであろう。

Ⅲ類（第26図188・189）　坏部は屈曲するが段はもたず，坏底部が外反するもの。脚部も外反しながら広がる。189の脚部径は16.8cm。

Ⅳ類（第26図186・187）　小型高坏。口径10.4～11.2cmを測る。坏底部と体部（口縁部）との境界は屈曲し（186は屈曲部外面に突帯と二段の刻みをもつ）稜をもつ。186は体部（口縁部）が外反し，187はほぼ直線的にのびる。口縁部はともに丸縁。186は口端部内面に赤彩痕を看取し得る。

Ⅴ類（第26図190）　比較的小さい坏底部と内湾する体部・口縁部をもつもの。口径19.6，脚部径16.2，器高14.8cmを測る。脚部には三孔一対（計6個）の孔をもつ。

(5)　**器台形土器**（第27図191～202）

器台形土器は，受部の形態差と法量の差をもとに7小形式に分類した。器面はヘラ研磨・ナデによって仕上げられるが，脚部内面などではハケ・しぼり（痕）を残すものがある。

Ⅰ類（第27図191）　受部が屈曲し，屈曲部外面で下稜をもつもの。下稜端から受端部までの長さは2.7cmと短い。受部径21.4cmを測る。

Ⅱ類（第27図192・193）　受部が屈曲し，屈曲部外面で下稜をもつが，下稜端から受端部までの長さが6.5cmと長いもの。受部径22.2～23.8cmを測る。

Ⅲ類（第27図194・195）　受部は屈曲するが，屈曲部外面で下稜をもたないもの。屈曲部（外面）から受端部までの長さは3.0cmと短い。受部径19.2～20.4cmを測る。

Ⅳ類（第27図196）　受部は屈曲するが，屈曲部外面で下稜をもたず，屈曲部（外面）から受端部までの長さが6.0cmと長いもの。脚部はラッパ状に広がり，端部近くでやや内湾する。受部径22.2，脚部径14.2，器高14.8cmを測る。

Ⅴ類（第27図198～200）　小型器台。受部は内湾し，端部は面取りを施すもの。脚部は外反する。受部径9.5～10.2cm，脚部径11.8～11.9cm，器高9.2～9.6cmを測る。

Ⅵ類（第27図201）　小型器台。受部はやや内湾し，端部は丸縁のもの。脚部は上位が外反し，下位は内湾する。受部径10.5，脚部径11.9，器高10.1cmを測る。

Ⅶ類（第27図202）　小型器台。受部は内湾し，端部は短く上方へ屈曲し，面をもつもの。受部径12.0cmを測る。

(6)　**結合器台**（第28図203～212）

結合器台は，器台形土器（脚部は有段）に有段状の鉢（または壺）を結合させたもので，受部～口縁部の形態差と法量の差をもとに4小形式に分類した。器面はヘラ研磨・ナデによって仕上げ

るが，一次調整（ハケ状具）痕を残す部位がある。

Ⅰ類（第28図203・204）　受部径22.6～23.4（推定）cmを測る大型品。受端部に貼付する（垂下）帯は内下方より外上方が長い。203の体部には透穴が認められるが形状は不明。204の脚部（径16.0cm）外面には赤彩痕を観察し得た。

Ⅱ類（第28図205・206）　体部の屈曲部が上位にあり，屈曲部上位が下位よりかなり短いもの。205は体部上位ワラビ形（仮称）の透穴（正・逆の順，一部パターンが乱れている）を，下位に逆三角形と横位三日月形（上に凸）の透穴を各々6組12箇配する。また垂下帯外面には4条の沈線を施し，その間に4段のヘラ描きの鋸歯文を刻んでいる。受部径15.6～17.4cmを測る。

Ⅲ類（第28図208～211）　受部径14.0～14.8cmを測り，屈曲部上位がよく発達し長いもの。体部に雨滴形透穴を4組8箇～8組16箇配する。211は脚部径13.0cmを測り，外面と受部～体部内面を赤彩している。208の口径は17.0cmを測る。

Ⅳ類（第28図212）　受部から体部にかけては屈曲するが，垂下帯をもたないもの。体部の透穴（11箇）の形状は不明。

なお，第28図207は受部径16.8cmを測るもので，残存部のみではⅡ類・Ⅲ類のどちらとも分類できない。

(7)　**鉢形土器**（第29図213～228・第30図229～234）

針形土器は，全体の形態差をもとに5小形式に分類した。器面はヘラ研磨・ナデによって仕上げるものが多いが，ハケ・ヘラ削りなどで仕上げるものもある。

Ⅰ類（第29図213～219）　体部が有段のもの。口縁部が長い213～216と短い217～219に細分類し得る。前者は口縁部が外反するが，216は直線的にのび，外面にハケ状具痕を残す。後者の口縁部は有段無文の甕に類似するが，217・218は外面が強いヨコナデによってやや凹む。217は底部穿孔鉢。口径14.6～21.6（前者は15.9～21.6，後者は14.6～16.4）cmを測り，214は底径1.7，器高7.7cm，217は底径2.2，器高8.6cmをそれぞれ測る。

Ⅱ類（第29図221～228）　体部は屈曲するが段状をなさず，口縁部が内傾するもの。法量の差にによって3つに細分類し得る。221～223は口径7.6～10.7cmを測る小形品で，221・222は深く（222は底径2.8，器高4.8cm），223は口縁部が短くやや浅い。（底径2.3，器高4.1cm。）224・225は口径13.6～14.6cmを測る中形品で，225は口縁部がやや外傾する。（底径7.2，器高4.6cm。）226～228は口径17.4～19.6cmを測る大形品で，226・227は口縁部が短く外面は強いヨコナデによって凹む。228に比して浅い。228は口縁部が長く深い。（底径3.6，器高9.0cm。）222は全面，228は外面赤彩品。

Ⅲ類（第30図229～231）　逆円錐形を呈する底部穿孔品。外面はハケ・ナデ，内面はヘラ削り・ナデ調整。230は口縁部内外面に赤彩痕が残る。口径15.4～18.4，底径2.0，器高13.3～13.6cmを測る。

Ⅳ類（第30図232）　椀状を呈するもの。内外面をハケで仕上げ，口縁端部は先細りの丸縁。底部下面はやや凹む。口径12.4，底径3.6，器高5.6cmを測る。

Ⅴ類（第30図233・234）　脚台をもつもの。233は体部が椀状を呈し，脚台は内湾する（口径12.8，

脚台径7.6，器高8.7cm）。234は体部が屈曲し短い口縁をもつ（口径12.2cm）。

なお，有段口縁の第29図220は，Ⅰ類第29図217～219に類似するが，体部内面をヘラ削りしているなどの違いがあり，全体形も不明なため形式分類から除外した。

(8)　**小型土器**（第30図235～247）

小型土器は，手捏ね土器のほか，甕・壺・鉢等の小形品のうち全体の器形がその器種本来のバランスを失っているものを指す。法量と全体の形態差から5小形式に分類した。

Ⅰ類（第30図235・236）　手捏ね土器。器面はナデ調整（235の内面上位はヘラ削り）。口径6.7～7.5，底径3.2～3.7，器高3.9～5.2cmを測る。

Ⅱ類（第30図237・238）　Ⅰ類に近い法量をもつ。器面は「く」の字口縁を有する237がヘラ研磨，椀状を呈する238がナデ調整。口径7.7～7.8，底径1.6～3.6，器高4.4～5.6cmを測る。

Ⅲ類（第30図239～241）　「く」の字口縁をもつもの。器面はヘラ削り・ハケ・ナデによって仕上げる。口径10.4～12.6，底径1.4～2.4，器高8.3～11.2cmを測る。

Ⅳ類（第30図242～245）　有段口縁をもつ平底のもの。器面はヘラ研磨・（ヨコ）ナデ調整（245の外面にはハケ状具痕が残る）。243・244は外面と口縁内面赤彩。口径8.6～10.6，底径2.0～3.0cm，244の器高は8.3cm，242の器高は推定で9.3cm，同じく243は9.0cmを測る。

Ⅴ類（第30図246）　有段口縁をもつ丸底のもの。口縁部に一対の孔を穿つ。器面はヘラ研磨で仕上げている。口径9.0，器高7.8cmを測る。

このほか，肩部に斜格子状のヘラ描きの沈線を施した第30図247があるが（底径2.8cm）、口縁部を欠くため強いて分類はしなかった。

大溝下層出土土器（第31図1～8）

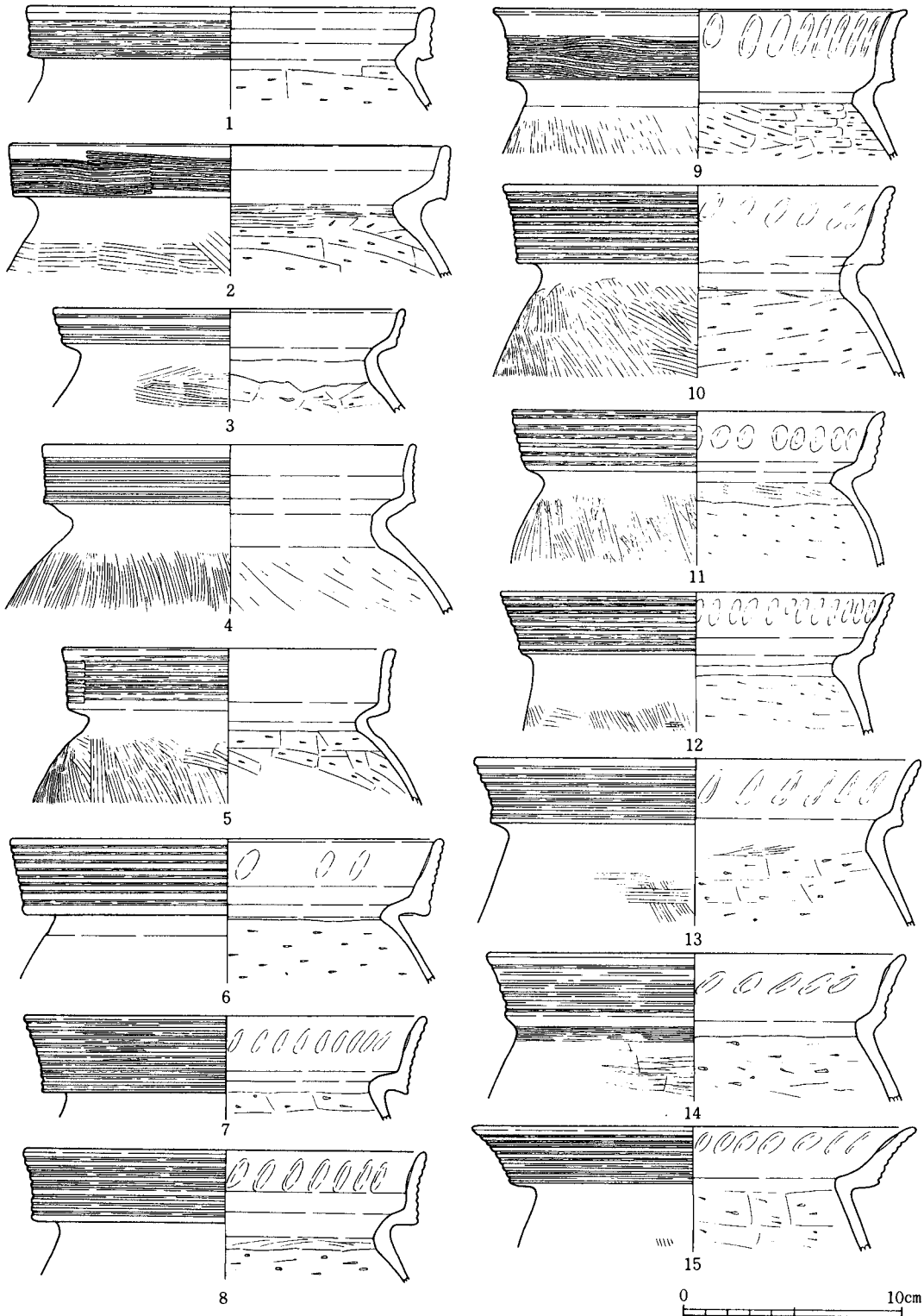
縄文土器（第31図1・2）　1は外面に条痕文を施した深鉢の口縁部片。2も深鉢の胴部片で，外面は縄文地に沈線と列点文（上位に2条の沈線とその間に2段の列点文，下位に3条の沈線）を配している。ともに縄文時代晩期中屋式土器であろう。

弥生土器（第31図4～8）　4～7はいずれも口縁部が外反しかつ肩の張らない甕形土器である。器面をハケとナデによって調整したうえ，5～7は櫛状具による刻目・刺突・平行沈線で加飾している。弥生時代中期の所産であろう。また8は受口状口縁をもつ甕形土器で，外面は櫛状具による刺突列点文・平行沈線文を配している。弥生時代中期末（戸水B式土器）まで上ることはないとしても，それに近い弥生時代後期前半のものと考えておきたい。

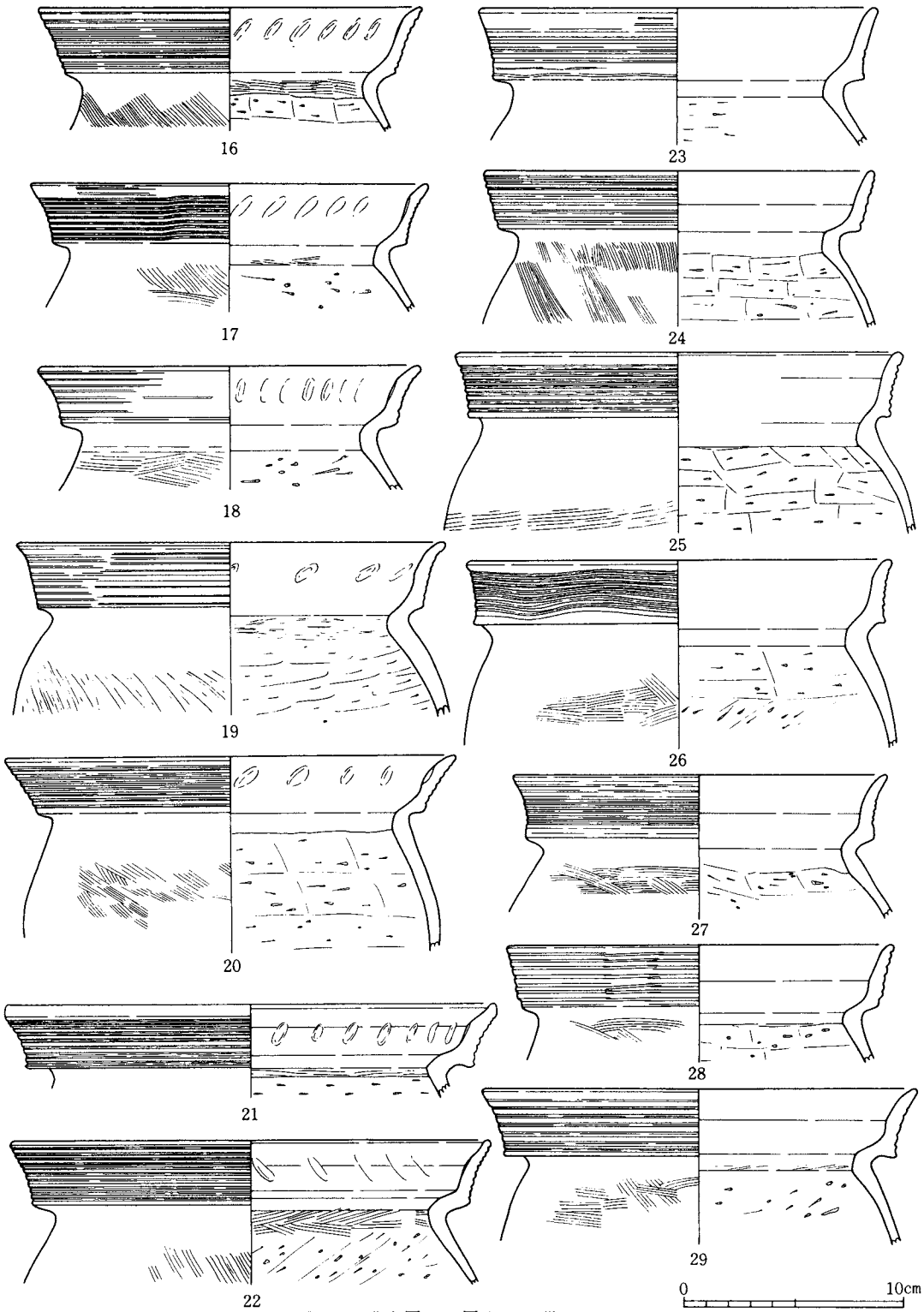
なお，第31図3は外面をヘラ状具による極めて細い沈線文で飾るものである。胎土は精選され焼成は良好。色調は黒褐色を呈する。器面はヘラ研磨で仕上げられており，2箇所に透穴（1つは円形でもう1つは三角形とも考えられるが詳細は不明）を観察し得る。類例に之しく，器種・所属時期は不明である。

大溝上層出土土器（第31図9～13）

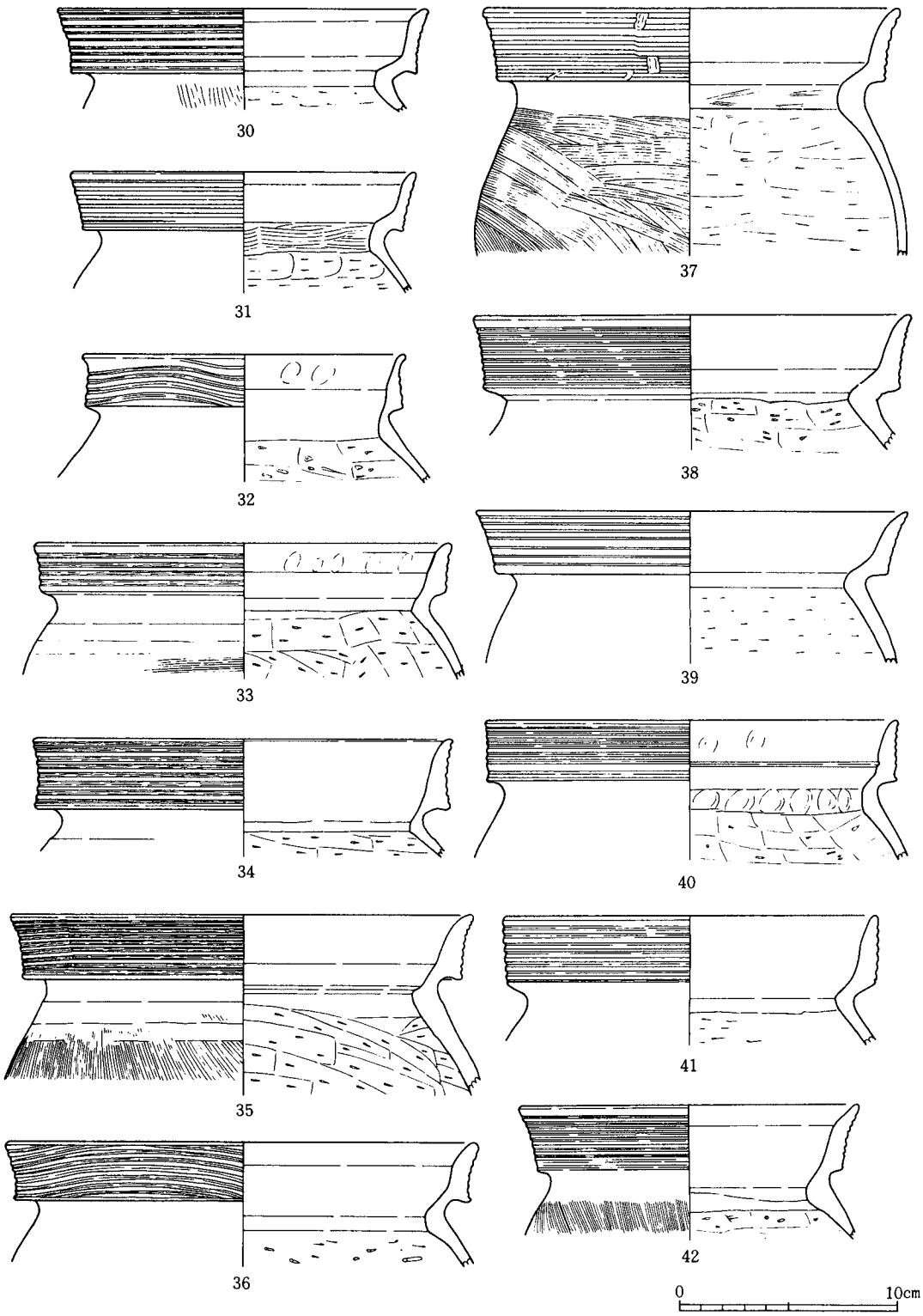
9・10は大溝中層・下層出土土器の分類では甕A類に，11・12は同じく甕B類に対応する。13は棒状有段脚をもつ高坏脚部片で，法仏期の所産であろう。



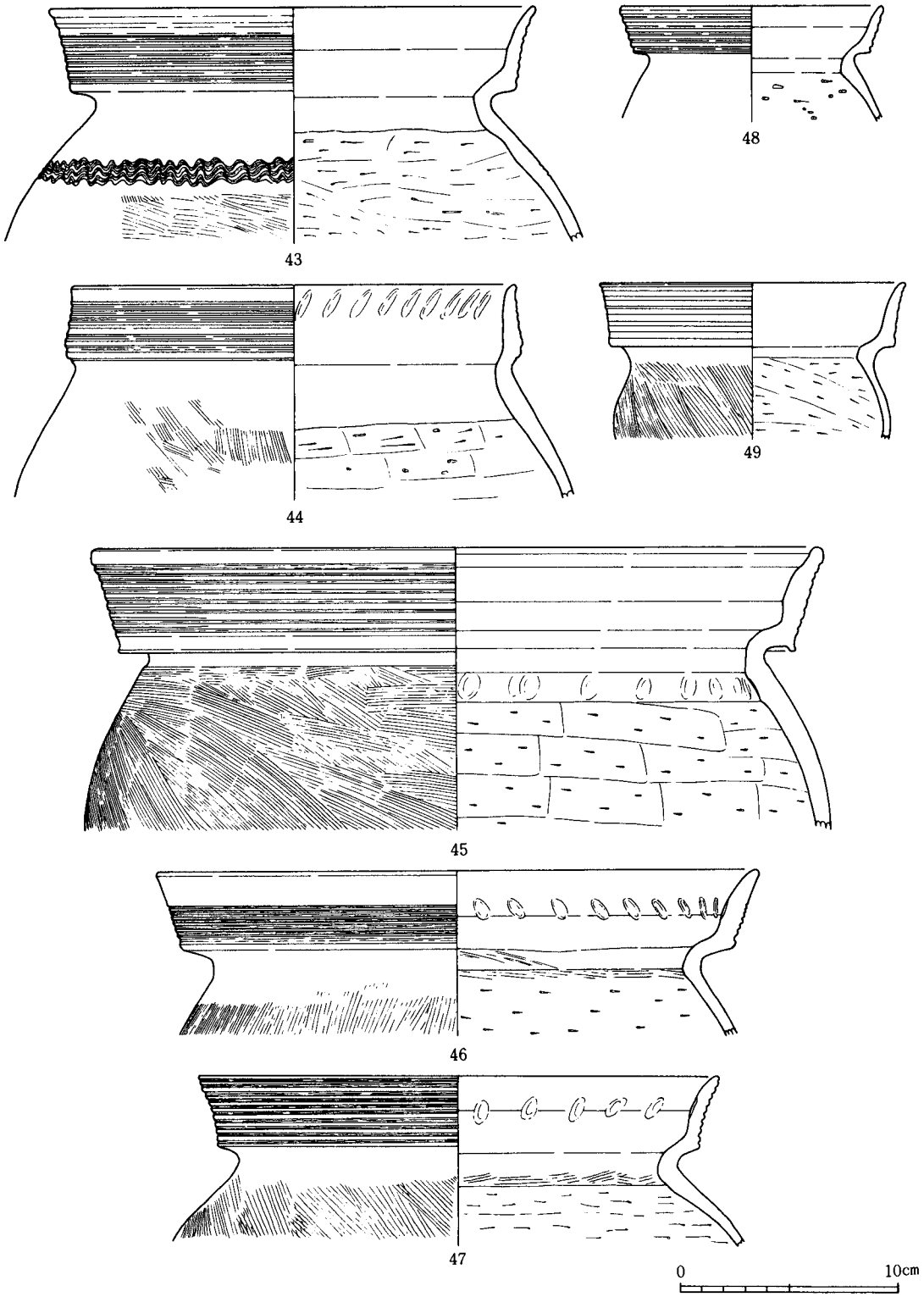
第12図　大溝中層・下層出土土器（S＝1/3）



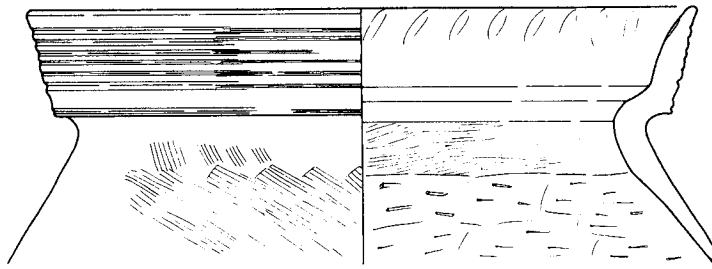
第13図　大溝中層・下層出土土器（S＝1/3）



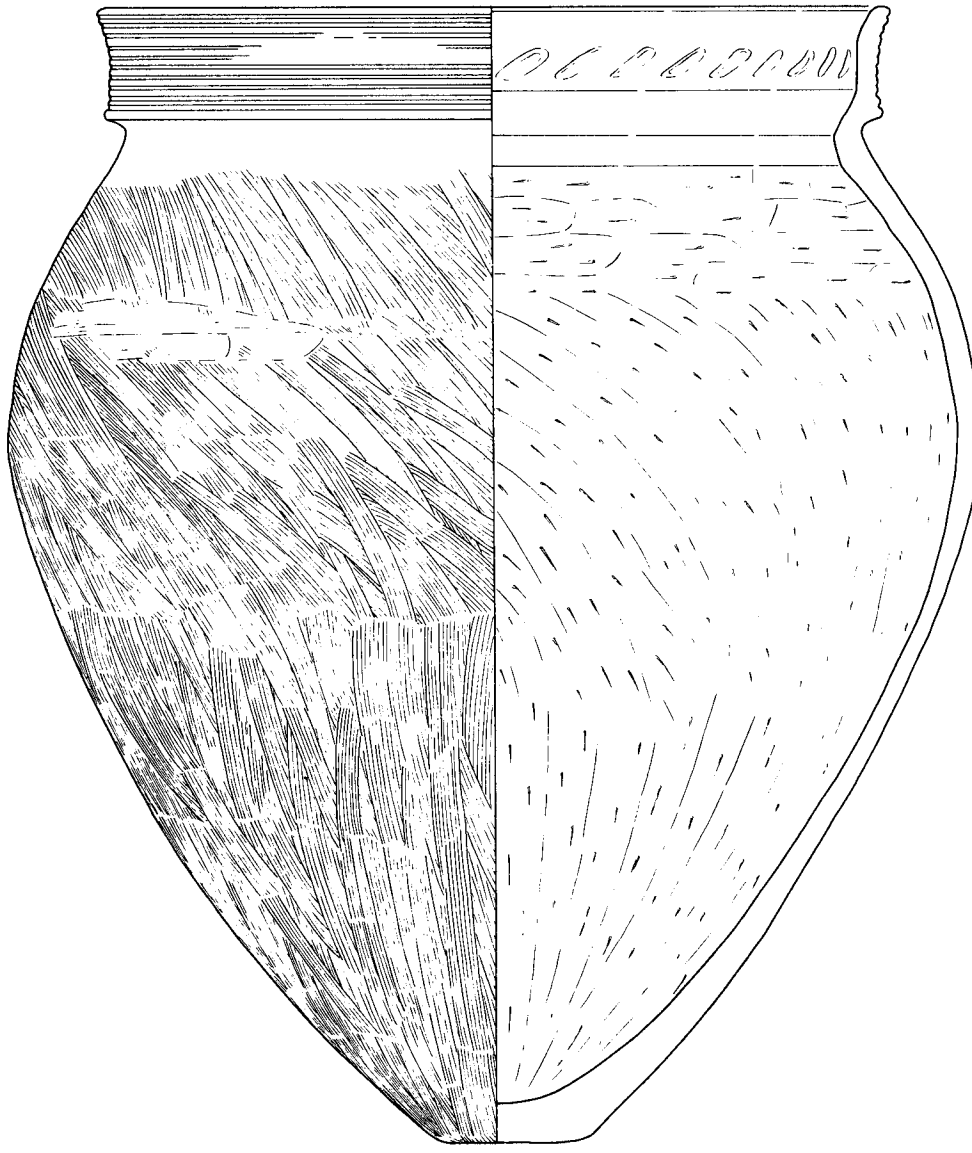
第14図　大溝中層・下層出土土器（S＝1／3）



第15図　大溝中層・下層出土土器（S＝1/3）



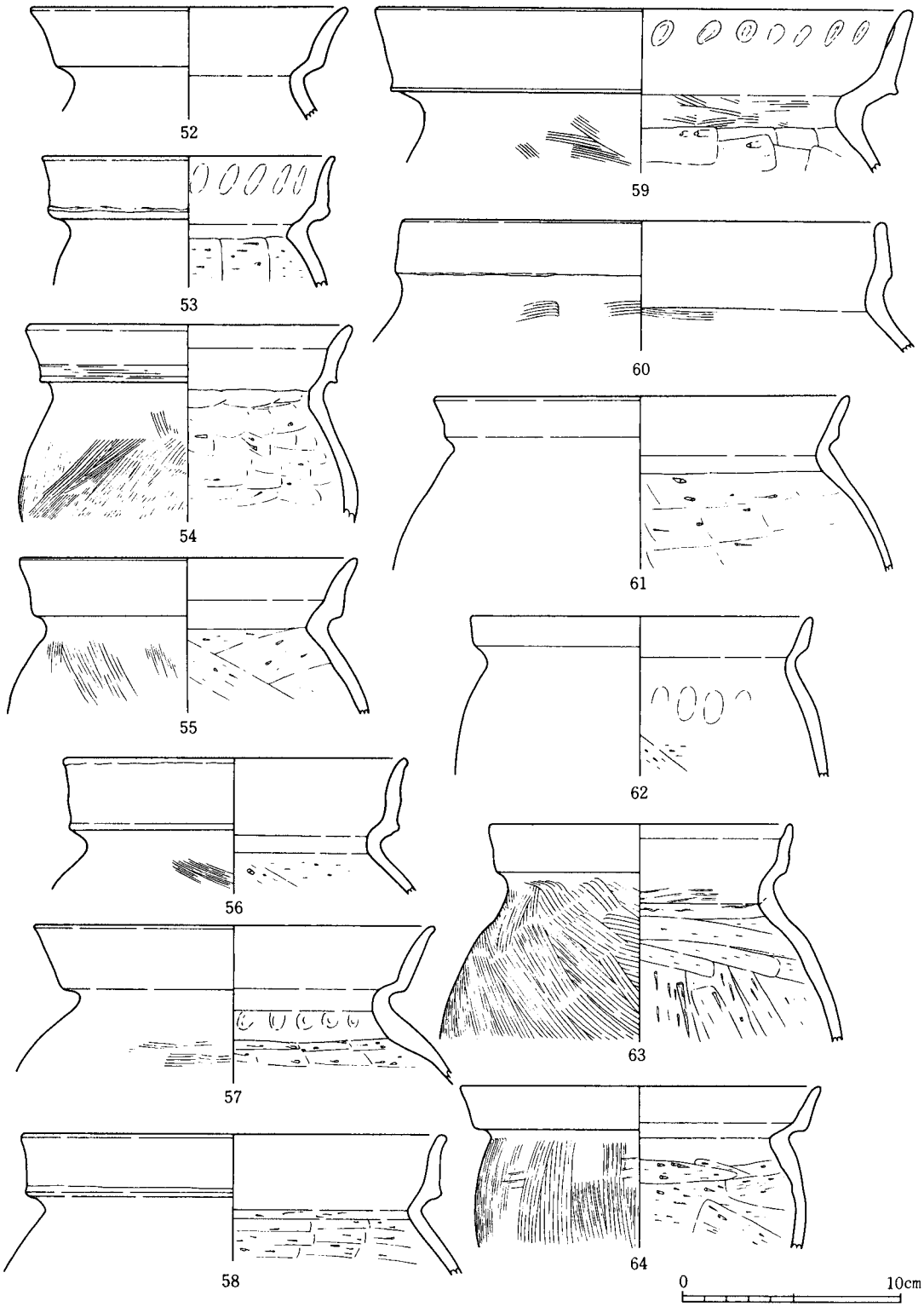
50



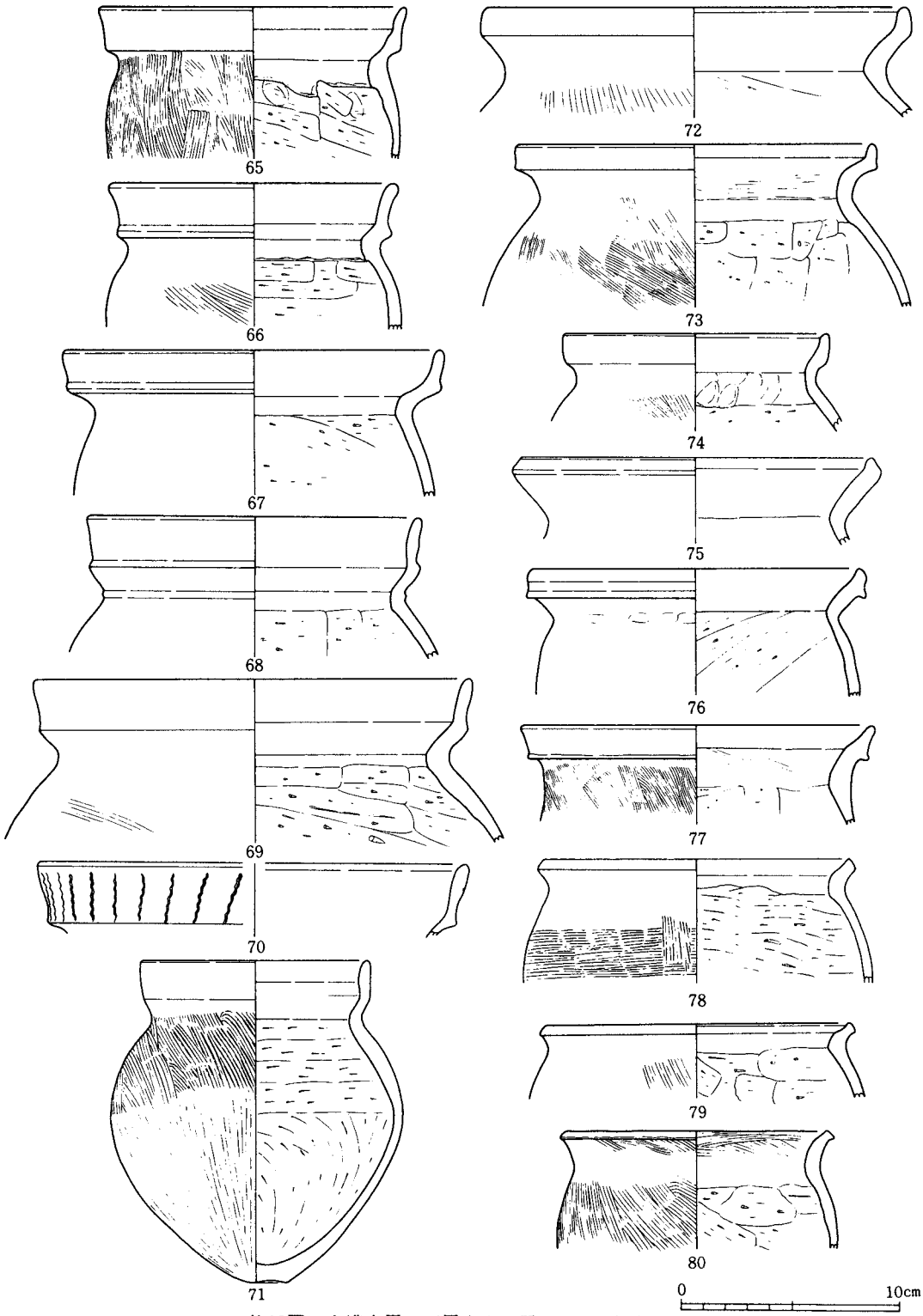
51

0 10cm

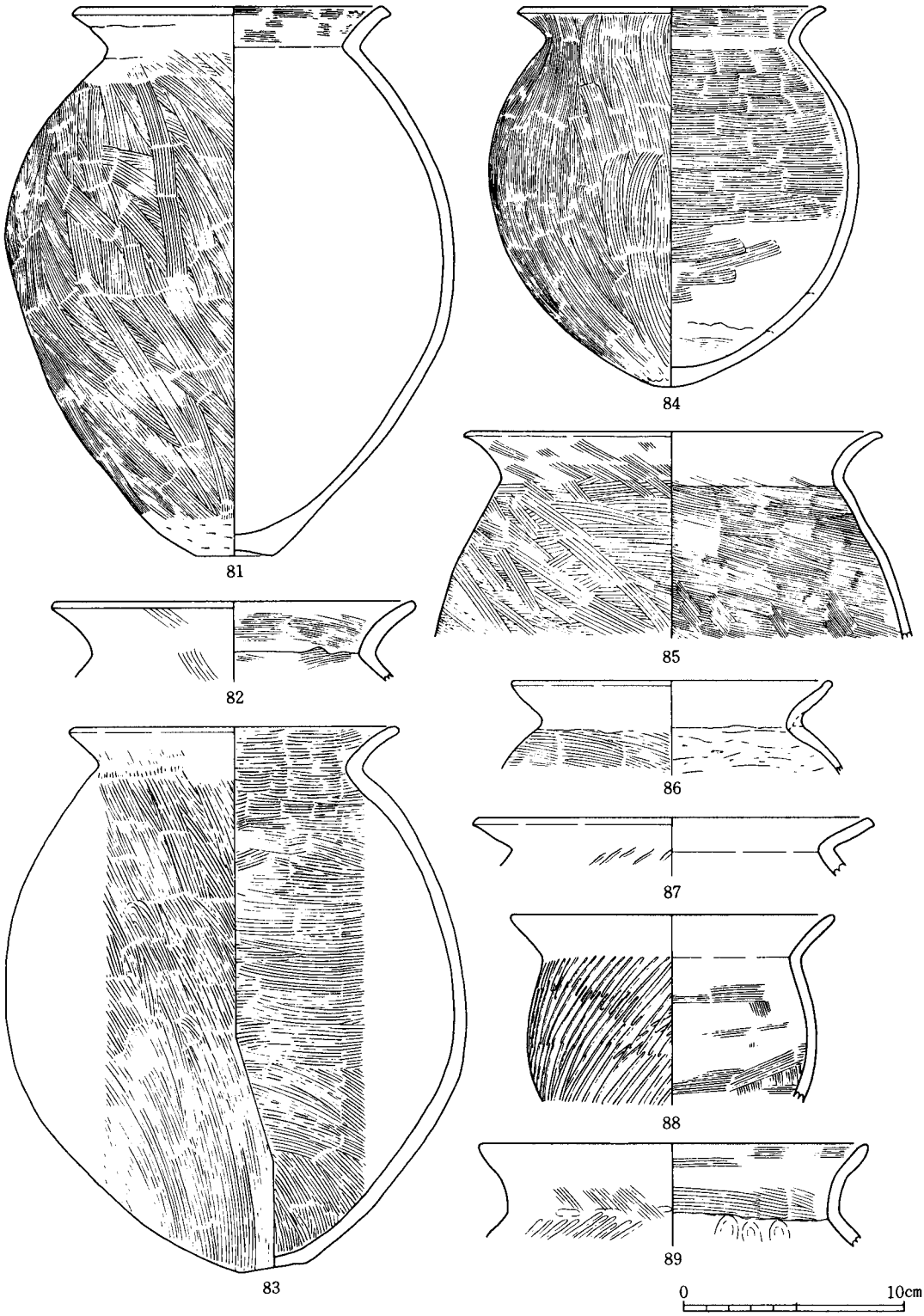
第16図　大溝中層・下層出土土器（S＝1/3）



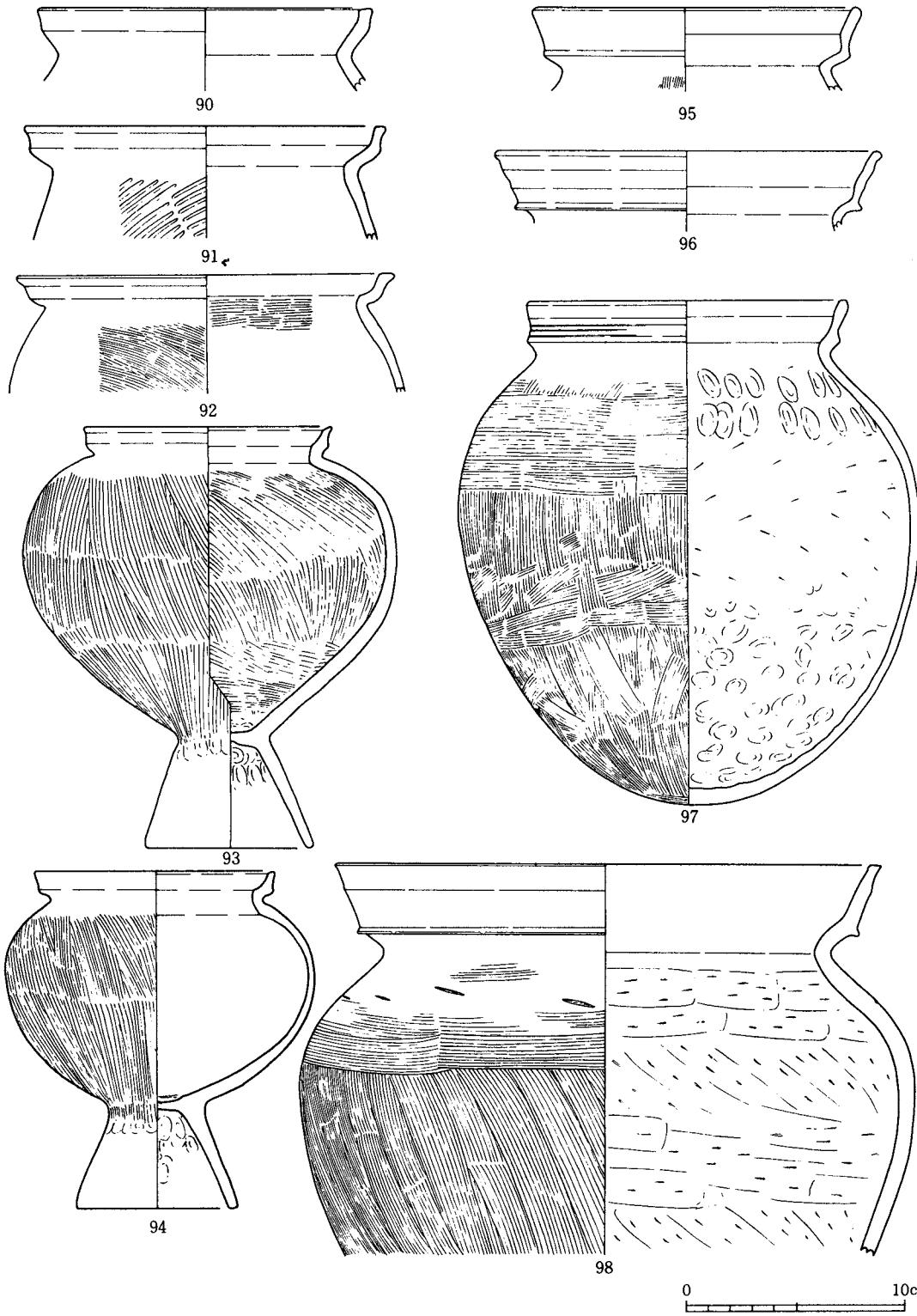
第17図　大溝中層・下層出土土器（S＝1/3）



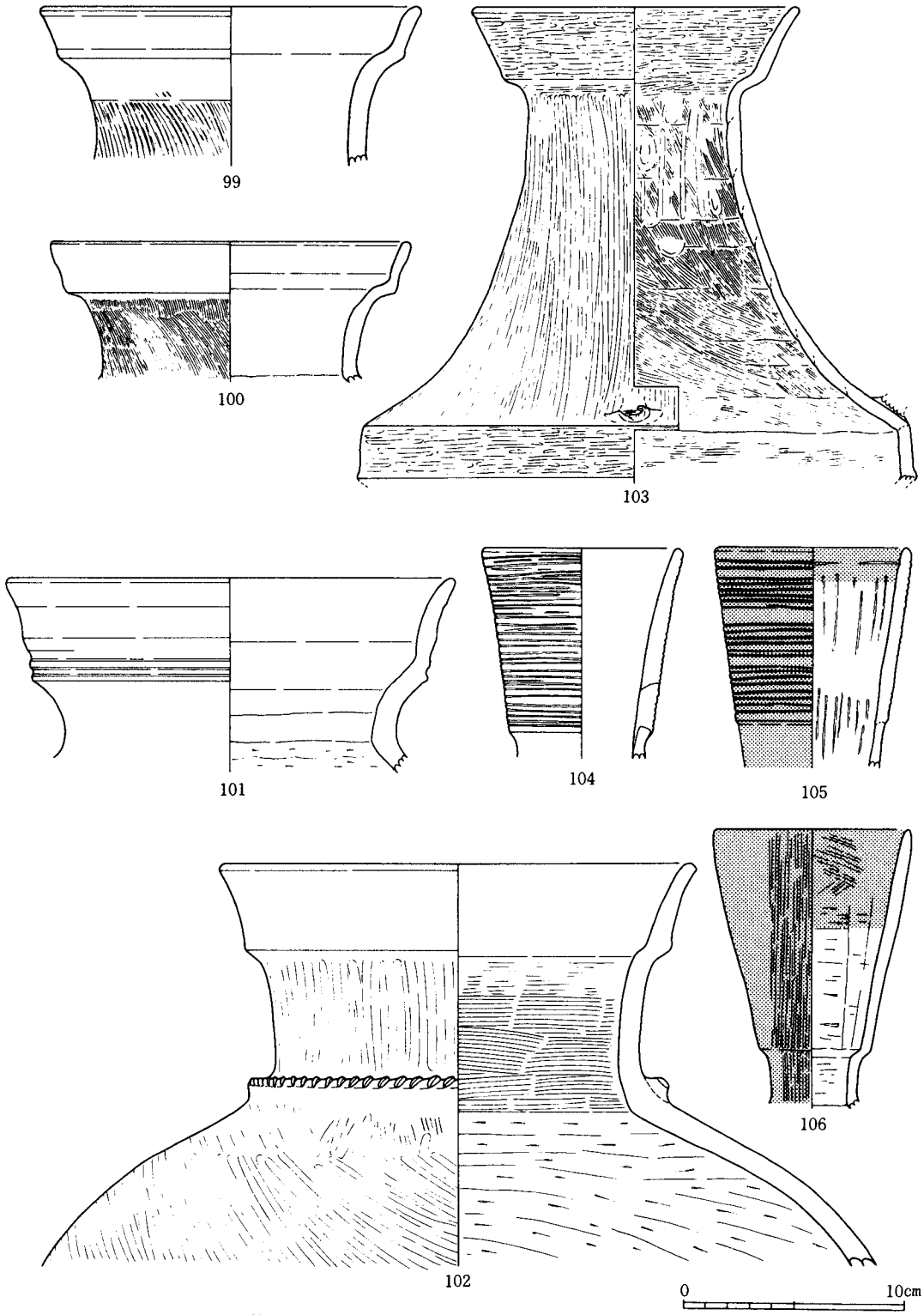
第18図　大溝中層・下層出土土器（S＝1／3）



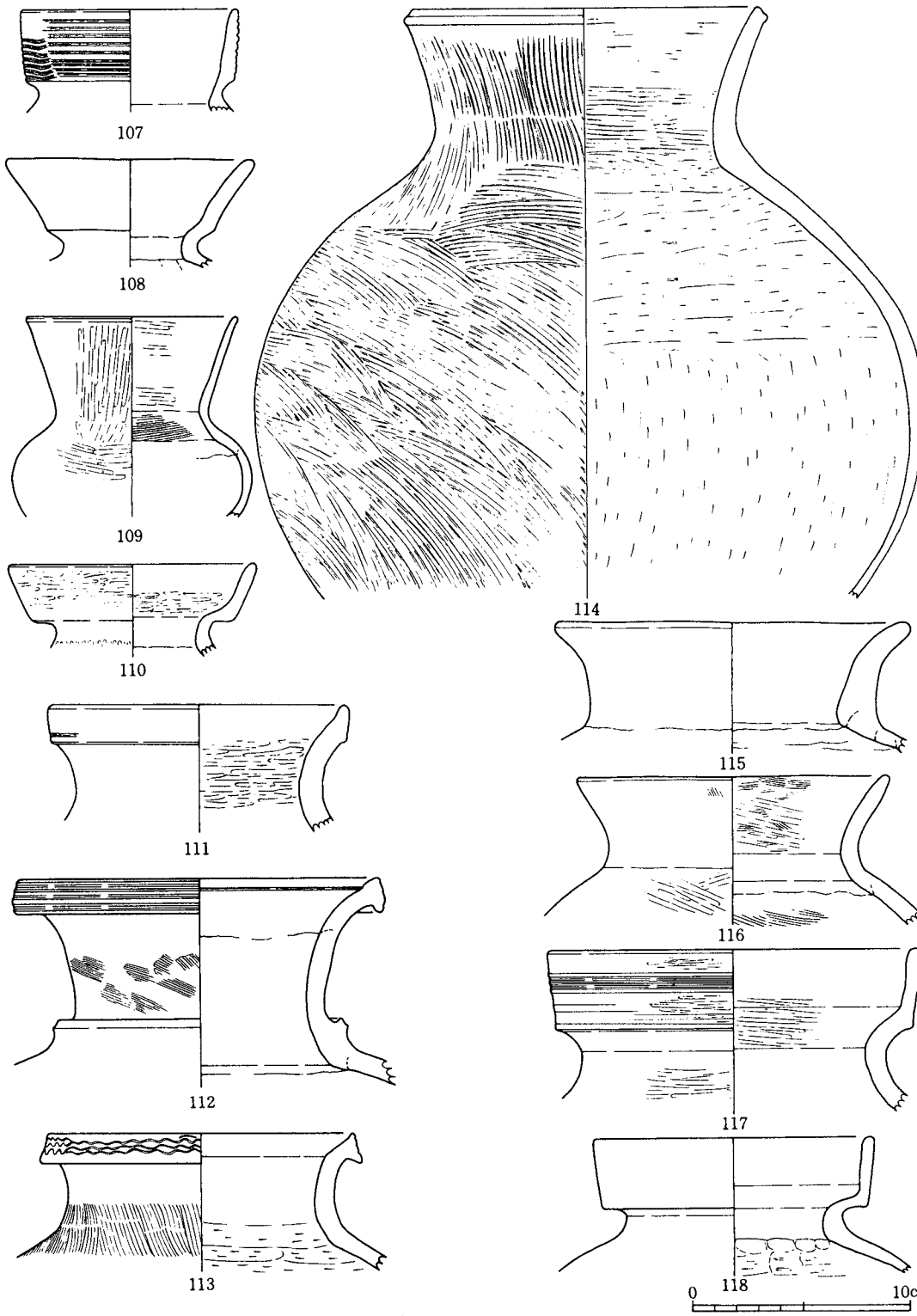
第19図　大溝中層・下層出土土器（S＝1/3）



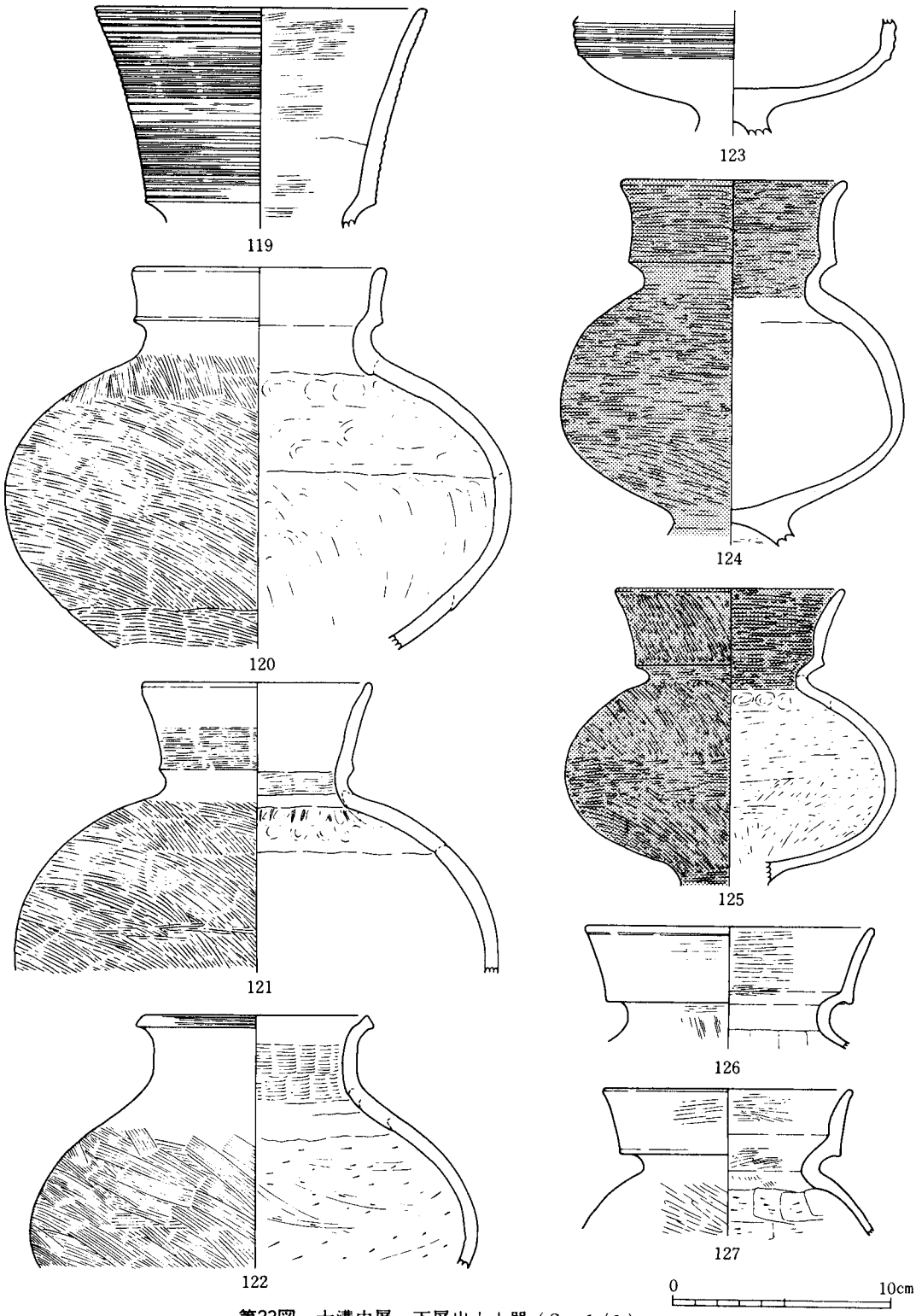
第20図　大溝中層・下層出土土器（S＝1/3）



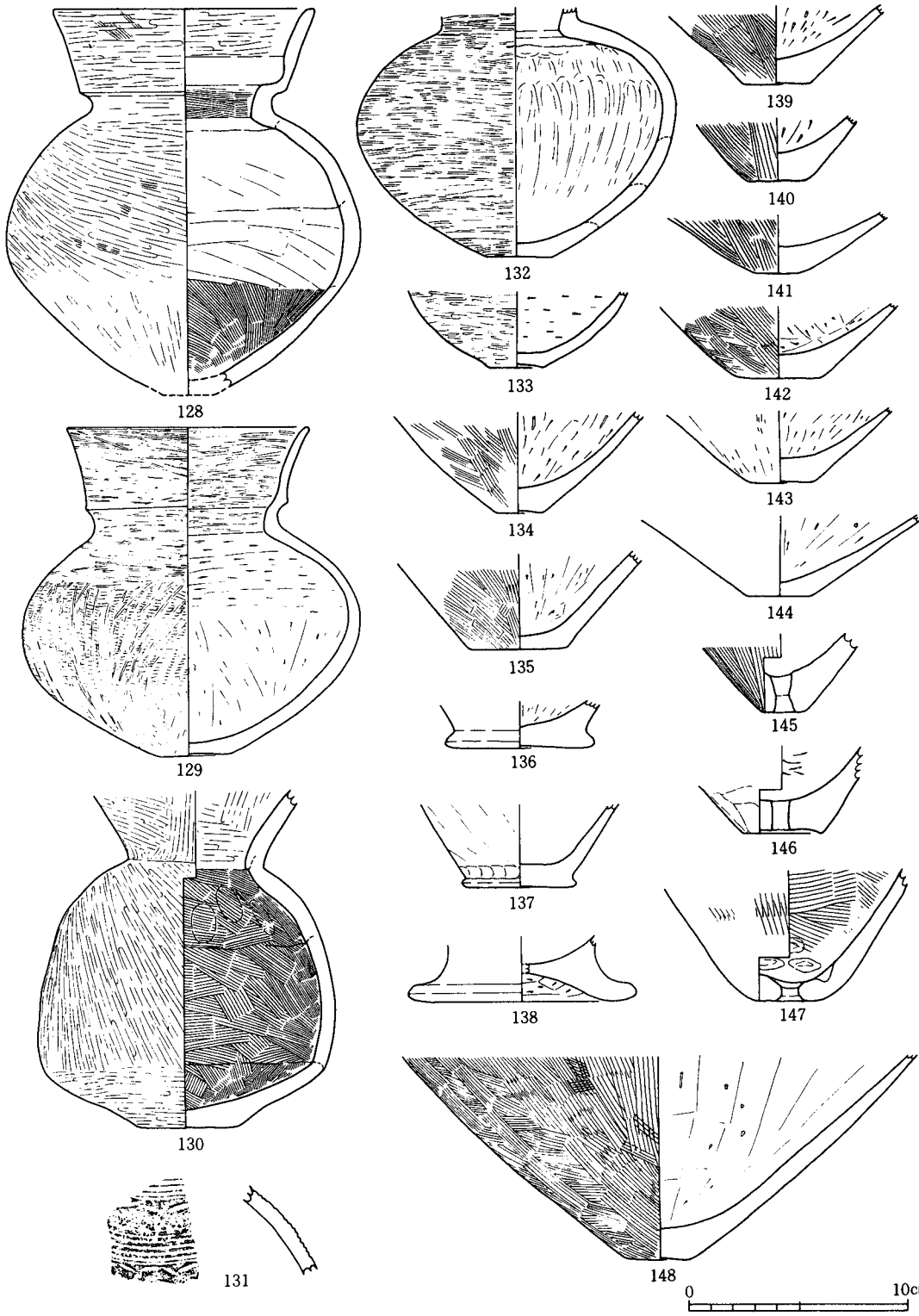
第21図　大溝中層・下層出土土器（S＝1／3）



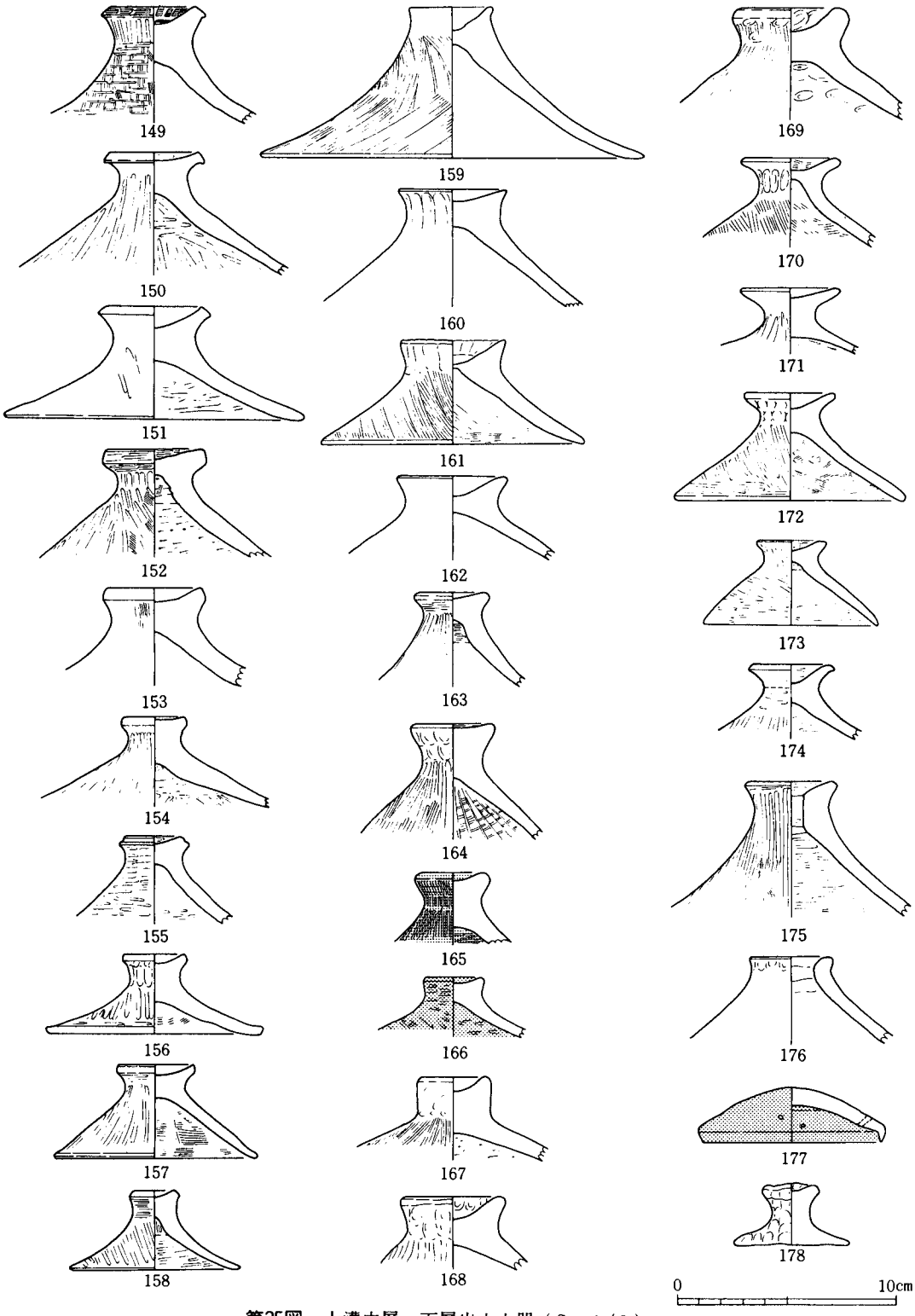
第22図　大溝中層・下層出土土器（S＝1/3）



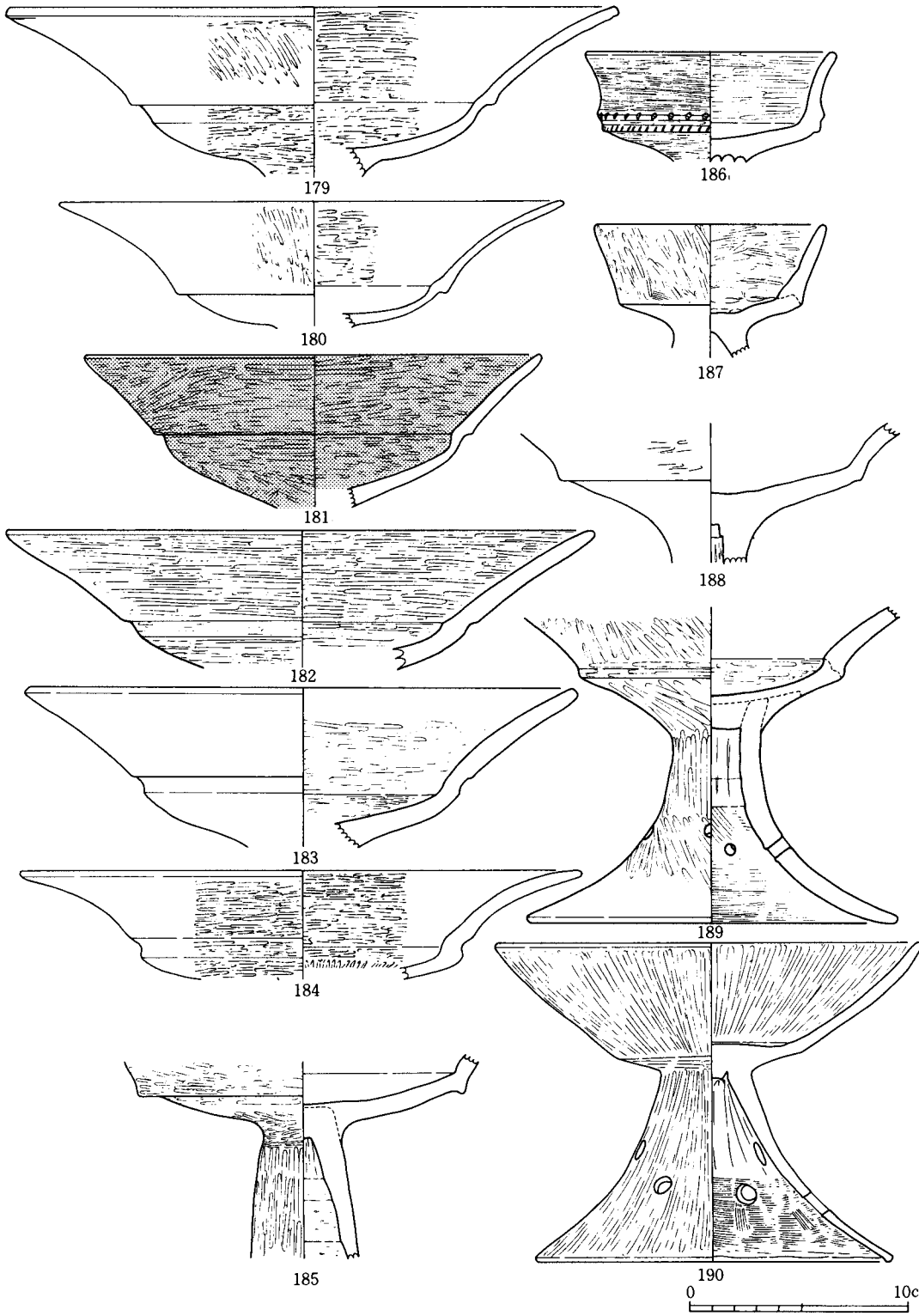
第23図　大溝中層・下層出土土器（S＝1／3）



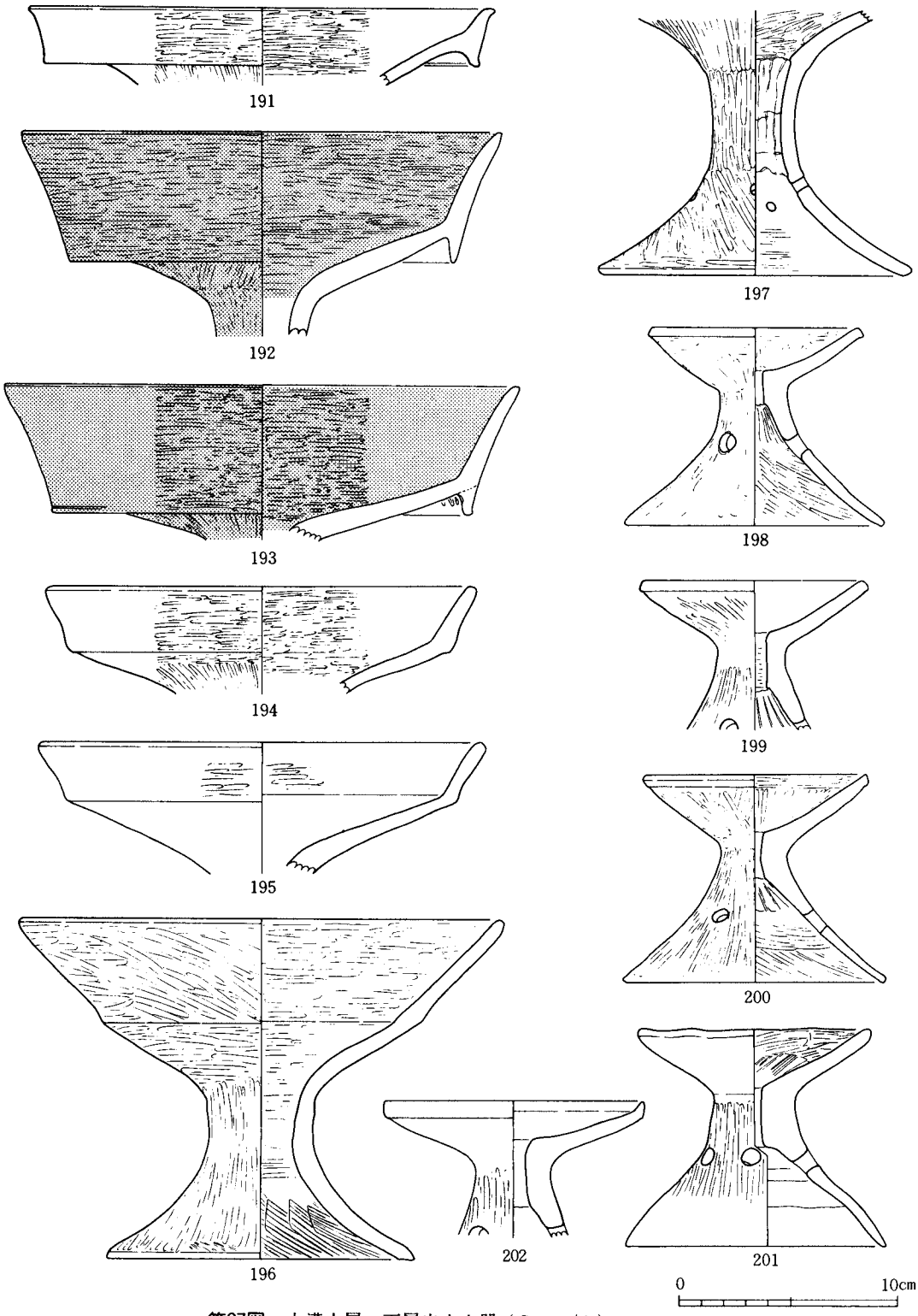
第24図　大溝中層・下層出土土器（S＝1/3）



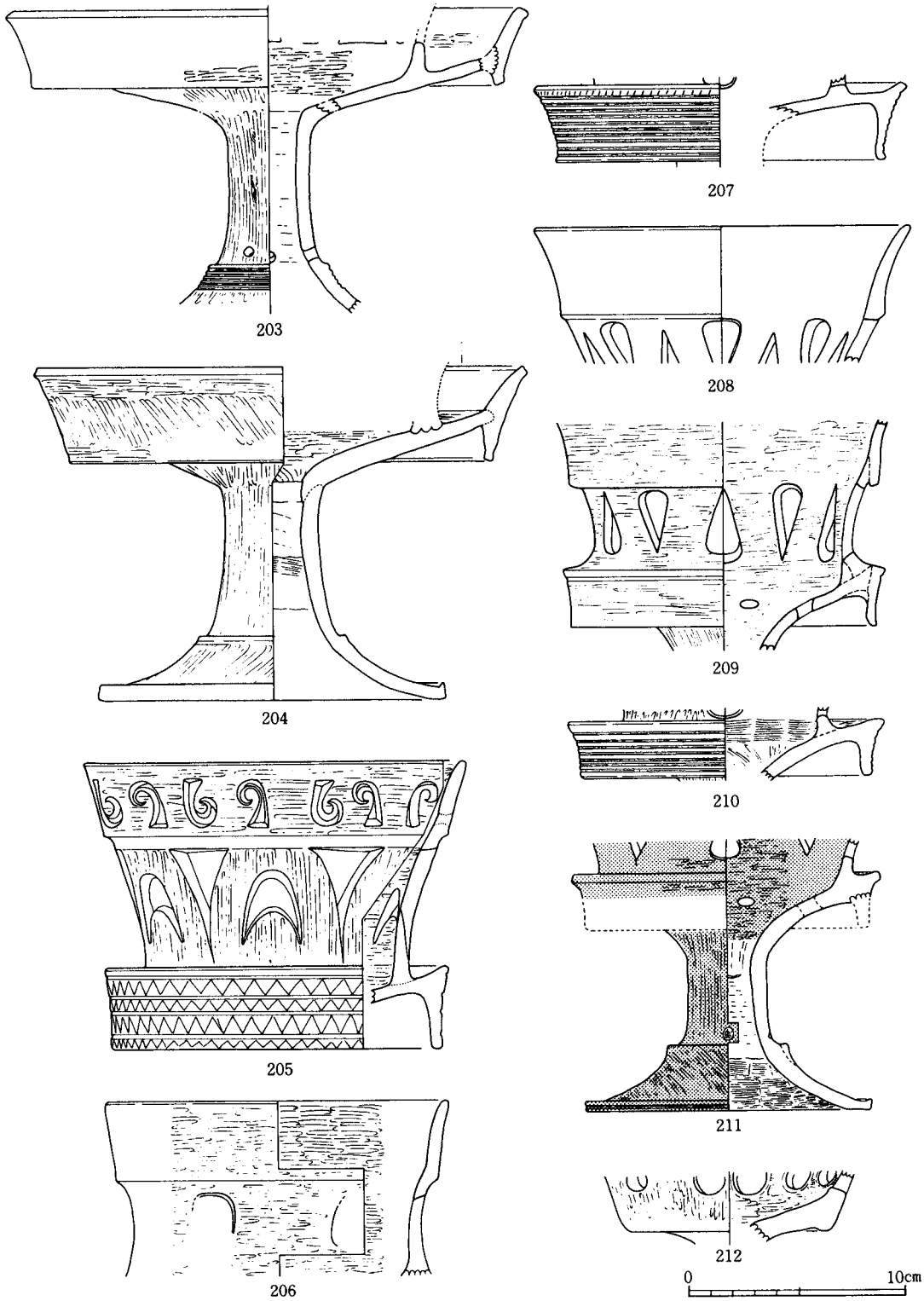
第25図　大溝中層・下層出土土器（S＝1/3）



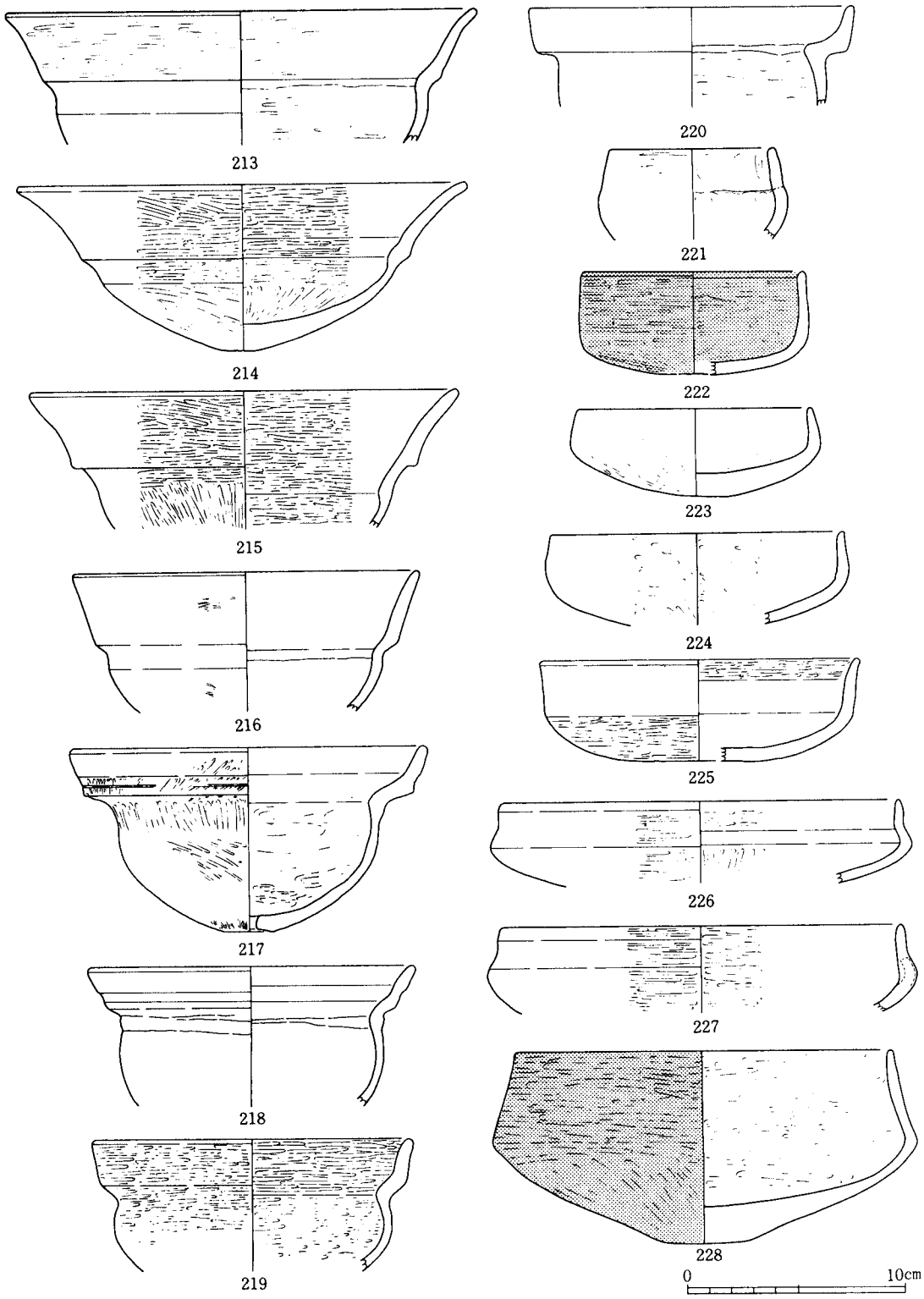
第26図　大溝中層・下層出土土器（S＝1／3）



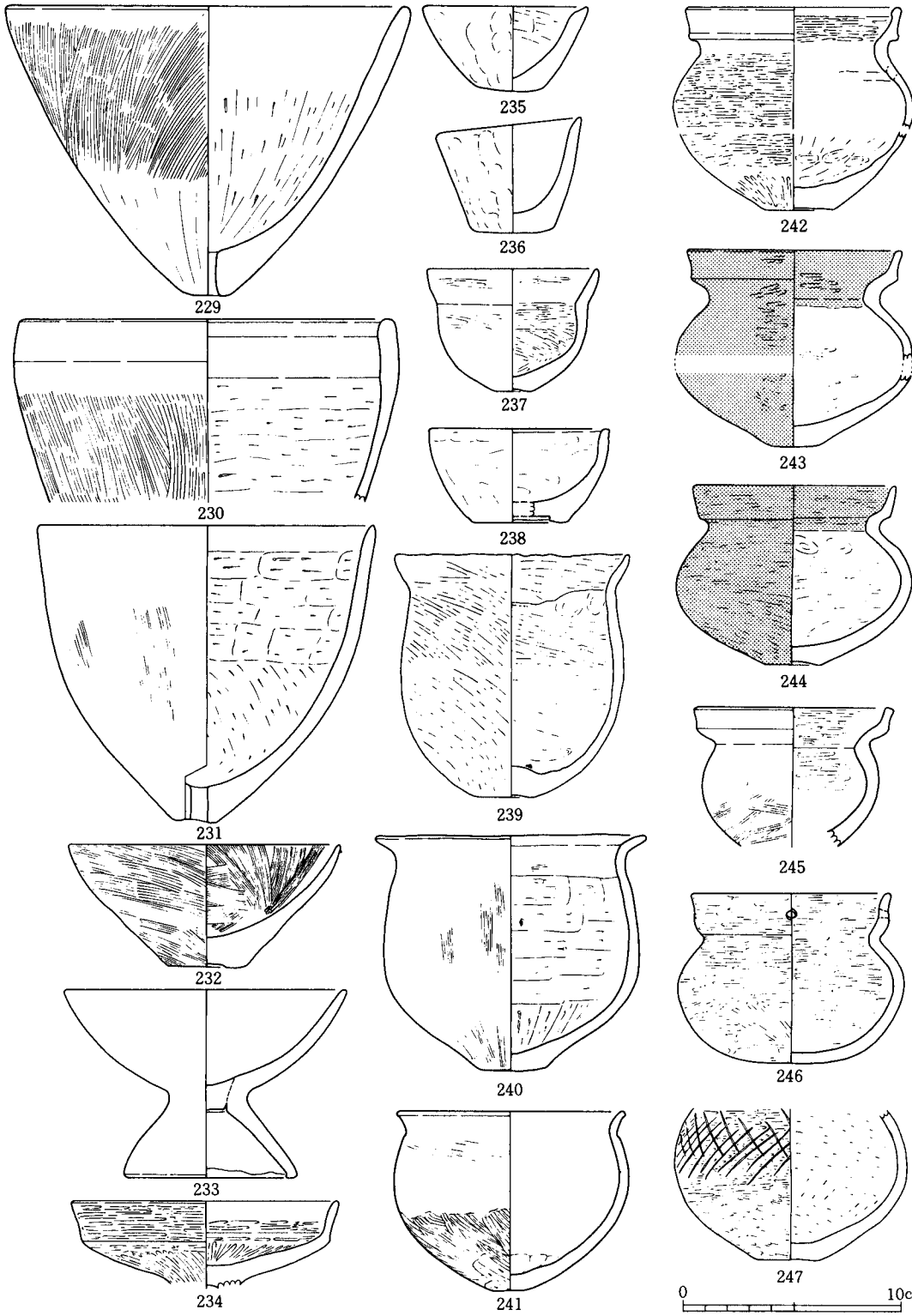
第27図　大溝中層・下層出土土器（S＝1/3）



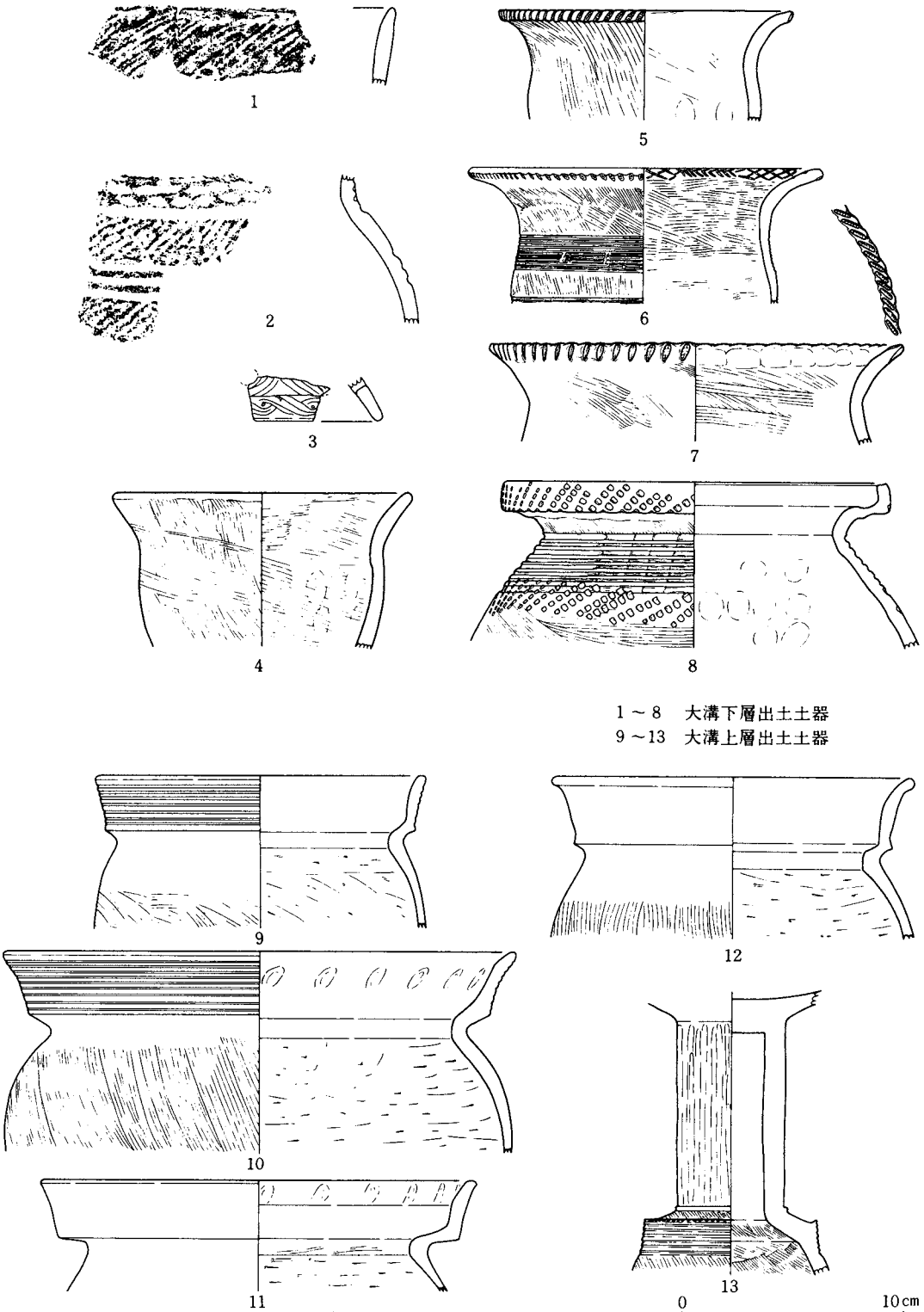
第28図　大溝中層・下層出土土器（S＝1/3）



第29図　大溝中層・下層出土土器（S＝1/3）



第30図　大溝中層・下層出土土器（S＝1/3）



1～8　大溝下層出土土器
9～13　大溝上層出土土器

第31図　大溝下層出土土器(1～8)・上層出土土器(9～13)（S＝1/3）

2　土製品　（第32・33図・図版第９）

本遺跡の大溝から出土した土製品には，管状土錘と杓子形土製品の２種がある。

第３表　漁網錘一覧表　〔単位はcmおよびg.( )を付したものは現存値を示す。孔径a≧孔径bとする。〕

遺物番号	出土層位	分類	遺存状態	重さ	孔径 a	孔径 b	長さ	幅	挿図番号
大溝Ｂ１	中　層	A	完　形	32.0	0.6	0.6	3.1	3.5	第32図１
大溝Ｂ２	下　層	A	完　形	65.0	1.5	1.3	3.7	4.6	2
大溝Ｂ３	下　層	A	完　形	26.3	1.1	0.8	3.0	3.7	3
大溝Ｂ４	下　層	B	½　欠	(39.0)	1.0	1.0	4.2	4.1	6
大溝Ｂ５	下　層	A	⅗　欠	(38.8)	1.4	1.0	4.8	(4.5)	4
大溝Ｂ６	下　層	A	⅔　欠	(32.0)	1.3	1.1	3.8	(4.3)	5
大溝Ｂ７	下　層	C	¾　欠	(13.7)	0.9	—	(1.7)	(3.4)	8
大溝Ｂ８	下　層	C	完　形	60.8	0.6	0.6	3.4	3.8	9
大溝Ｂ９	下　層	B	完　形	85.0	1.5	1.4	5.1	4.3	7
大溝Ｂ10	下　層	—	破　片	(17.1)	—	—	—	—	—
大溝Ｂ11	下　層	—	破　片	(11.2)	—	—	—	—	—

生産用具

管状土錘　漁網錘としての管状土錘は総数11点を数え，完成品５点，欠損品６点である（第３表)。出土状況については，中層から一点出土しているほかはすべて下層からの出土である。そして形態によりＡ～Ｃ類に分類される。

Ａ類……球状を呈するもの。(第32図１～５）

Ｂ類……側縁部が直線的で円柱状をなし，平面形態が隅丸方形をなすもの。(第32図６・７）

Ｃ類……側縁部が直線的で円柱状をなし，平面形態が方形をなすもの。(第32図８・９）

漁網錘の属性のなかで重量は最も重要な要素であり，本遺跡のものは25～85ｇの範囲にはいり，完形品の平均重量は53.8ｇである。また，欠損品で完形時の重量を推定したもの４点を加えた場合の平均重量は66.1ｇとなる。管状土錘の孔径はその属性のなかで重量についで重要な要素であり，漁網に装着される際の縄の太さと密接な関係があると考えられる。第３表より孔径をみてみると，0.6～1.5cmの範囲内に分布して平均孔径は1.0cmである。長さと幅の関係においては，長さは幅の0.8～1.2倍となっており，長さが幅よりもやや短かいものが多いという傾向にある。

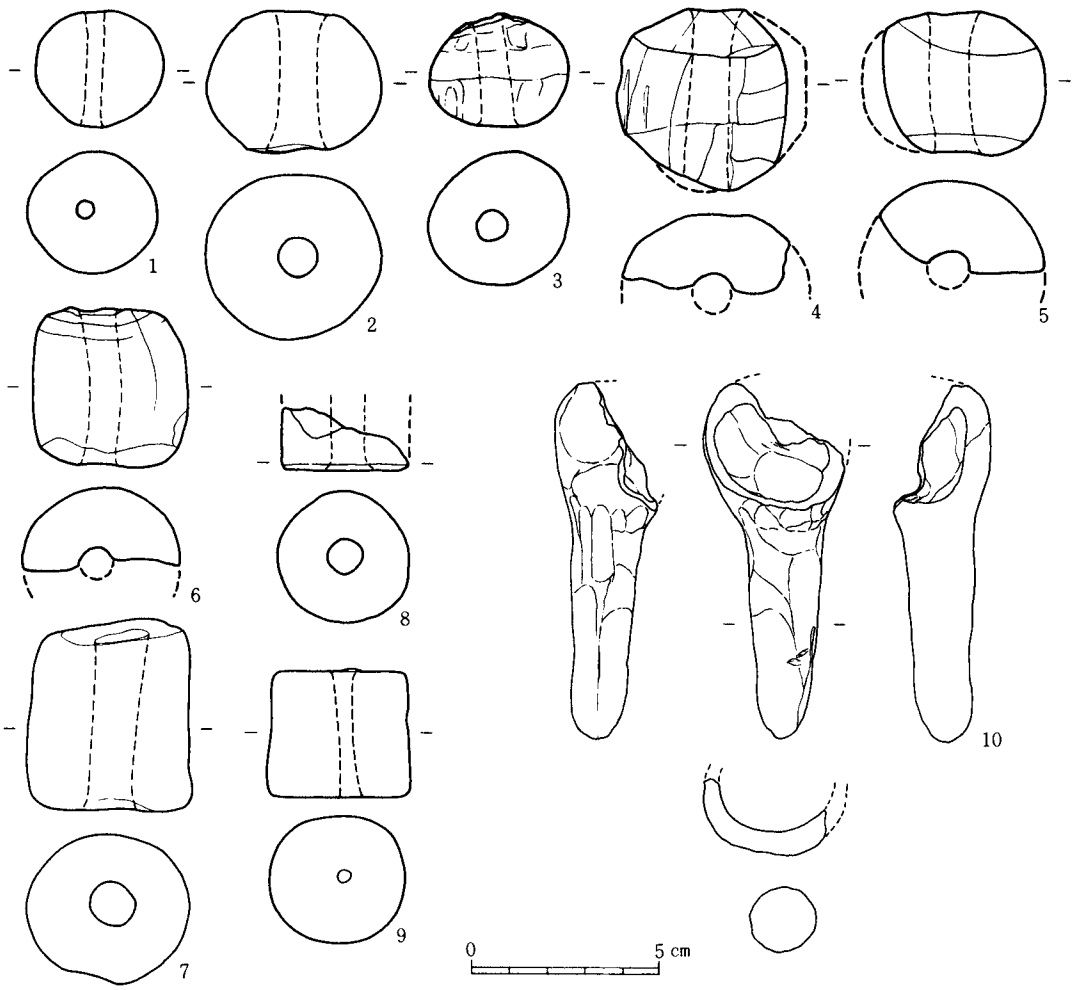
厨房用具

杓子形土製品　中層から１点出土している。(第32図10）つゆの部分はおよそ⅓ほど欠損しており，現存値で長さ3.3cm，幅3.2cm，厚さ2.1cmである。つゆの内法幅が2.6cm，底部までの深さ1.5cmを測る。つゆの内面はナデ調整を施し，外面は柄部と同じようにヘラ磨きで調整している。また柄部の長さ4.8cm，幅1.8cmであり，残存全長は8.1cmを測る。県内の類例としては，本遺跡のほかに鹿島町徳前Ｃ遺跡[(1)]，志賀町鹿首モリガフチ遺跡[(2)]，押水町宿向山遺跡[(3)]・竹生野遺跡[(4)]から１点出土しており，時期的には弥生時代終末～古墳時代前期の所産と考えられる。

小結　近岡遺跡から弥生時代終末月影式期に属する漁網錘が11点出土している。漁網錘はいずれも管状土錘の範ちゅうに含まれるものであり，これらの集成を通じて石川県における弥生時代～古墳時代前期の網漁業について考えてみることにする。

第4表　弥生時代～古墳時代前期の漁網錘出土遺跡一覧表

番号	遺　　跡　　名	時　　代	数量
1	七尾市奥原遺跡	弥生時代終末～中世	15
2	七尾市国分高井山遺跡	弥生時代終末～古墳時代初頭	1
3	志賀町倉垣遺跡	弥生時代終末	1
4	金沢市近岡遺跡	弥生時代終末	13
5	金沢市近岡カンタンボ遺跡	弥生時代後期，古墳時代前・中期，奈良時代後半	2
6	金沢市戸水C遺跡	弥生時代～中世	100
7	金沢市無量寺遺跡	弥生時代終末，中世	47
8	金沢市無量寺B遺跡	弥生時代中期～終末	2
9	金沢市桂遺跡	弥生時代終末～中世	19
10	金沢市畝田・寺中遺跡	古墳時代初頭，平安時代前期	8
11	金沢市寺中遺跡	弥生時代中期～終末，中世	15
12	金沢市南新保D遺跡	弥生時代中期～古墳時代前期	1
13	金沢市西念・南新保遺跡	弥生時代中期～終末	10
14	金沢市古府クルビ遺跡	弥生時代終末，中世	1
15	金沢市新保本町西遺跡	弥生時代終末～古墳時代前期	1
16	松任市宮永遺跡	弥生時代終末～古墳時代前期，奈良時代末	1
17	松任市相川新雁田川遺跡	弥生時代終末～古墳時代	1
18	松任市徳光ヨノキヤマ遺跡	弥生時代中期～中世	10
19	野々市町御経塚遺跡	古墳時代前期	1
20	加賀市敷地町後方遺跡	弥生時代終末	3



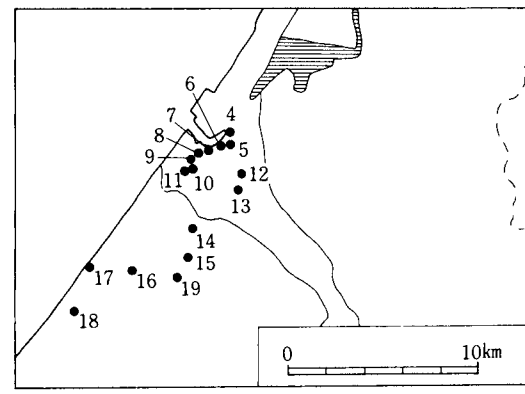
第32図　大溝出土土製品実測図（S＝1／2）

確認できた資料は20遺跡252点である。(第4表)遺跡での漁網錘の出土状態は，各時代・時期の土器を含む同一包含層から土器と混在して出土することがほとんどであり，時代・時期決定が困難な場合が多い。弥生時代～古墳時代前期に属することがほぼ確実なのは，奥原[5]・国分高井山[6]・倉垣[7]・近岡[8]・無量寺B[9]・西念南新保[10]・新保本町西[11]・御経塚[12]・敷地町後方[13]の9遺跡47点の資料であり，これらについて形態・重量をみていくことにする。

形態ではA～C3類に分類され，それらはさらにa・b類に細分される。すなわち，漁網錘はAa類，Ab類，Ba類，Bb類，Ca類，Cb類の6類に形態分類される。なお，a類は長さと幅がほぼ等しいものであり，b類は長さが幅の2倍を越えないものである。前述の9遺跡47点における形態の内訳はAa類29点（61.7%），Ab3点（6.4%），Ba類7点（14.9%），Bb類1点（2.1%），Ca類3点（6.4%），Cb類1点（2.1%），不明3点（6.4%）であり，A類が32点で全体の68.1%を占め，ついでB類が8点で17.0%を占めている。長さと幅の関係でみると，a類が39点と最も多くて全体の8割以上となっている。管状土錘は県内では62遺跡から660点の出土が確認されており，そのなかでAa・Ab・Ba・Bb類はそれぞれ37点，4点，18点，21点出土している。当該期の管状土錘がそれぞれの形態のなかで占める割合はAa類で78.4%，Ab類で75.0%，Ba類38.9%，Bb類で4.8%となっている。これらのことから弥生時代～古墳時代前期の管状土錘ではA類の球状を呈するものが大多数をしめ，長さと幅の関係においては両者がほぼ等しい長さのものが多いという傾向にある。そしてさらにいえば，A類として分類された管状土錘は当該期においてのみ特徴的なものであるといえよう。

次に重量についてであるが，漁網錘の属性のなかで重量は最も重要な要素である。奥原・近岡・敷地町後方の3遺跡16点についてみると，20.1～80.0gに分布・集中し，これらは和田晴吾氏の重量規模の中型[14]の範ちゅうに含まれるものである。また，これらの平均重量は46.0gであり，欠損品で完形時の重量を推定したもの6点を加えた場合の平均重量は52.8gである。県内における縄文時代の漁網錘の重量では，30g台が最も多く，10～70g台で全体の約84%をしめ，平均重量は約47gであることを考えあわせると，この時期の漁網錘は形態・素材の面で違いはみられるものの重量的にはきわめて縄文的であるといえよう。[15]

近岡遺跡の位置する北加賀で，漁網錘を出土する遺跡の分布（第33図）と遺跡周辺の河川・潟湖における現生魚種との比較を通じ，漁網錘の対象となった魚種について考えてみることにする。その分布と汽水域・コイ域とほぼ対応関係を示しており，当時の網漁業の対象となった魚種としてはボラ・コイ・フナなどが考えられる。



第33図　北加賀における弥生時代～古墳時代前期の漁網錘出土遺跡分布図

石川県内においても管状土錘は水稲栽培に随伴して伝播してきたことが知られる。[16]この時期

の漁網錘は形態的には長さと幅がほぼ等しくて球状や円柱状を呈するものが多いという傾向にあり，重量的には縄文のそれとほとんど変わりない。これらの漁網錘を用いた網漁業は汽水域-コイ域でおこなわれ，コイ・フナ・ボラ・マハゼなどの魚種が網漁業の対象となったものと考えられる。この汽水域-コイ域に広がる平野部は水稲栽培に適した土地であり，網漁業は稲作と組み合わさって新しい展開をみせていくという特色がある。

ところで，他の漁具としては有頭棒や手網があり，有頭棒については近岡遺跡のほかに金沢市北安江遺跡[17]や金沢市二口六丁遺跡[18]でみられる。北安江遺跡からは確実に有頭棒として認められるものは5点出土しており，長さはおよそ60cm前後である。手網も北安江遺跡と二口六丁遺跡からそれぞれ1点，3点出土しており，これらの漁具も漁網錘同様に汽水域-コイ域の河川・潟湖での漁業活動に使われたものと考えられる。

第4表 作 製 文 献

(1) 西野秀和・平田天秋・他 『七尾市奥原縄文遺跡・奥原遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター 1982年 金沢。
(2) 土肥富士夫 『国分高井山遺跡』 七尾市教育委員会 1984年 七尾。
(3) 土肥富士夫・橋本澄夫 『倉垣遺跡』 志賀町教育委員会 1985年 石川県志賀町。
(4) 宮本哲郎・他 『金沢市大友・近岡遺跡』 金沢市教育委員会 1984年 金沢。
(5) 楠 正勝『金沢市新保本町東遺跡・西遺跡 金沢市近岡カンタンボ遺跡』 金沢市教育委員会 1985年 金沢。
(6) 平田天秋・東四柳史明『金沢市・戸水C遺跡発掘調査概報』石川県教育委員会 1976年 金沢。
(7) 高堀勝喜・荒木繁行・四柳嘉章 「金沢市・無量寺遺跡」『石川考古学研究会々誌』 第16号 1973年 金沢。
(8) 南 久和・登城美景・簗谷久美 『金沢市無量寺遺跡』 金沢市教育委員会 1983年 金沢。
(9) 米沢義光・三浦純夫 「金沢市桂遺跡」『石川県立埋蔵文化財センター年報』 第5号 1985年 金沢。
(10) 楠正勝・南久和 『金沢市畝田・寺中遺跡』 金沢市教育委員会 1984年 金沢。
(11) 宮本哲郎 『金沢市寺中遺跡』 金沢市教育委員会 1977年 金沢。
(12) 宮本哲郎・他 『金沢市南新保D遺跡』 金沢市教育委員会 1981年 金沢。
(13) 宮本哲郎・他 『金沢市西念・南新保遺跡』 金沢市教育委員会 1983年 金沢。
(14) 増山 仁・楠 正勝・他 「金沢市古府クルビ遺跡調査報告」『金沢市埋蔵文化財調査年報』 金沢市教育委員会 1984年 金沢。
(15) 楠 正勝 『金沢市新保本町東遺跡・西遺跡 金沢市近岡カンタンボ遺跡』 金沢市教育委員会 1985年 金沢。
(16) 戸澗幹夫 『松任市宮永遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター 1984年 金沢。
(17) 吉岡康暢・他 『加賀三浦遺跡の研究』 石川県教育委員会・松任町教育委員会 1967年 金沢。
(18) 高 一男 『松任市徳光ヨノキヤマ遺跡』 石川県教育委員会 1976年 金沢。
(19) 滋井 真・高堀勝喜・他 『野々市町御経塚遺跡』 野々市町教育委員会 1983年 石川県野々市町。
(20) 北野博司・田嶋正和 『敷地町後方遺跡発掘調査報告』 加賀市教育委員会 1982年 加賀。

3　木器と木製品

(1) 農耕具

鋤（第34図１・２）

平面形状が長方形を呈する刃部（耕起部）に、その上部に長方形の頭部（着柄部）をつくり出したタイプである。着柄基部に楕円形を呈する柄穴を鈍角に穿った着柄鋤(組合せ鋤)の一種である。刃部前面は，ゆるい彎曲を呈するスコップ状となっており、頭部から刃部の間にはゆるい稜を形成する。頭部から刃部上半にかけての外周は，いかり肩となっている。刃部の身は極めて薄くつくられているのに対し，頭部は厚くつくられている。柄穴の両側には，一辺が１cm前後の方形の小穴が一対穿たれている。その小穴は，柄のゆるみや揺れを防ぐ補強用のあて板を装着するための目釘の留め穴と考えられる。[19] 頭部上辺は後面に向って斜めそぎになっている。１は全長27.2cm，同幅21.7cm，厚さ0.5cm，着柄孔の長径4.5cm，頭部の長さ4.6cm，同幅9.7cm，同厚さ1.7cmを測る。２は全長28cm，刃部の幅19.8cm，同厚さ0.4cm，柄穴の長径4.8cmに短径3.5cm，頭部の長さ4.8cm，同幅9.8cm，同厚さ1.1cmを測る。樹種はアラカシと考えられる。[20]

鋤の把手（第35図６・７）

６は逆三角くり抜き形になると想われるタイプである。全体的に丁寧なつくりであり，握りにあたる上辺は角を取って隅丸に仕上げられている。現存長の長さは14.4cmを測る。７は別木と組み合わせでＴ字形を呈するタイプで，握りの中央に長方形の柄穴を穿っている。握部上辺は外彎して弧状を呈し，その下辺の柄穴の両脇には，握り易いように凹をつくり出し波状を呈している。握部の断面形は楕円形を呈し，左右の側面には，組み合わせの補強・補修のためのものと想定される５mm前後の小孔が貫通している。長さ10.1cm，厚さ3.5cmを測る。

鍬（第35図３・４・８・９）

３は鍬身半分と刃縁部付近が欠損している。頭部は，上辺とその両角がやや丸味を有する台形状を呈すると想われ，頭部から刃部上半に移行する側縁は,「「く」の字状に抉るように屈曲している。刃部の側縁は外彎し，刃部三分の二付近から刃縁部にかけて最大幅を有すると推定され，丸味をもつものの比較的刃部側縁の長いタイプといえよう。全体的に薄手のつくりである。頭部後面の柄穴の上部では，わずかに厚味を増して舟形突起状の高まりを示しているが，明瞭な段をなしていない。柄穴は頭部上辺から６cm下に径４cmの円形に穿たれている。現存全長26cm，刃縁部の復元推定幅は16cm前後になると推定される。

４は頭部上辺と刃縁部の一部が欠損する広鍬である。頭部側縁には凸状の方形張り出しを削り出している。刃部側縁は，ゆるやかに外彎して刃縁部付近で最大幅を有する。刃部の厚さはほぼ一定である。後面には，頭部から刃部上端にかけて平面形が逆三角形を呈する舟形突起をつくり出している。突起の横断面は台形を呈している。柄穴は楕円形を呈し，着柄角度約70°の鋭角に穿たれている。現存長25.2cm，刃縁部の復元推定幅19.7cm，刃部の厚さは全体的に均一で０.７cmを

測る。

8は長径3.8cmを測る楕円形の柄穴を鋭角に穿った鍬の舟形突起と推定されるものである。9は鍬身の舟形突起上部の部分片である。前面の頭部から刃部への移行部には張り出しがあり，いわゆる「ゲタ」をつくり出している。柄穴は丸く鋭角に穿っている。

「ナスビ形」木製品（第35図5）

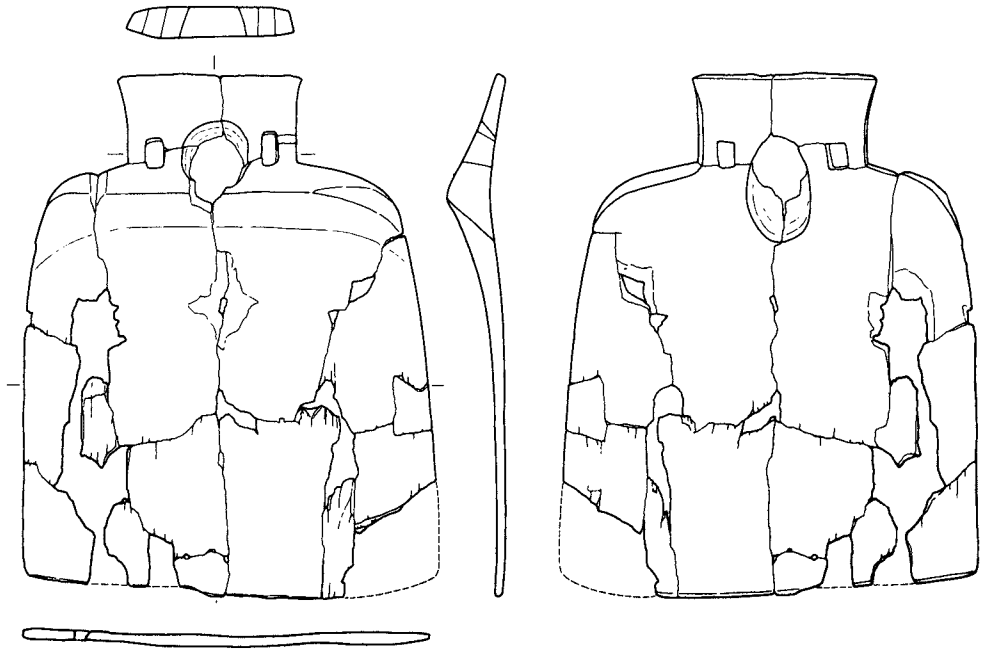
刃部先端を欠損する片側のみの破片である。頭部は，上半が細く下半にむかってゆるやかに外反しながら幅をひろげてゆく傘状を呈する。頭部上半には，着柄のための支木を挿入したと考えられる一辺が1cm前後の菱形を呈する小穴と，高さ5.7cmで底辺が推定2cmの三角形を呈する柄穴が穿たれている。頭部と刃部の境にあたる側縁には，抉り込みがいれられ，刃部は二股に分岐している。全体的には，扁平な板状を示すが，後面の中央部は周辺部からみればややふくらみを感じる。刃部側縁はゆるく外彎し，外周縁には刃をつくり出している。この種の木製品は，かつて黒崎直氏が「ナスビ形着柄鋤」と呼称したものにあたるが，[21]従来，その着柄法が不明瞭であったことから，鋤と断定するには異論もあった。近年，静岡県宮坂遺跡出土の「ナスビ形」木製品に柄が装着したものが出土しており，[22]刃部が二股ないし三又にわかれるものは鍬の一種とみなす考えが町田章氏によって提起されている。[23]本例の着柄法については不明であり，ここでは鍬か鋤かの断定は避けておく。現存全長52.5cm，着柄基部26cm，同基部下端の復元推定幅9cm，刃部の残存長26.2cm，刃部中間の幅3.5cm，厚さ0.8cm前後を測る。

えぶり（第36図11～13）

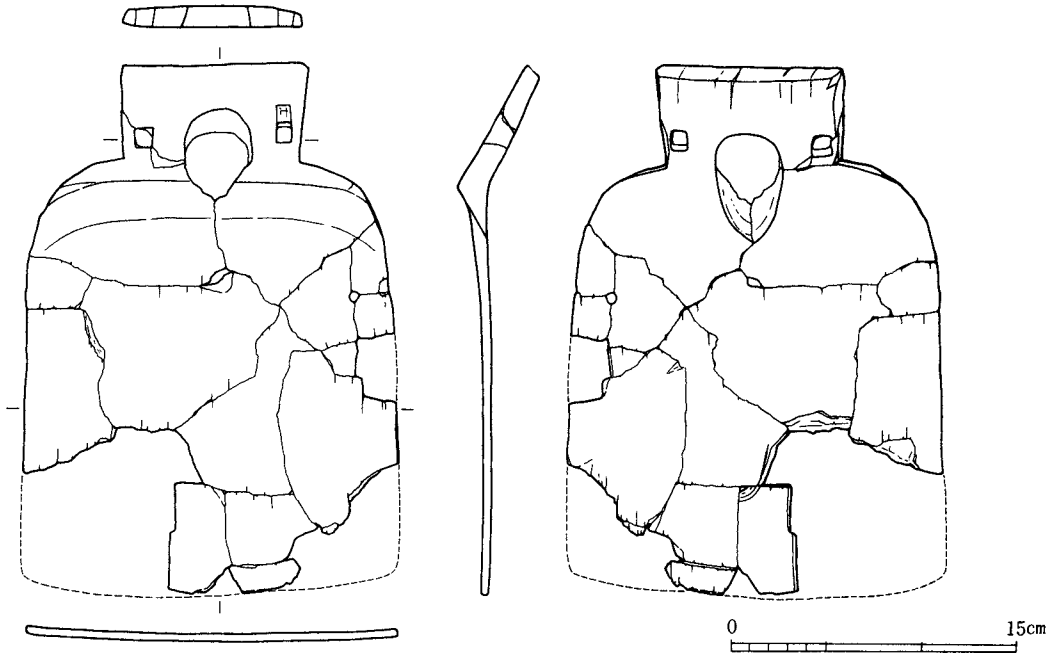
11は，直線的な上辺の端部を斜めに削り肩をつくり出す横長の形状を示すものである。柾目材を横木取りし，上辺下2cmの中央部に短辺1.8cm長辺4.2cmの長方形を呈する着柄孔が穿たれている。上辺部には半円形を呈する刻みが二個認められ，それらには焼痕が伴っており，火切臼として再利用された可能性がある。現存長46cm，幅11cm，身の重さ1.6cmを測る。12は，柾目材より木取りした身部側縁が丸味を有する小振りのタイプである。上辺部下約2cmの中央には，短辺1.1cm長辺7cmの長方形を呈する着柄孔が穿たれている。現存長28cm，幅8.6cm，身の厚さ1.5cmを測る。13は，柾目材を平面形が台形になるように横木取りしている。上辺下約3cmの中央より少し横にずれた位置には，径が1cmの円形を呈する2孔一対の小孔の一部が看取でき，柄穴の部分に相当すると考えられるが，周辺部が欠損しており実際の柄穴の形状は明確でない。残存する方の側縁寄りには，上辺から約3cm下に径1cmの円孔が穿たれており，おそらく支木を挿入したものと想われる。上辺の復元推定長は31.5cm，刃縁部長36cm，幅8.5cmを測り，身部の厚さは1cm前後で他のものより薄手につくられている。

木製穂摘具（第37図18～22,）

「石庖丁形木製品」あるいは「庖丁形木製品」などと仮称されている穂摘具である。完形品はないが5点確認できる。形態は概ね平行四辺形になるもので，短辺の側縁が柾目と平行になるように木取りしたものである。刃面の片面には，石庖丁で擦切と呼ばれるものに類する浅い溝が握部の背にあたる上辺に平行しており，溝の中には，2孔一対の紐穴が穿たれている。背は厚く，刃

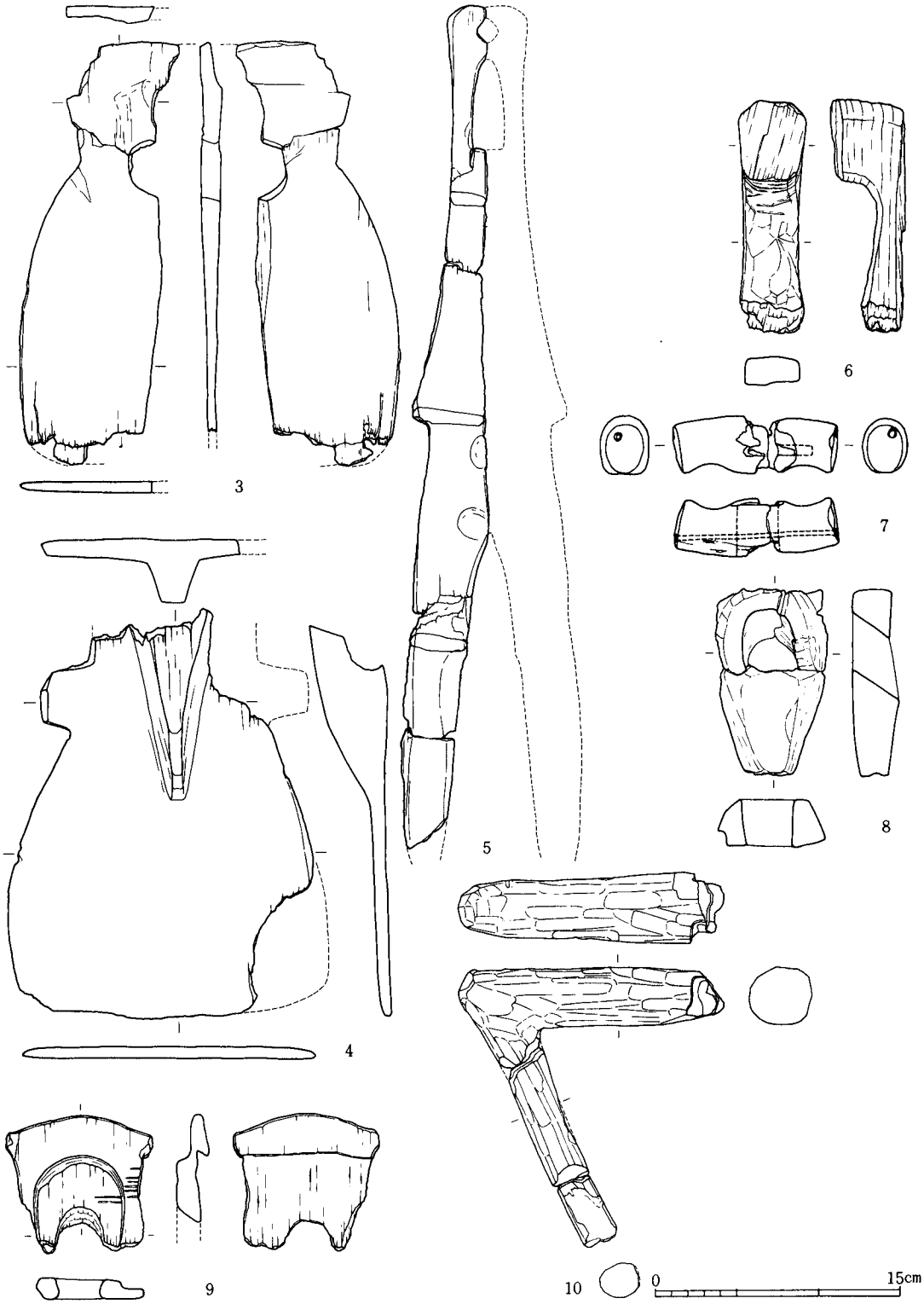


1

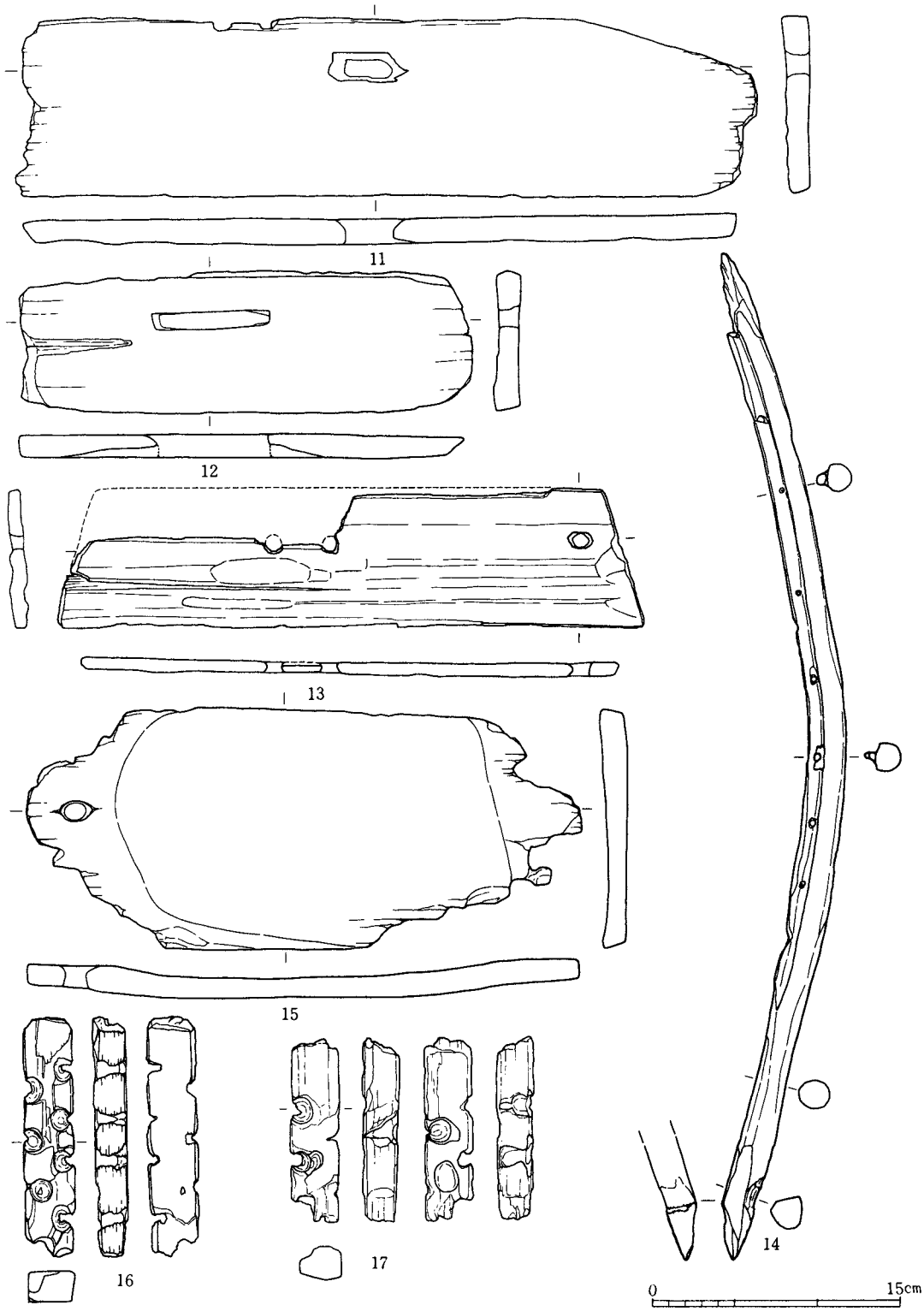


2

第34図　大溝出土木器・木製品（S＝1/4）



第35図　大溝出土木器・木製品（S＝1/4）



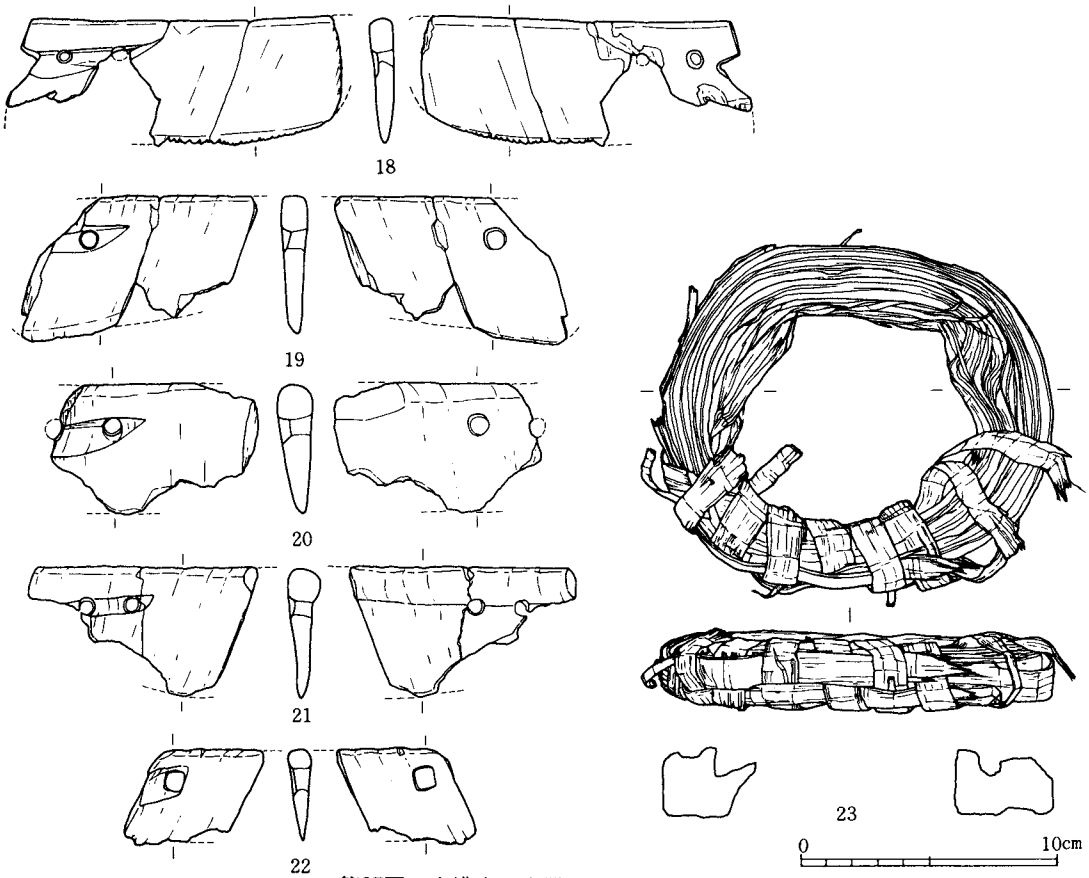
第36図　大溝出土木器・木製品（S＝1/4）

先にゆくに従って薄くなり，刃部の縦断面では刃面の一方が少し彎曲するタイプや，刃縁部付近で片刃を形成するタイプもある。

18は，刃面の左側上部に幅を拡げながら右から左に抜ける溝を有し，溝中に円形の紐穴が一対穿たれている。左外周の側縁には，背部から刃部に続く境に逆「く」の字状の抉り込みがいれられている。刃縁部は，刃を形成するために厚さを減じた弱い稜がつき，刃先には鋸歯状に刻みを施す他に類例をみない特徴的なものである。現存長13.1cm，幅4.9cm，刃部中央の厚さ0.8cmを測る。19は，刃縁付近で急角度で厚さを減じて明瞭な片刃を形成したものである。溝の断面形は，V字状をなしている。有溝面と反対の刃面は，背部から刃縁部にかけて比較的直線的につくられている。20は，刃部中央の厚さが1.2cmと全体的に厚味のつくりであり，背部は丸い。片刃ではあるが，つくりの稜線が弱い。21は，溝が左側に抜けるタイプで，他のものとは同様のつくりを示すものである。有溝面の反対の刃面は，内彎が顕著である。また，背部を厚くして丸くつくり出しているのも特徴的である。22は，紐穴が方形である点で他のタイプと異っている。方孔をもつものは溝を有しないことが多いようであるが，[24] 本例は溝を有しており，稀な例といえよう。

(2)　**工具**

斧柄（第35図10）



第37図　大溝出土木器・木製品（S＝1/3）

枝分れの部分から木取りしたもので，枝を握部とし，幹の部分を着柄基部としたものである。基部の先端にあたる着柄部分と握部の大部分が折損しており，どの種の斧を着装したか明らかでない。基部の断面形は円形を呈し，厚さ3.6cmを測る。基部末端の外周は，面取りして握部に至る。全体的に丁寧な加工痕を残している。着柄角度は約70°を測る。

鉄器の柄（第39図32）

端部に横断面形が径2.8cmを測る円形の頭状をつくり出し，握部とみられる基部と利器を装着したとみられる先端とを細身にし，軸の中程をやや胴張らせた形状をなすものである。先端部中央には，幅0.25cmで長さ6.3cmの中空部が切り込まれており，刀子などの鉄製利器の茎をさし込むためのものと考えられる。しかし，この形状は栓とみなすことも可能であり，切り込みは挿入する際の伸縮効果をねらったものとみることもできるが，ここでは柄と考えておく。全長16.6cmを測り，全体の加工は丁寧である。

(3) **漁具**

たも（第36図14）

弧の現存長64cmを測る。ゆるやかに彎曲する径2cmの枝部を利用したものである。現存する一方の端部には，削り込んで段差をもたせ裏面も斜めに削って，かかりをつくり出している。かかりから約12cm程の腹側にU字状に切り込んだ条溝があり，径約0.5cmの円孔9個が約4cm間隔で穿たれている。表面は総じて丁寧なつくりである。

(4) **生活用具**

皿状木製品（第36図15・第38図26）

15は内面を浅く削りこみ，一辺に耳とみられる張り出しを有し，そこに円孔が穿たれている。耳は両辺について一対をなすとみられる。身の平面形は本来長方形をなしていたと想定できる。ここでは皿状木製品としたが，大阪府恩智遺跡出土の蓋[25]とする木製品にも類するものである。26は，大部分が折損しているが，残存部から隅丸の長方形平面のものが考えられる。口辺の周囲約0.7cmを残して深さ1.3cmと浅く掘りくぼめたものであり，また内底面の立ちあがりもゆるやかであることから，槽ではなく皿と考えた。

火切臼（第36図16・17）

16・17ともに断面長方形の割材の柾目面に臼部をつくり出すものである。16は両端が折損し，現存長14.8cm，幅2.7cm，厚さ2cmを測り，片面には径1～1.5cm前後の焼けこげた円形の臼孔が両辺に4個づつ交互に配されている。側面の凹みも著しく，本来は火種が落ちやすいようにもとは縦溝が切ってあったものとみられる。17は両面に臼孔がみられ，側面には縦溝がみられる。

案（つくえ）（第38図24）

表面がゆるく彎曲して浅い皿状を呈し，本来の表面形が楕円形をなしていたと想われる。横木取りし，裏には高脚部をつくり出している。長崎県里田原遺跡[26]に類似品をみることができ，食物を盛る台であると考えられている案と呼ばれるものであろう。現存長19.6cm，幅10.3cm，高さ6.9cmを測る。

匙状木製品（第38図25）

身の約半分と柄が欠損している。先端がやや厚手で深さ約1.5cmに彫り，全体に丁寧につくられている。内外面に格子状の浅い傷が認められるが，加工に伴うものかどうかは判らない。身の現存幅5.9cmを測り，約7cm幅のものが復元できよう。中央部の厚さは1.1cmである。

矢羽根形木器（第39図35）

幅3.2cmで厚さ0.8cmの板材の一端を二又につくり出した板材である。二又の切り込みは，幅1cmで長さ5cmである。先端は折損しているが，その用途については，江上A遺跡で俵や蓆などを閉じあわせる際に用いたと考えたものに類する。[27] 現存長14.8cmを測る。

栓（第39図33）

頭部の平面形が円形をなし，軸部との接点には丹念に小さな抉り込みをいれて段をなしている。軸部は先端にむかってゆるやかに細くなり，断面形は最大径が1.5cmを測る円径を呈す。長さ10.7cmで全体に入念なつくりである。

(5)　**棒・杭・板材**

棒（第39図31・38～40）

31は，棒の一端に頭部をつくり出した全長32.2cmの有頭棒である。頭部には2.5cmのかかりが丁寧につくられている。軸部も二次加工して入念に仕上げ，断面形は径2cmの円形をなしている。39は一端に3.7cmの突起を削り出し，突起の中間約2cmの側面を1段低く削っている。全長51.4cmで，軸部の断面は楕円形で最大長径1.9cmを測る。40も一端に1.7cmの突起をつくり出し，全長54.8cmである。ところで，39・40の突起の削り出しは，弓弭（ゆはず）に類する形状を示しており，両者は丸木弓の部分片である可能性もある。しかし，他方の端部は折損しておらず弓弭となる加工も認められないので，現状では弓弭と断定できない。37・38は一端が折損し，38は先端を7.5cm程削って尖らせている。

杭（第39図41・42）

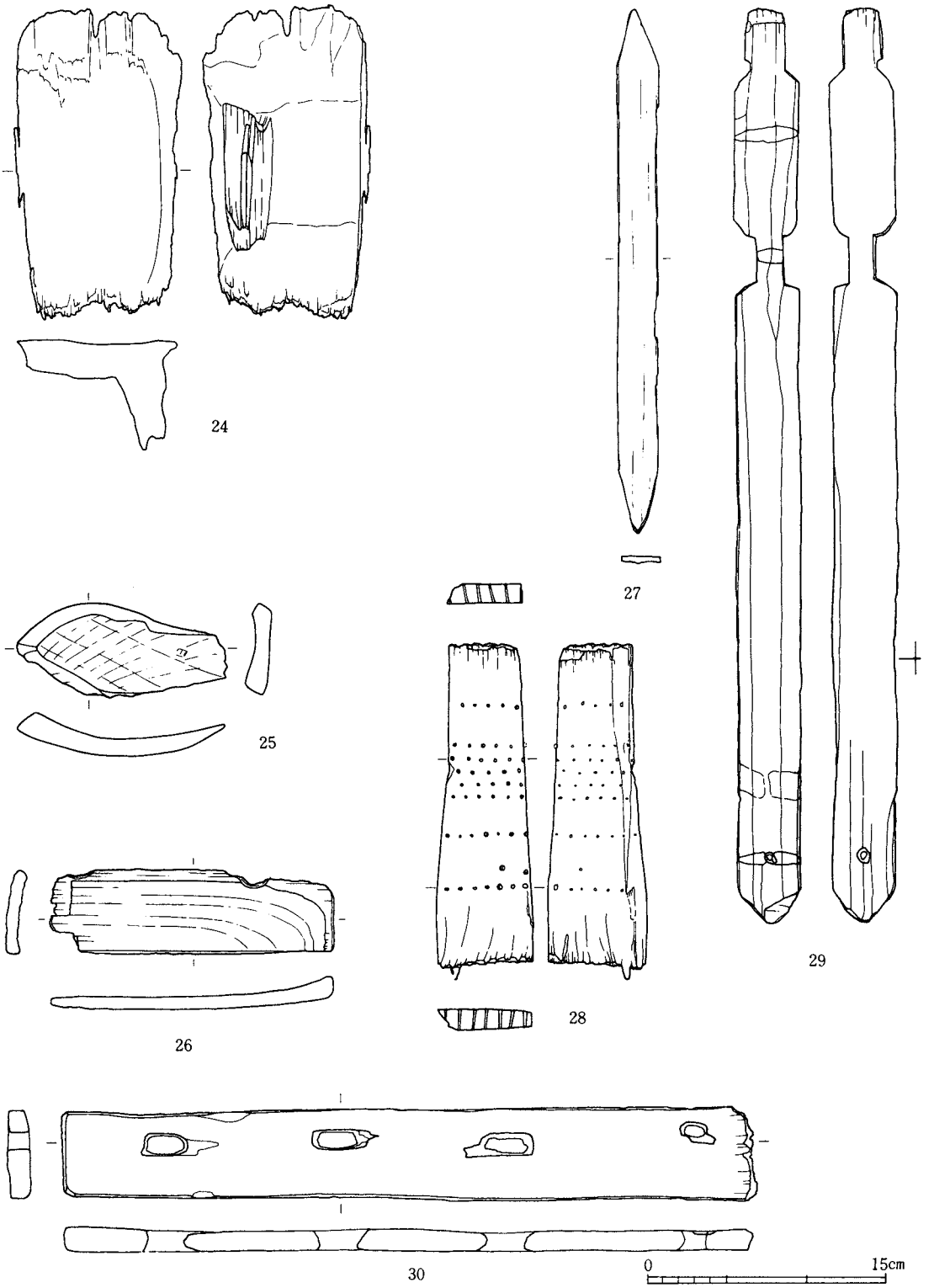
41・42ともに柾目材の割材の一端を尖らせたものである。41は先端部約9cmを尖らし，断面は最大長径3.9cmの楕円形である。42は，先端を10～20cmにかけて削り尖らせたもので，最大幅が5.3cmを測る不整形な多角形である。

板材（第38図30，第39図34）

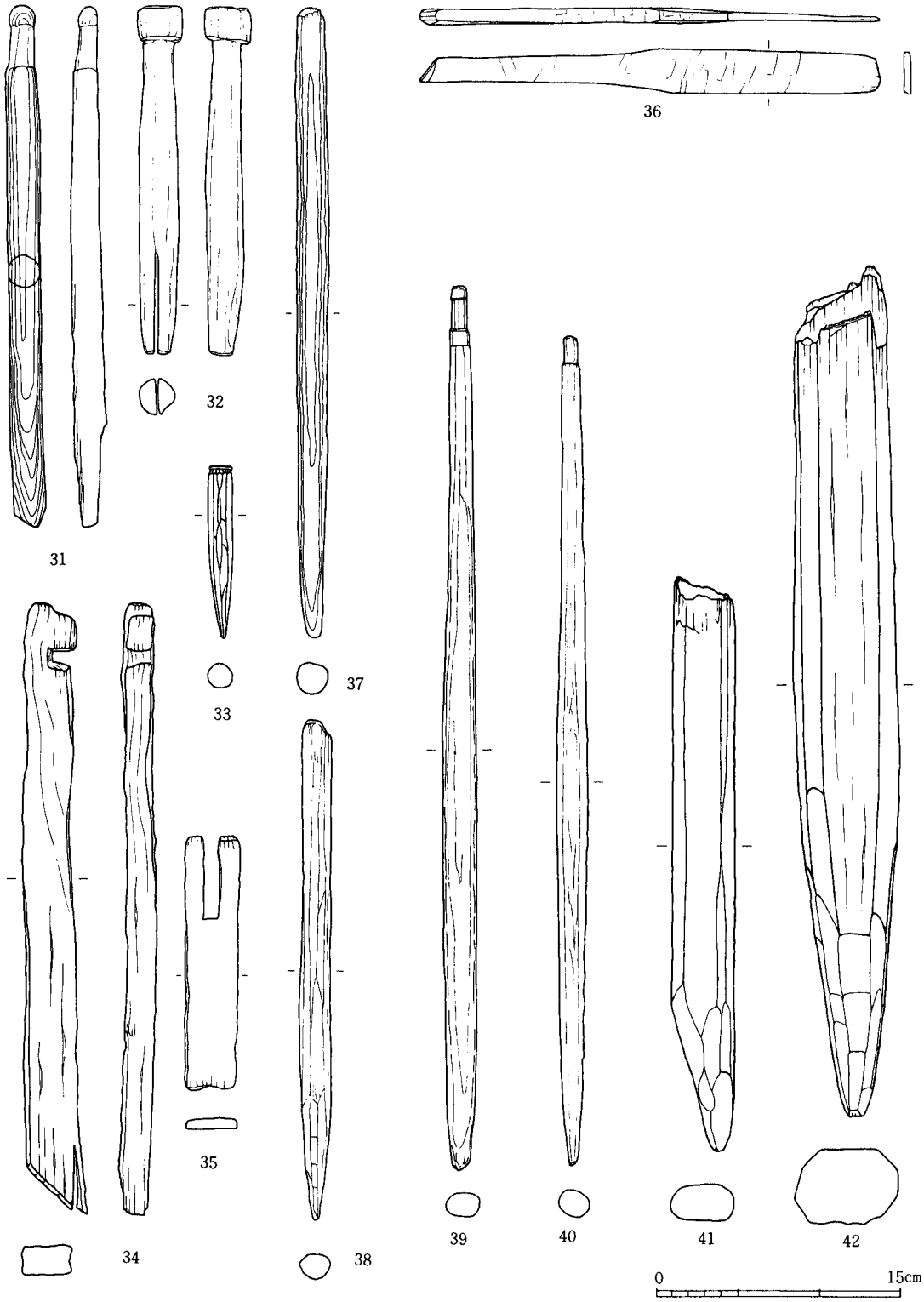
30は一端が折損する。幅5.9cm，厚さ1.5cmの板材に長辺1.5～2.5cmで短辺約1.5cmの長方形を呈する穴3個と小穴1個を穿っている。34は幅3.4cm，厚さ2cmの板材で一端を斜めそぎしている。他の一端は折損して不明だが，側辺には約1cmの方形を呈する抉り込みがある。

(6)　**その他の用途不明木製品**（第38図27～29，第39図36）

27は，幅2.6cm厚さ0.52cmの板材の両端を山形に尖らせたものである。全長32.8cmを測り，入念に仕上げている。28は，厚さ1～1.5cmの板状の木片で両端が折損して現存長21cmを測る。片面から0.1cm前後の小さな孔が横方向に約0.8cmの間隔で並例して穿たれている。この種の有孔板状木製品は，畿内の数ヶ所で類例をみることができ，中には朱を全面に塗布するものもあるが，



第38図　大溝出土木器・木製品（S＝1/4）



第39図　大溝出土木器・木製品（S＝1/4）

本例にはその痕跡は認められない。29は，現存長57.3cm，幅4cm，最大厚1cmを測る。端部を山形に削り出し，それより40～50cmの二ヵ所で，両側縁に台形状の切り込みを入れている。端部には，径0.8cmの不整形な円孔が穿たれている。平面形は，布巻具に類似しており機織具の一種とも考えられる。36は，平面形が杓子状を呈するものである。全長28.4cmで，身部の長さ13cm，柄部の長さ15.4cmを測る。身部の幅は2.7cmを測り，身部から柄部への側辺の移行は稜角的である。柄部の先端は斜めそぎしている。一部に朱などの赤色顔料の塗布の痕跡が認められる。

(7) **樹皮製品**（第37図23）

樹皮や小枝状のものを重ねて芯とし，それを幅1.3cmの樹皮で巻き束ねた長径15.6cm，高さ2.5cmのドーナツ状を呈するものである。用途は不明だが，秋田県・五城目町中山遺跡出土の樹皮製品[28]や，江上A遺跡で器台と報告された樹皮製品[29]にも類するものである。また，民俗例にみるところの頭上運搬具である「ワ」にも近似する。

中山遺跡のそれは，縄文後期末～晩期初頭に比定される直径30cmのもので，高橋忠彦氏は兎を補獲する道具の可能性を示唆している。県内の白山麓でも，直径30～40cmの輪状を呈する「シブタ」と呼ばれる兎の補獲具があり，雪穴に潜む兎の寝こみを襲うものである[30]。しかし，本遺跡の樹皮製品は，中山遺跡の例や「シブタ」とは直径が大きく異なるものであり，兎の補獲具とはみなし難い。また，江上A遺跡との比較においても，本例は高さが低く器台とするにも問題がある。「ワ」については，内灘町大根布地域に頭上運搬の習俗が近年まで存在したことが知られており[31]，本遺跡と近接する地域の例として興味深い。しかし，頭上運搬の習俗が弥生時代末期にまで遡るとなると問題も大きく，本例の用途については今後の検討課題といえよう。

小　結

本地域は，自然湧水地帯にあって，グライ土壌が被覆する保水性の高い湿田を基盤とするところである。土層断面の特徴は灰色粘質土を基調としており，当時もグライ土壌から灰色土壌に基盤を置いたものと推測でき，八賀晋氏[32]が分類する地下水型に相当する湿田経営であったとみられる。こうした土壌の特性に如何なる農耕具が適応したかは，今回出土した数点の木製農耕具の語るところであり，当時の営農形態の一端を知るうえで貴重な資料を提供したといえる。

鋤2点は，先述したように別木をもって補強する北陸型ともいうべき特有のものであった。身は極めて薄くつくられているが，アラカシ材を使い，別木をあてがって強度を補強している。踏鋤の一種であろうが，身は彎曲していることから，単に反転具としてでなく，移動具としての機能も期待できたことであろう。鍬においては，広鍬の3・4ともに薄手につくられており，4のように厚味の舟形突起をつくり出したものや，9のように「ゲタ」を有するものがあり，概して深耕用に耐え得るように強靱さへの工夫がなされているといえる。薄くつくられているのも，徐々に深くまで掘り下げる作業に適合したものとみられる。これらの点からすれば，単に農耕具というだけでなく，開墾・土木用具としての有効性をも兼ねそなえているといえる。それは，当地が保水性が高いうえに大野川や周辺の小河川の流路が不安定な環境下にあることから，稲の根ぐされ防止などから水処理の適正な管理と，周辺河川の流路の安定を図ることが必要であり，湿田

経営においては，土木工事にも耐え得る農具が不可欠であったからと推測される。また，本遺跡は月影期から集落設営を開始しており，弥生中期以来の既存の可耕地を有する集団とは異なり，新な水田の獲得が重要な課題であって，多面的な機能を有する農耕具が必要であったことは充分に予測されるところである。北陸的といわれる木製の鋤や鍬がこの期に出現するのも，月影期の急激な遺跡増加にみる可耕地の獲得を背景とした，新な湿田経営に適合した農耕具として生み出されたものと考えたい。本遺跡で検出された大溝は，月影期の平地集落跡では類例の多い施設であり，その機能については，灌漑用排水の役割や，いわゆる「水城（みずき）」として軍事的防禦施設的な役割についても検討する必要があるが，いずれにしても,月影期における土木工事の一面を窺せるものである。

その反面，鍬のなかには3の広鍬のように舟形突起のつくり出しの弱い，いわゆる「退化現象」のみられるものがある。これは根木修氏[33]も指摘されているように，農耕具として機能的に土木具から分離して使用されたことを示し，木製農耕具の一層の発展を物語るものである。先の指摘と矛盾するようだが，そうではなく，機能・性格の分離したものと未分離の両者が複合していることこそ，月影期における湿田経営の特性と，稲作技術の高度な内容を示すものといえる。

ところで，本遺跡出土の木製品のすべてが完成品であることに注意しておきたい。周辺の弥生から古墳時代前期の木製品出土遺跡の多くも，ほとんどが完成品を出土している。すなわち，大阪府瓜生堂遺跡[34]で指摘されているように，他の集落から完成品の供給をうけた集落ではないかとみられる。邑知地溝帯にある拠点集落とみられる次場遺跡では未成品が多く，そうした自給的な生産状況とは異なった様相を窺わせている。

最後に，木製農耕具に関連して鉄製用具の普及の問題がある。大溝からは剣とみられる鉄器や，砥石が出土しており，鉄器そのものはかなり普及していたものと推測される。しかし農耕具に限っては，湿田経営という特性から木製農耕具が圧倒的に優位であり，鉄製農具化への必然性は乾田地帯に比して少なかったのではなかろうか。石庖丁から手鎌への過渡的形態とみられる庖丁形木製品の出土にみるように，鉄器は生産用具として直接的に農耕に係っていないように想える。鉄器は，まだまだ木製農耕具の木工具や武器としての利用度が高い段階にあったとみられる。弥生終末期の墳墓群として著名な七ッ塚墳墓群[35]において，盟主墳となる1号墳丘墓の副葬品をみても，鉄剣・鉇・鉄斧という組成であるのも，そうした傾向を象徴しているものと考えられる。なお，本遺跡では数点の打製石器が出土している。この期の打製石器の出土頻度については，むしろ畑作に適合した耕作具として，畑作への依存度を示す指標とすべきかもしれない。

4　石器と石製品（第40・41図・図版第13）

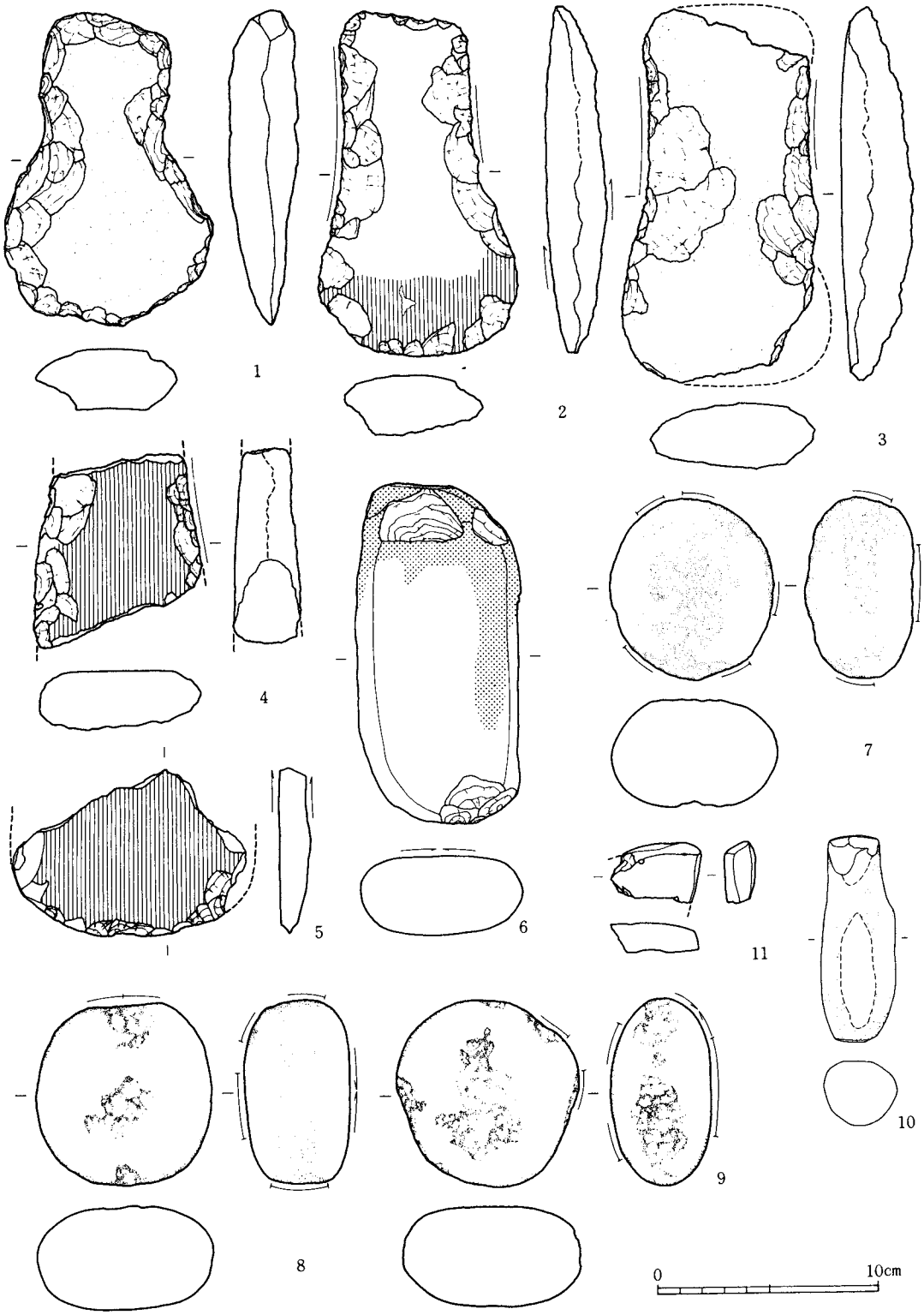
第5表　石器・石製品一覧表〔単位はcmおよびg．( )を付したものは現存値を示す〕

遺物番号	石器器種	出土層位	遺存状態	石質	長さ	幅	厚さ	重さ	挿図番号
大溝C 1	打製土掘具	中層	欠損	火山礫凝灰岩	(7.5)	(10.6)	(2.4)	(189.2)	第40図 5
大溝C 2	打製土掘具	上層	完形	火山礫凝灰岩	14.3	9.5	3.3	368.5	第40図 1
大溝C 3	打製土掘具	中層	完形	安山岩	15.9	9.3	2.7	440.6	第40図 2
大溝C 4	磨石	不明	完形	輝緑岩	15.0	7.7	3.8	785.5	第40図 6
大溝C 5	砥石	下層	欠損	粗粒砂岩	(8.1)	(10.0)	(5.5)	(473.5)	第41図 1
大溝C 6	敲石	下層	完形	角閃石安山岩	8.4	7.5	4.9	383.5	第40図 7
大溝C 7	打製土掘具	下層	欠損	石英粗面岩	(17.2)	(9.0)	3.1	(567.1)	第40図 3
大溝C 8	砥石	下層	完形	緑色凝灰岩	11.2	8.0	5.2	709.0	第41図 2
大溝C 9	敲石	下層	完形	石英安山岩	8.5	8.0	4.8	504.5	第40図 8
大溝C10	砥石	下層	欠損	石英安山岩	(7.4)	(5.1)	(4.0)	(210.5)	第41図 3
大溝C11	打製土掘具	下層	欠損	火山礫凝灰岩	(8.8)	(7.8)	(2.7)	(283.0)	第40図 4
大溝C12	敲石	下層	完形	安山岩	8.6	8.5	4.6	445.7	第40図 9
大溝C13	磨製石製品	下層	欠損		(2.8)	(3.9)	(1.4)	(16.7)	第40図11
大溝C14	敲石	下層	完形	緑色凝灰岩	9.3	3.4	3.1	129.7	第40図10
大溝D 1	軽石石製品	上層	完形	軽石	5.2	5.2	3.0	10.0	第41図 4

本遺跡の大溝から出土した石器・石製品は総数15点を数え（第5表），器種としては打製土掘具・磨石・敲石・砥石などが確認された。出土状態について不明のものが1点あるほかは，上層・中層からそれぞれ2点，下層から10点検出された。時期的には弥生時代終末月影式を主体とするが，縄文時代晩期・弥生時代中～後期の土器もごく少量出土している。

生産用具

打製土掘具　5点出土した。（第40図1～5）同図1は形態的にはいわゆる弱分銅形をなし，頭部から刃部にかけて幅広となり，側縁部はやや強くくびれている。打製土掘具の機能は一般的に土掘り具として認められているが，その機能と密接に関係があると考えられる刃部は偏刃で刃縁が丸いものである。同図2もいわゆる撥形としてとらえられるものであり，側縁部がゆるく内曲する形態を呈している。使用によるものか両面ともに刃部から胴部中央付近の高さまで磨痕が認められ，剝離面側が自然面側より高くなっている。刃部は刃縁が円くなる形態のものである。同図3は頭部と刃部が少し破損しているがほぼ完形で，側縁部がゆるく内曲する撥形を呈している。刃部はやや欠損しているためその形態は明瞭でないが，刃縁がゆるく外湾する形態のものと推測される。同図4は胴部片であり，磨かれたためであろうか自然面が磨耗して光沢を帯びた状態となっている。同図5は刃部片であり，火熱を帯びたため色調が白赤色に変色しており，両面ともに磨痕が認められる。これら5点の打製土掘具はいずれも表面片方に自然面としての礫皮を残している。また石質としては火山礫凝灰岩・石英粗面岩・安山岩の3種類がみられることから，これらの石質の河原石を素材としてそれから剝片をとり，調整を加えて製作されたものと考えられる。完形およびほぼ完形の3点から本遺跡の打製土掘具の平均的な法量を求めてみると，長さ14～17.5cm，幅9～11cm，厚さ2.5～3.3cm，重さ370～600gである。これは金沢市北安江遺跡[36]のものと比べてやや長さが短く小振りであり，法量からいえば縄文晩期後半的[37]である。打製土掘具は着柄して使用されたと推測され，胴部の最も細い部分の幅が柄の幅と関係あるのではないかと考えられることから，ここではその部位についても計測してみた。第40図1～4はそれぞれ5.5cm，5.9cm，7.2



第40図　大溝出土石器・石製品実測図（S＝1／3）

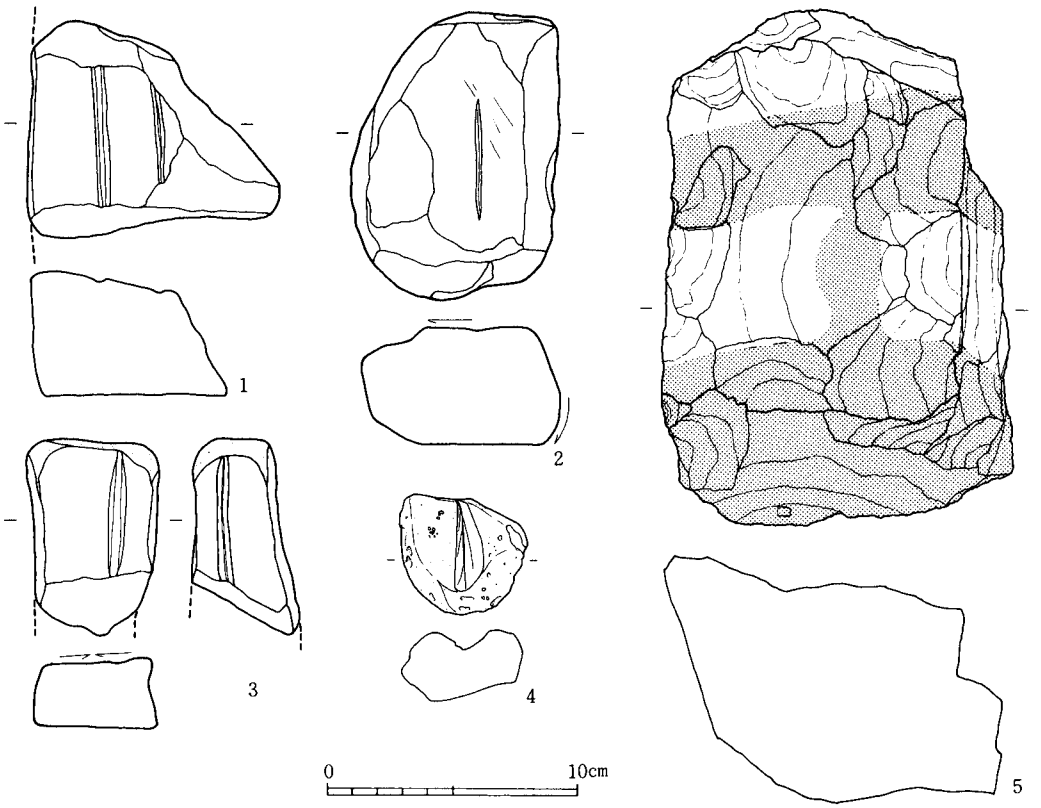
cm，6.4cmとなり，5.5～7.2cmに分布して比較的数値がまとまっている。

加工用具

磨石　2点出土している。(第40図6・10) 同図6は両面ともによく磨耗してすべすべしており，光沢を帯びて色調が周辺よりも濃くなっている。また，両面ともに表面から側面にかけて黒色のタール状付着物がみられる。同図10は棒状の両端部と表面に磨耗痕が認められるものである。

敲石　3点出土している。(第40図7～9) 同図7は角閃石安山岩質の円礫の両面と周縁部に敲打痕をもつものである。図上面の敲打痕は表面全体に広がっており，比較的浅い痕跡を残している。同図8は石英安山岩の円礫の表面に磨耗痕と敲打痕を，周縁部に敲打痕をもつものである。石質はそれぞれ石英安山岩と安山岩であり，両者ともよく磨耗している。同図8の周縁部にみられる敲打痕は幅1cm強の帯状をなし，上・下端では平坦面が形成されている状態で，その広さは両方とも3.5×2.5cmぐらいである。これら3点の敲石は形状的に比較的整った円形を呈しており，重量も380～510gと手に持ってちょうどぐらいの大きさである。こうした条件を満たす円礫を河原で捜してみるとなかなか見つからないものであり，石質・形状・重量的にかなり選択された河原石が磨石・敲石に使用されていることが推測され，けっして「手頃」な河原石が使われたわけではないと考えられる。

砥石　3点出土している。(第41図1～3) 同図1は粗粒砂岩のもので上面に幅2～3mmの溝が



第41図　大溝出土石器・石製品実測図（S＝1/3）

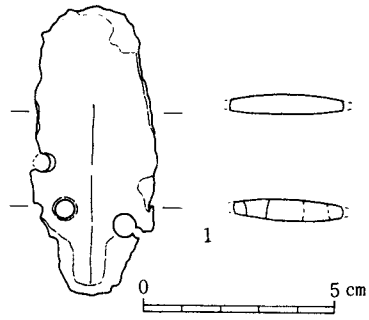
2条走っており，長さは5.5cmと4.0cmであり，下面と側面は平坦な面が形成されている。同図2も幅3mm，長さ5.5cmの溝が1条みられ，何か砥いだためであろうか4面に不明瞭ながらも摩耗痕が残っている。同図3も2面にやや幅広で浅い溝があり，幅は約6mm，長さ約5cmである。よく砥がれたためであろうか，4面とも使用痕が著しく，凹面を呈して中細となっている。

その他の石製品

第40図11は表面が磨かれた石製品であり，現存値で長さ2.8cm，幅3.9cm，厚さ1.4cm，重さ16.7gである。第41図4は擦り切りによる溝を施した軽石製品であり，重さは10.0gを測る。浮子として使われたことも考えられる。第41図5はヒスイ質の石核であり，点々で示した範囲は色調が深緑色となっており，他の部分は緑白色を呈している。長さ20.2cm，幅13.8cm，重さ4,320gを測る。

5　鉄　　器（第42図1・図版第13）

大溝下層から鉄器が1点出土している。現存最大長7.1cm，現存最大幅3.3cm，最大厚0.5cmを測る。原形をとどめていない部分も多いが，断面形は菱形に近く，鉄剣あるいは鉄槍かと思われる。その場合，欠損はしているものの幅を明らかに減じている箇所は茎にあたるのであろう。茎に近いところに直径4～6mmの円孔が三個穿たれている。



第42図　大溝出土鉄器（S＝1/2）

6　植物遺体（図版第13）

モモ・クルミ　モモ(27)とクルミ(6)の核が出土している。法量はモモが18～29×15～24×11～17mm(相加平均23×19×14mm)，クルミが25～33×19～25×22～23mm(相加平均29×23×23mm)を測る。

ヒョウタン　ヒョウタンの果皮(1)が出土している。

7　動物遺体（図版第13）

シカ　大溝からはシカの角が2点出土している。1点は下部の破片で自然落角の痕跡を看取し得る。もう1点は部位は特定できない。2点は同一物の部位を異にする破片という可能性もある。(平口哲夫氏の御教示による。)観察し得た限りでは，加工痕などは認められなかった。

シジミ　大溝からはシジミも数点出土しているが，調査条件が悪く遺存状態も良好とはいえなかったため，取り上げ可能なものは少なく，取り上げたものも保存に耐えるものはなかった。

第２節　第３号溝出土遺物

第３号溝から出土した遺物は遺物整理箱にして１箱弱であり，そのうち実測し得たものは次の土器・木器・石器(６点）である。

遺物

土器（第43図１～４）　１・２は内湾ぎみの「く」の字口縁の端部内面が肥厚する畿内布留糸の甕である。１は口径19.0cmを測り，胎土は砂粒をやや多く含み良好とはいえないが，焼成はふつうである。色調は淡灰褐色を呈する。２は口径17.5cmを測り，胎土・焼成ともに良好である。色調は淡褐色を呈する。１・２ともに口縁部と内面肩部上位はヨコナデによって仕上げ，球形に近いと思われる胴部の外面は縦方向のハケのあと肩部を横方向のハケで，内面はヘラ削りで仕上げている。外面には煤，内面には炭化物が付着している。２の口縁内面にはハケ状具痕が残り，１は肩部内面に指頭圧痕を看取し得る。口端部の肥厚面は幅広であるが，１は肥厚面がやや凹み２は逆に丸みをおびている。

３は「く」の字口縁をもつ壺である。胴部中位を欠くものの底部と口縁～肩部の破片は同一個体と判断でき図上復元した。それによれば，胴部形はやや長胴となるようである。口径14.4cm，底径５.６cmを測り，推定器高は28.0cm程度と考えられる。胎土・焼成は良好の部類に入り，色調は淡灰褐色を呈する。器面はハケ・ナデによって仕上げている。

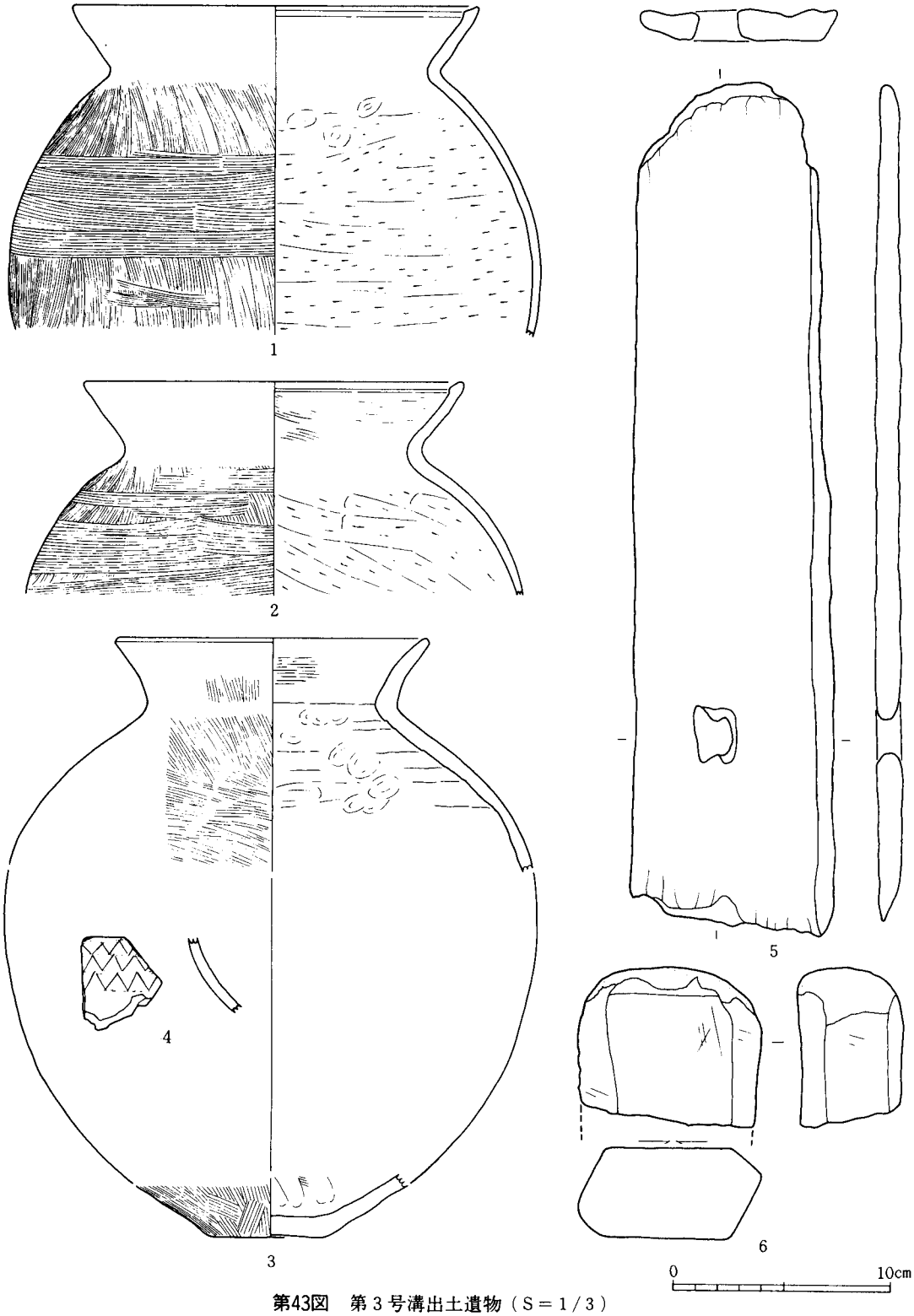
４は外面にヘラ状具による鋸歯文と沈線を交互に施したものである。胎土・焼成は良好で色調は淡黄褐色を呈する。壺あるいは高坏・器台類かとも考えたが，器種及び器形は今ひとつ明瞭ではない。

木器（第43図５）　５は残存最大長39.9cm，残存最大幅9.4cm，厚さ1.0～1.6cmを測る板状木製品である。短辺のうち比較的直線的に欠損している側から８～９cmの箇所に，中央からややはずれて1.8～3.0×1.6×3.8cmのやや不整形だが方形の孔を穿つ。

砥石（第43図６）　１点出土している。½ほど欠損しており，現存値で長さ7.1cm，幅8.3cm，厚さ4.1cm，重さは396.5ｇを測る。平滑な面が大小６面形成されており，いずれの面もゆるくカーブして凹面をなしている。石質は凝灰岩質である。

小結

第３号出土遺物のうち，時期比定の決め手は土器である。畿内布留糸甕の第43図１・２は，肥厚部が内傾し比較的幅広であること，とりわけ２は肥厚部が丸みをもつことなどから，北加賀地域における畿内布留式併行の高畠式土器と考えられる。３の壺も同期のものであろう。したがって，小片の第43図４は留保するとしても，同図５の木器や６の石器も同時期のものである可能性が高い。



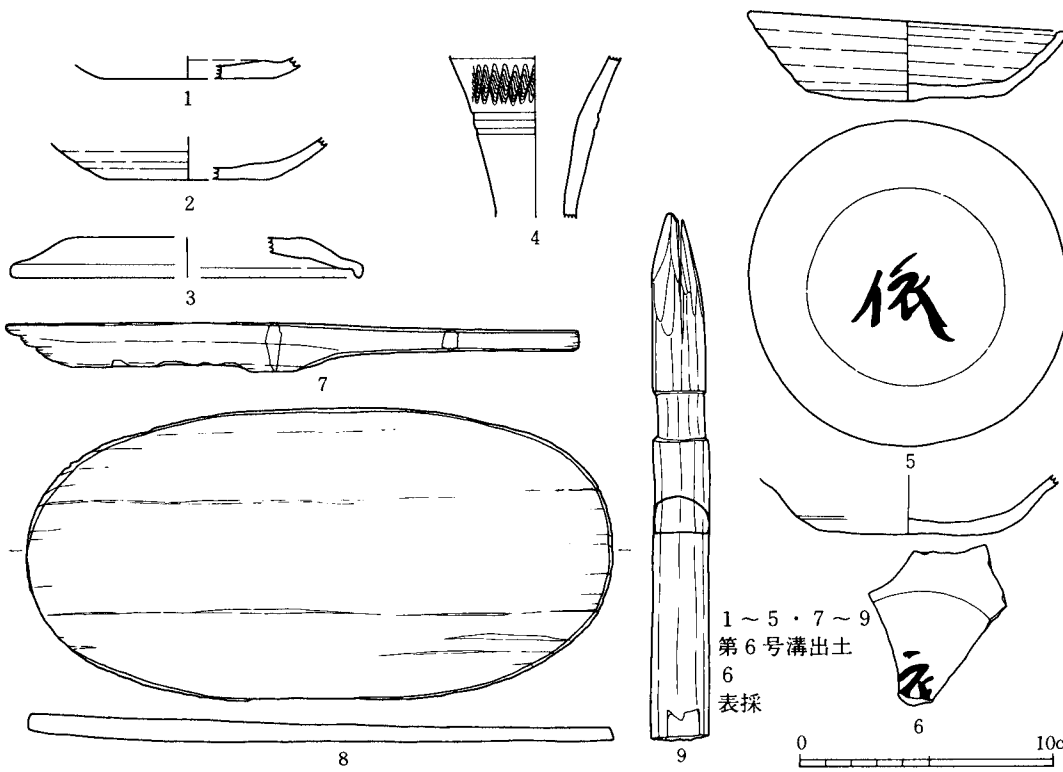
第43図　第3号溝出土遺物（S＝1／3）

第３節　第６号溝出土遺物

１．土　　器（第44図１～６）

須恵器　１・２ともに無高台坏の小片である。１は底径6.8cmを測る。２は底径6.4cmを測り底部から体部へは大きく外傾して変化し，器面は水挽きによる起伏が顕著である。３は推定口径13.6cmを測る蓋で，頂部と体部の境が段をなす平笠形で，口縁端部は下方へ短く屈曲している。４は瓶の頸部とみられる小片である。上部には８～10本を１条とする波状文が施された類例の少ないタイプで，その下に２条の浅い凹線をめぐらせるもので，古墳時代に遡るものであろう。

墨書土器　５は須恵器の無高台坏である。口径12.5cm，器高３.２cmを測り，器面は水挽きによる起伏が著しく，底面にはヘラ起し痕を残す。底面中央には「依」と墨書されている。本例は，後述する人形や木簡と共伴するものであり，本溝の年代を知る手掛りとなるものである。型式的には，富来町給分小袋窯期併行の所産と考えられ，先述の１・２も同類とみられる。「依」については，戸水Ｃ遺跡において多数出土するものであり，本遺跡との関連を示す資料といえる。なお，６に示した墨書土器は，表採品ではあるが便宜上ここで報告しておく。底径７cmを測る須恵器の無高台坏で，底部から体部へは丸味をもって外傾して立ち上がる。底面中央付近には，「依」と読



第44図　第６号溝等出土遺物（Ｓ＝１/３）

める部分が墨書されており，おそらく「依」を墨書したものである。両者の筆致は，別筆によるものとみられる。

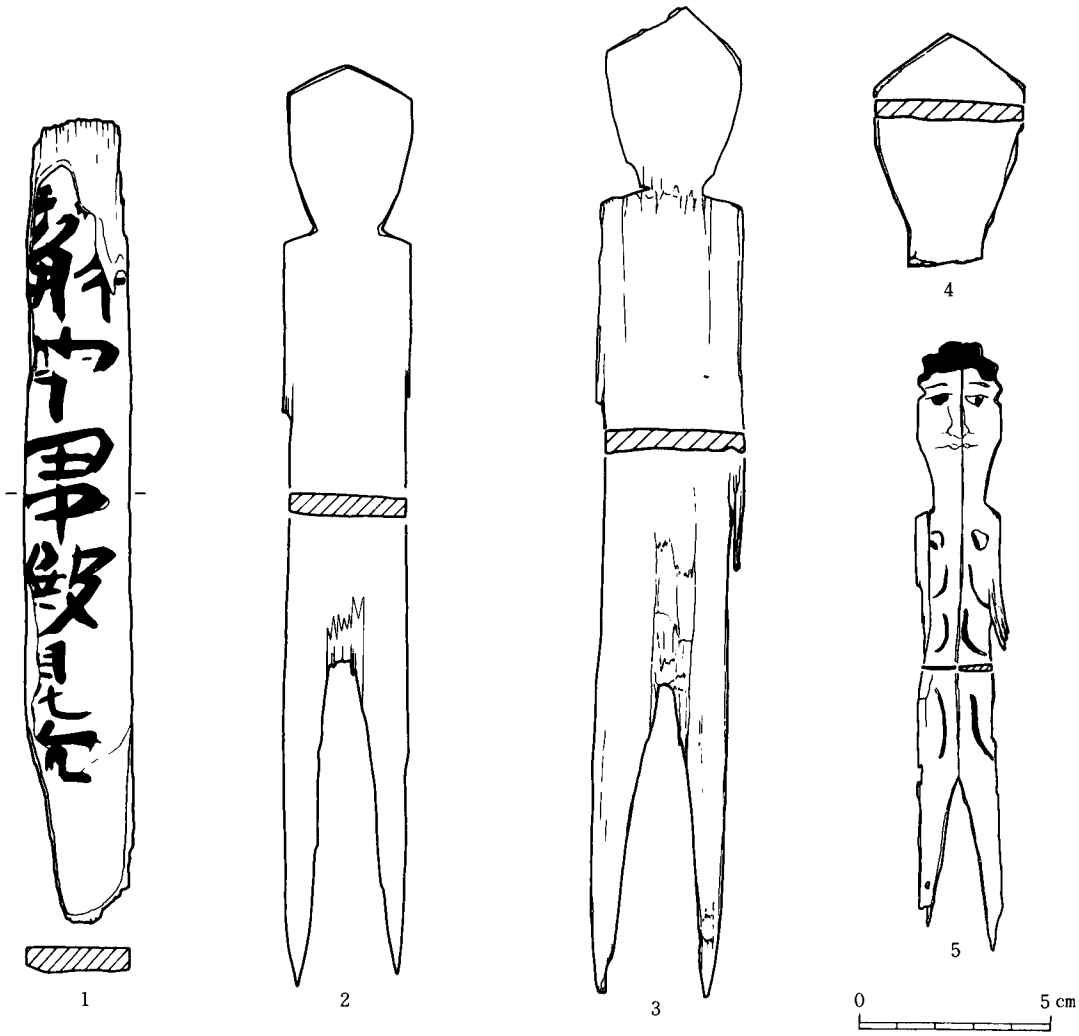
2．木製品

木簡（第45図1）

現存長21.3cm，幅2.7cm，厚さ0.7cmを測る板材である。表(墨書面)は平滑に仕上げられているのに対し，裏はやや粗雑な調整といえる。上・下端および左辺が折損し，左辺下部から下端にかけて焼痕が認められる。

釈文　　解申田中殿　□□□
〔目代ヵ〕

木簡の内容については解文と考えられる。解の上に文字があったとすれば通例から「謹」か，



第45図　第6号溝出土遺物(S＝1/2)

もしくは差出者名を冒頭に記して「某謹解……」であったろう。また，「解」の字の下は一字分を欠字にすることが多いが，本例では認められず，やや崩れた形式ではないかと思われる。「田中殿……」以下は解の内容の一部とみられる。田中殿の下の左辺に小さく書かれた字は，赤外線テレビカメラによって二字が書かれているとみられ，「目代」と読むのが適当と判断した。ただ，「代」のつくりに難点がありやや不安が残る。他の字句に比して小さく書かれていることから割注的なものであろう。下一文字については，焼けているので判読が困難である。年代については，第44図５の墨書土器が共伴しており，十世紀初頭前後が考えられる。

人形（第45図２～５）

２は，板材の側辺に切り込みを加えて，頭・胴・腕・脚部を削り出しているものである。頭は圭頭をなし，顔の側辺は不整形な六角形状にかたどられている。肩はいわゆる撫で肩である。腕は欠損しているが，胴部中央からやや上方側辺に下方から切り込まれている。服は逆Ｖ字形につくり，脚は細長い三角形を呈する。全長24.2cm，肩幅3.3cm，最大厚0.6cmを測る。３は２と類似したつくりであるが，肩が怒り肩という点で若干異なる。また，やや大形のつくりであり，腕が欠損している。全長26cm，肩幅3.7cm，最大厚0.6cmを測る。４は同タイプの頭部である。これらの人形は，顔と肩との切り込みから金子裕之氏の分類[38]するＡ類に属すると想われるが，３については肩部が水平に近い切り込みでありＢ類とみることもできる。５は，厚さ0.1～0.2cmの薄板に切り込みをいれてかたどられたもので，ほぼ完形品である。頭頂を平担にし髪形をかたどり，顔面には眉・眼・鼻・口を墨描きしている。胴部には，乳房らしきものと「八」の字状の墨描きがなされている。本来，墨書きなどによる写実的な人形はすべて男性であるが，本例は，胴部や髪形の墨描きより女性とみることもできなくはないが，断定はできない。全長15.9cmを測る。

刀子形木製品（第44図７）

刀子の模造品と想われる。背を直線的に削り，先端を削り細め切先とし，刀身と柄部とにわけている。刃部も直線的で刃をつくり出している。全長27.2cmを測る。

曲物の底板（第44図８）

長径23.3cm，短径11.5cmの楕円形を呈し，周縁をやや斜めに削り落している。曲物の底板と考えられる。

用途不明木製品（第44図９）

現存長20.8cm，幅2.2cm，厚さ1.5cmを測る。裏面は平坦で，断面形が蒲鉾形を呈する。上端は舟形状に尖らせ，その下に浅い凹帯がつくられている。表面は丁寧なつくりである。類似品が金沢市二口六丁遺跡からも出土しており，時期は古墳時代に遡るかもしれない。

３．小　結

木簡について　第６号溝出土品のなかで最も注目されるのは解文とみられる文書様木簡である。断片のため内容の詳細は知ることは不可能だが，左辺に小さく記された割註とみられる二文字が「目代」と読める可能性があることから，「田中殿」という目代に関ることを内容とするものであ

ろう。「田中殿」・「田中」という氏は，時期は下って平安時代後期になるが『平安遺文』に3例みることができる。[39] 同遺文の314号には，京で坊令を務める下級貴族がみえ，同じく1166号には地方の在地有力者が知られ，「田中」氏は中央にも地方にもいたことが判る。本例は割註があるので中央の下級貴族の可能性もあろうが，考古学的には，東南に近接する大友遺跡[40]で「田中」と読める墨書土器が出土している事実を重視する必要があり，それが人名とすれば，当地にいる官人とみなすことができよう。そのいずれかは今後の検討課題としても，国司の代官としての目代が存在したことは極めて重要であり，大きな問題を役じている。この解の受取人は，目代と対等な官人か，もしくはそれを超える身分の官人と思われる。平たく言えば，国衙の四等官クラスということになろう。いきおい，この木簡の存在によって，本遺跡をとりまく周辺地域に国衙かもしくはその関連諸施設が設けられていたことを裏付ける貴重な史料となるのである。となると，戸水C遺跡をはじめとする周辺の平安期の遺跡に注目しなければならない。

戸水C遺跡との関連　戸水C遺跡との関連を示す遺物には，先述の木簡の他に，「依」と読める墨書土器と人形や刀子形木製模造品がある。「依」は戸水C遺跡の標識的な墨書土器であり，隣接する大友遺跡[41]や南方約2kmにある藤江B遺跡[42]からも出土するものである。人形や刀子形の模造品は，『延喜式』の「神祇式」によって知ることのできる祭料と共通する模造品であり，[43] 律令的祭祀の実体を窺せる貴重な資料である。これらは，もともと自然流であった小川を利用した人為的な溝(第6号溝)に一括して役棄されたものであり，人形は，罪穢の祓い流しに用いられたとみられる。戸水C遺跡でも，井戸より11点の斎串が出土しており，「抜除(はらえ)」の儀礼が行なわれたことが判り，いわゆる律令的祭祀の内容に本遺跡との共通性が指摘できる。

さて，戸水C遺跡の性格については，報告書の刊行をもって論議されると思うが，本遺跡との関連が高いことは先述のとおりであり，若干その点について触れておきたい。戸水C遺跡には，[44] ほぼ次のような特徴を有している。

1)　大野川左岸の水運に便利な要地に立地する。
2)　7間×2間，6間×2間などの大型建物跡があり，南北に近い主軸をもって配置された一時期がある。
3)　大型建物跡の柱間は七尺ないし八尺となる広いものが多く，掘方は一辺が1mを測り，径約40cmの柱痕と長さ約70cmの礎板を有する大規模なものがある。
4)　遺跡の北は，溝と道路と推定される遺構に画されている。
5)　「依」をはじめとする墨書土器多数と硯が出土している。
6)　緑釉・灰釉などの貴重な陶器が顕著である。
7)　石帯・鏡などの有位層に関わる遺物が出土する。
8)　斎串，緑釉香炉の埋納，建物跡への銅銭埋納などの律令的祭祀の執行が窺える。

以上の諸点より，官衙跡であることは疑いないところであり，現在のところ，加賀国内にあっては最も卓越した内容を有するという点では，国家機構の関連施設である蓋然性は極めて高い。本遺跡の東に隣接する近岡ナカシマ遺跡でも，[45] 戸水C遺跡と同時期で同質とみられる7間×2間

で床面積が99㎡を測る大型建物跡が存在し，大友遺跡では，方形の掘方をなす建物跡群の広がりが確認されている。南約2㎞にある戸水B遺跡では，[46]「館」と読める墨書土器が出土しており，飛躍した見方をすれば四等官や史生の居宅が近くに存在する可能性すら秘めている。このように，周辺地区には多くの平安前期から中期にかかる掘立柱建物跡群が広範囲に散在しており，あたかも国衙に付属する曹司地区のような様相を呈している。それらの中で最も卓越する戸水C遺跡は，大野川河口に立地することを重視すれば国津と考えるのが妥当であろう。しかし，その前提には，国衙が加賀郡内に所在したことを証明する必要があり，問題はかなり大きなものとなる。そこで，もう少し広範囲に官衙跡とみられる遺跡を瞥見し，その傍証としたい。

加賀立国と官衙跡　加賀国の誕生は，弘仁14年(823)のことであり，律令国家最後の一国建置として知られている。それまでの越前国加賀郡は南半を石川郡として2郡に分割された。加賀国府については，『和名抄』に能美郡に所在したことが明記されており，現在の小松市古府町付近と推定されている。しかし，『和名抄』が書かれたのは承平年間(931～938)のことであり，加賀立国から約1世紀を経ており，その間も能美郡内に国府が所在したかは定かでない。その点に関しては，国府推定地周辺の遺跡動態が判明しないと結論づけられないが，かつての加賀郡と石川郡の境界付近にも古府町(金沢市)があることに注視したい。古府町付近は，犀川に注ぐ伏見川と十人川が合流する水運に便利なところである。同付近には，黒田遺跡の他に官衙とみられる遺構は確認されていないが，古府クルビ遺跡では屋瓦が出土しており，桜田・示野遺跡でも大型の溝が検出されているので，今後も注意を払わなければならない地域であろう。

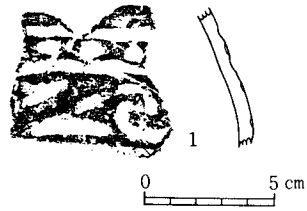
ところで，古府町の西には北塚古墳群があり有力な政治勢力の拠点をなす地域といえる。北塚古墳群は，これまで道君をはじめとする郡領層の系譜の論外におかれてきたが，最近の調査により，郡領層を生み出すだけの有力な古墳群であることが判明した。[47]近接する黒田遺跡は，北塚古墳群とは一連の系譜をもつものと解され，墨書土器多数や瓦片が出土した黒田遺跡を石川郡衙もしくは付随する寺院とする説を[48]支持したい。一方，加賀郡衙については，9間×2間で庇付の建物をはじめとして13棟の掘立柱建物群が検出された千木ヤシキダ遺跡が[49]考古学的に有力視されよう。金沢北郊のこの地域では，小坂古墳群や吉原親王塚古墳が寄集するところであり，この地域も有力な政治勢力の拠点をなしていたことは疑いなく，文献史の立場からも，森本・小坂地区に郡衙を求めようとする説がある。[50]

以上，煩雑ではあるが，金沢市域における戸水C遺跡以外の官衙跡とみられる遺跡をみると，古墳群が形成された政治的拠点にあり，考古学的には郡衙として捉え得るものであった。となれば，戸水C遺跡の卓越した遺構・遺物の内容は，国衙機構のなかに包摂された施設か国津以外に考えられないのではなかろうか。

第4節　包含層出土遺物

土器

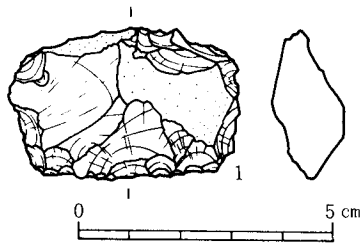
縄文土器（第46図1）　旧河道～大溝間に部分的に認められた遺物包含層（第Ⅻ層，第3章第1節参照）より単独出土。深鉢片である。器面は褐色を呈し，胎土および焼成は良好。外面は上位から沈線，列点文，沈線，三叉状入組文，沈線が施されており，内面はナデによって仕上げている。縄文時代晩期中屋式土器であろう。



第46図　包含層（第Ⅻ層）
出土土器（S＝1/3）

石器

削器（第47図1）　調査区全体に認められた遺物包含層（第Ⅳ層，第3章第1節参照）より出土している。輝石安山岩製の剝片を素材としており，刃はその長辺に対してつけられている。刃部の加工は両面から調整剝離を施しており，比較的鈍い刃となっている。完形品で長さ3.0cm，幅4.5cm，厚さ1.5cm，重さ18.6gを測る。



第47図　包含層（第Ⅳ層）
出土石器（S＝2/3）

註

第1節2　土製品

（1）　湯尻修平　『鹿島町徳前C遺跡調査報告（1）』　石川県教育委員会　1978年　金沢。
（2）　田中孝典・中島俊一・他　『鹿首モリガフチ遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター　1984年　金沢。
（3）　藤田邦雄氏の御教示による。
（4）　越坂一也氏の御教示による。
（5）　西野秀和・平田天秋・他　『七尾市奥原縄文遺跡・奥原遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター　1982年　金沢。
（6）　土肥富士夫　『国分高井山遺跡』　七尾市教育委員会　1984年　七尾。
（7）　土肥富士夫・橋本澄夫　『倉垣遺跡』　志賀町教育委員会　1985年　石川県志賀町。
（8）　宮本哲郎・他　『金沢市大友・近岡遺跡』　金沢市教育委員会　1984年　金沢。
（9）　出越茂和　『金沢市額谷ドウシンダ遺跡　金沢市無量寺B遺跡・II』　金沢市教育委員会　1984年　金沢。
（10）　宮本哲郎・山崎智男・他　『金沢市西念・南新保遺跡』　金沢市教育委員会　1983年　金沢。
（11）　楠　正勝　『金沢市新保本町東遺跡・西遺跡　金沢市近岡カンタンボ遺跡』　金沢市教育委員会　1985年　金沢。
（12）　滋井　真・高堀勝喜・他　『野々市町御経塚遺跡』　野々市町教育委員会　1983年　石川県野々市町。
（13）　北野博司・田嶋正和・他　『敷地町後方遺跡発掘調査報告』　加賀市教育委員会　1982年　加賀。
（14）　和田晴吾　「弥生・古墳時代の漁具」『考古学論考』　1982年　東京。
（15）　山本直人　「加賀における縄文時代の網漁について」『石川考古学研究会々誌』　第26号　石川考古学研究会　1983年　金沢。
（16）　渡辺　誠　「漁業の考古学」『塩業・漁業』講座・日本技術の社会史2　1985年　東京。
（17）　註（1）に同じ。
（18）　南　久和・他　『金沢市二口六丁遺跡』　金沢市教育委員会　1983年　金沢。

第1節3　木器と木製品

（19）　久々忠義　「江上A遺跡」『北陸自動車道遺跡調査報告―上市町木製品・総括編―』　上市町教育委員会

1984年　富山県上市町。
(20)　清水哲広氏の所見による。
(21)　黒崎　直　「古墳時代の農耕具（ナスビ型着柄鋤を中心として）」『研究論集　Ⅲ』　奈良国立文化財研究所　1976年　奈良。
(22)　鈴木隆夫・池田将男　「宮坂遺跡，潮城跡」『国道１号藤枝バイパス（藤枝地区）埋蔵文化財発掘調査報告書　第４冊』　静岡県教育委員会　1981年　静岡。
(23)　町田　章　「木器の製作と役割」『日本考古学を学ぶ（２）』　1979年。
(24)　工楽善通　「木製穂摘具」『弥生文化の研究』　5　道具と技術Ⅰ　雄山閣　1985年　東京。
(25)　毛利光用子・他　『恩智遺跡Ⅰ』　瓜生堂遺跡調査会　1980年　東大阪。
(26)　正林　護・他　『里田原遺跡略報Ⅱ』　長崎県教育委員会　1974年　長崎。
(27)　註（１）に同じ。
(28)　高橋忠彦　「謎の樹皮製品」『歴史読本』　11　1985年。
(29)　註（１）に同じ。
(30)　天野　武　「狩猟」『白山麓』　石川県立郷土資料館研究紀要第４号　1973年　金沢。
(31)　小林忠雄　「生活と民俗」『内灘町史』　1982年　石川県内灘町。
(32)　八賀　晋　「古代における水田開発―その土壌的環境―」『日本史研究』　96　1968年。
(33)　根本　修　「木製農耕具の意義」『考古学研究』　第22巻第４号　考古学研究会　1976年　岡山。
(34)　田代克己　「まとめ」『瓜生堂遺跡Ⅱ』　瓜生堂遺跡調査会　1973年　東大阪。
(35)　橋本澄夫・谷内尾晋司　『金沢市七ッ塚墳墓群』　石川県教育委員会　1974年　金沢。
第１節４　石器と石製品
(36)　山本直人・栃木英道・他　『金沢市北安江遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター　1985年　金沢。
(37)　山本直人　「石川県における打製石斧について」『石川考古学研究会々誌』　第28号　石川考古学研究会　1985年　金沢。
第３節
(38)　金子裕之　「古代の木製模造品」『奈良国立文化財研究所学報第38冊，研究論集Ⅵ』　1980年　奈良。
(39)　『平安遺文』№314「天文二年　七條令解」　№1166　「承暦三年，某荘立券文案」№4329「大宰少貳田中某願文」
(40)　宮本哲郎・楠　正勝　『金沢市大友・近岡遺跡』　金沢市教育委員会　1984年　金沢。
(41)　註（40）に同じ。
(42)　四柳嘉章　『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査概報　金沢市藤江Ｂ遺跡』　石川県教育委員会　1970年　金沢。
(43)　註（38）に同じ。
(44)　戸澗幹夫・他　『金沢市戸水Ｃ遺跡　金沢港泊地造成事業関係埋蔵文化財発掘調査概要報告書』（６）　石川県教育委員会　1983年　金沢。
(45)　出越茂和氏の教示による。
(46)　小嶋芳孝・垣内光次郎氏の教示による。
(47)　北塚古墳群の調査では，後世の土地利用によって墳丘が削平された小円墳多数があり，その群構成は，加賀市二子塚古墳群に類する広域首長墓を擁する古墳群の可能性が考えられた。（三浦純夫・戸澗幹夫・芝田　悟・栃木英道・垣田修児　『北塚遺跡群』　石川県立埋蔵文化財センター　1985年　金沢。）
(48)　小嶋芳孝　「金沢市末町付近の窯跡群とその性格」『石川考古学研究会々誌』　第18号　1975年　金沢。
(49)　註（45）に同じ。
(50)　浅香年木　『古代地域史の研究』　1978年　東京。

第5章　考　　察

第1節　大溝出土土器の検討

1　はじめに

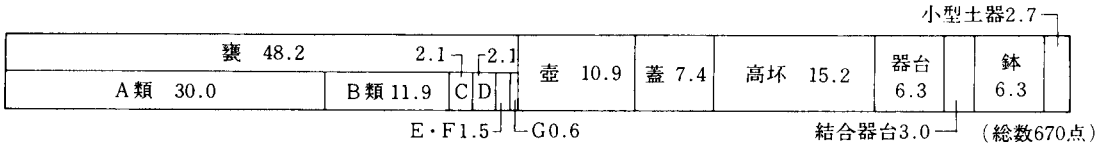
本調査の主要遺構は第3号溝，第6号溝，大溝である。ここでは本調査の総遺物量の大半を占める大溝出土土器とそれをめぐる諸問題について，若干の検討を加え結びにかえたい。大溝出土土器は，ほとんどが弥生時代終末（畿内第Ⅴ様式亜式併行）月影式土器であり，以下の検討も月影式土器を主たる対象としたい。

その月影式土器が世に知られて久しいが，最近では弥生時代後期後半（法仏期）から古墳時代前期畿内布留式土器古段階併行（古府クルビ式期・高畠式期）までを3段階6小期に編年した谷内尾編年[(1)]が発表され，その後いくつかの報告書が刊行されるなか，一方では田嶋明人氏によって漆町編年[(2)]（弥生時代後期前半以前から古墳時代後期6世紀前半までを10大別15細別に編年したもの）が発表されるなど，月影式土器をめぐる諸問題は，個々の土器の検討もさることながら，各様式・各型式に付与された概念の吟味，さらには該期にたいする歴史認識・歴史構成という観点をも射程に入れるまで問題が深化され，新たな研究段階に入ったといえる。ここではかかる問題を正面にすえることはできないが，それらをふまえて検討を進めていきたい。

2　甕形土器における類構成比について

まず，大溝出土土器の器種構成比について触れておきたい。第48図は第4章第1節に掲げた第2表を帯グラフにしたものである。甕が半数弱を占め，以下高坏，壺，器台（結合器台を含む），蓋，鉢，小型土器の順となっている。図化不能なものを含めた比率であるため，器種内の小形式構成比の算出や，報告書掲載分から器種構成比を算出せざるを得ない遺跡・遺構との単純な比較はむづかしいが，甕の類構成比から県内の地域差や時期差へのひとつのアプローチが可能視されている現在，図化不能なものを含む各遺跡・各遺構全体の器種構成比は必要と考えている。

その甕の類構成比の研究は，谷内尾晋司氏がおこなっている[(3)]。それによれば，擬凹線有段口縁系（A類），無文有段口縁系（B類），「く」の字口縁系（C類）の甕の比率が，能登地域と加賀地域では大きく異なるとされている。（法仏期ではA類が加賀では6割を越えるが，能登では2割にも満たないなど。）本大溝における甕の類構成比はA類62.2%，B類24.8%，C類4.3%，D類（B類・



第48図　近岡遺跡大溝出土土器器種構成比（%）

C類のどちらにも属さないもの，付加状口縁系など）4.3%，E類（受口状口縁系）・F類（「S」字状口縁系）3.1%，G類（山陰系）1.3%となっている。このうち，A～C類に着目すると，その構成比は第49図のような正三角形上の1点に定まることになる。（この場合，要素は三つであるから，A～C類以外の甕の検討はむづかしい。）第49図は県内及び越中の主要遺跡のA～C類の構成比の分布を調べたものである。それによれば，ほぼ時期に関係なく分布は能登と北加賀に二分され（ただし塚崎遺跡[4]は例外），さらに越中は能登にほぼ重なっている。本遺跡は第2章でも触れたように，犀川と浅野川の両河川にはさまれた沖積平野に位置し，かつその北東端にあたる大野川左岸に占地する。いいかえれば河北潟の南西縁にあたり[5]，河北潟を媒介として北加賀では能登の影響を受けやすい地域のひとつである。事実，能登に多く出土を見る本大溝甕D類に対応するものが，近隣する地域での調査の際にも出土している[6][7]。しかしながら，本大溝の甕はその87%をA・B類が占めており，第49図をみても北加賀の他の遺跡との差異はわずかなものである。このことは，後述するように本大溝の出土土器が月影I式土器を中心としていることによると考えている。

ところで，谷内尾氏は北加賀においてA～C類の構成比が時期と小地域を異にして変化するという見通しもたてている[8]。それによれば，法仏期ではA・B類が90%弱を占め，月影II式期では80%強（A類とB類の割合は遺跡単位でかなりのバラつきをみせる），月影II式期では90%近くを占める（A類とB類の割合は，月影I式期に比べB類が増加する。ただし塚崎遺跡は逆）とされている。第49図をみると，北加賀の分布はさらにいくつかのグループに細分することができるようにも思えるが，以下にあげる問題点のために，同一地域での時間的推移や小地域差といった細かい検討にまで耐えるものとはなっていない。すなわち第49図作成上の問題として，第一に各遺跡・各遺構出土土器（ここでは甕A～C類）が1型式内の時間的な幅で営まれていないこと。第二に資料が図化不能なものを含めたものか，報告書掲載分のみかで差異が生じる可能性のあること。第三にB類のなかに山陰系が，C類のなかに庄内系あるいは布留系の甕が含まれている可能性があること。第四にB・C類のなかには能登に多いタイプと加賀に多いタイプが混然となって資料化されている可能性のあること，などがあげられる。

したがって，現状では第49図作成の結果から，能登と北加賀の大まかな傾向より地域差を再確認したにすぎず，今後はより実際的な資料作成をめざしていきたい。

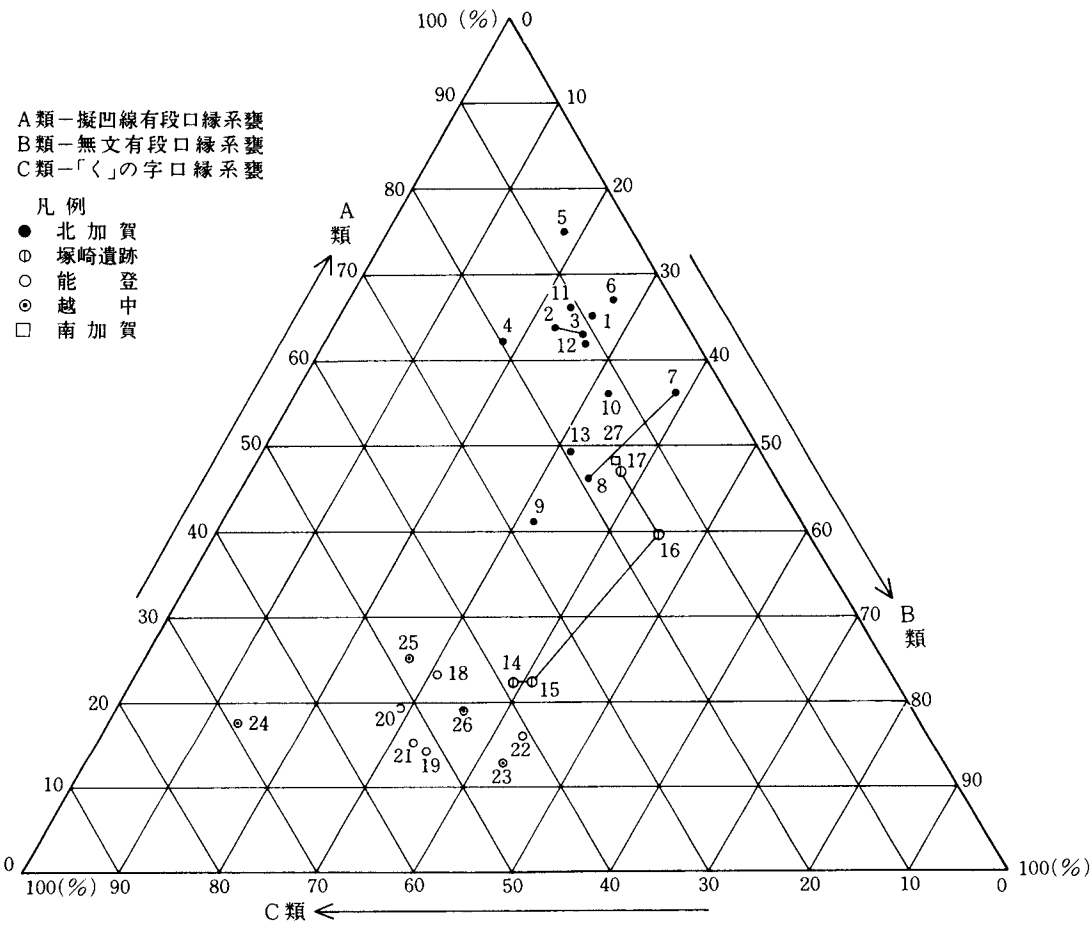
3 「月影式土器」をめぐる編年論的な問題について

ここでは，大溝出土土器の器種別の検討を進めるにあたって，必要最小限の編年論的な問題について触れておきたい。大溝出土土器は，大半が谷内尾編年でいう月影式土器の範疇で捉えられる。特に下限については，それより下るものはないと考えている。

谷内尾編年では，「「月影I式土器」は「法仏II式土器」と「月影II式土器」を結ぶ過度期的様様の強い土器群であ」り[9]，「「法仏II式土器」でみとめられた地域の枠をこえた汎北陸型ともいうべき斉一性が失われ，北陸内部の個別地域差がもっとも顕現化する段階」[10]とされ，辰口町高座遺跡東調査区出土土器[11]を標式とし，補完的に金沢市無量寺B遺跡出土土器[12]・金沢市南新保三枚田遺跡

	遺跡・遺構名	総数	備　考		遺跡・遺構名	総数	備　考
1	**近岡大溝**	309	月影	18	柳田うわの	26	法仏Ⅰ
2	法仏Ⅰ式	172	法仏Ⅰ	19	徳前C(第1様式)	50	法仏Ⅰ～Ⅱ
3	法仏Ⅱ式	239	法仏Ⅱ	20	鹿首モリガフチT18調査区	96	法仏Ⅱ
4	無量寺B(第一次)	112	法仏Ⅱ～月影	21	奥原	74	法仏Ⅱ
5	北安江C16溝	415	月影	22	国分高井山	59	法仏Ⅱ～月影Ⅱ
6	御経塚ツカダ	177	月影Ⅱ古	23	江上A(SD01・02・03)	155	法仏Ⅰ
7	近岡ナカシマ2号溝下層	1152	月影Ⅱ古	24	囲山	23	法仏Ⅰ
8	〃　上層	1213	月影Ⅱ新	25	魚躬	44	法仏Ⅱ～月影Ⅰ
9	松寺	387	月影Ⅱ新	26	串田新(1・2・4号住)	42	法仏Ⅱ～月影Ⅰ
10	下安原(第一次～第三次)	461	月影Ⅱ	27	敷地町後方	62	法仏Ⅱ
11	寺中(第一次～第二次)	64	月影Ⅱ				
12	南新保D(第一次～第二次)	687	月影Ⅱ				
13	南新保三枚田	244	月影				
14	塚崎Ⅰ式	18	法仏Ⅰ				
15	塚崎Ⅱ式古	84	法仏Ⅱ				
16	塚崎Ⅱ式新	88	月影Ⅰ				
17	塚崎Ⅲ式	200	月影Ⅱ				

1. 資料作成にあたっては、1・5～9・13を除き註(1)および註(3)文献に掲載されている数値にしたがった。
2. 5は横山貴広氏の協力を得て、7～9は出越茂和氏の御教示を得て作成した。5は図化不能なものも数えており、C類に庄内系甕が、B類に山陰系甕が含まれている。
3. 1は原則として外来系甕(E～G類)を除外したが、C類に庄内系甕および能登型とでもいうべきD類を含んでいる。6・13も同様であるが、いずれも報告書掲載分のみを対象とした。



第49図　甕形土器(A～C類)の類構成比の分布

出土土器[13]の一部をこれにあてている。これに対して，月影II式土器はA類甕の定型化・規格化された段階とされ，有透装飾器台（結合器台にあたる）や小型台付装飾壺を中心として「強固に地域色の強い土器が残存し，独自の在地的祭式土器が全盛期をむかえる」[14]一方で，「中型装飾壺・小型器台など，外来系土器祭式の影響を窺いさせる器種が出現する」[15]段階とされ，金沢市月影遺跡土壙出土一括資料[16]，金沢市下安原海岸遺跡C区上層および貝層出土資料[17]，金沢市南新保D遺跡BG－20土壙出土一括資料[18]を標式とし，塚崎編年における「塚崎III式土器」[19]をこれにあてている。

これにたいして，谷内尾編年が発表されたのち，主として北加賀において月影II式期の良好な資料が増加している。その結果，谷内尾編年でいう月影II式期とは，「強固な在地性」と「外来系土器の受容」[20]という相反する概念を，渾沌とした形で内包するいわば両面価値的な1型式としてあるのではなく，その二つの概念を各々別個にもつ新古関係のある2型式によって構成されているという可能性が高くなった。前者，すなわち強固な在地性をもち外来系土器を基本的に含まない時期のものとして野々市町御経塚ツカダ遺跡（御経塚B遺跡）出土土器[21]が，後者，すなわち小型器台，畿内系や東海系の中型装飾壺，東海系高坏，庄内系・東海系・近江系（・山陰系）甕などといった外来系土器を多量とはいえないにしても一定量受容し，かつ在地系土器がその影響を受けて変質しはじめる時期のものとして金沢市松寺遺跡出土土器[22]などが考えられる。その場合，金沢市月影遺跡土壙出土土器[23]・第6号竪穴を標式とする塚崎III式土器[24]は前者に属し，金沢市南新保D遺跡BG－20土壙[25]および同遺跡第二次調査C区P－11土壙群・P－54土壙・D区T－104溝状遺構[26]出土土器などは後者に属するといえる[27]。

月影II式土器が細分可能であることは，出越茂和氏による金沢市近岡ナカシマ遺跡2号溝上層及び下層出土土器の比較検討によっても確認されている[28]（下層出土が前者，上層出土が後者に属し，その根拠は上述したものと基本的には同様である）が，問題はその画期の大きさである。独自な祭式土器に代表される強固な在地性という点では，後に述べるが月影I式期から上述の前者への土器の変遷は一連のものであり，前者と後者の画期より小さいと考えられる。また，外来系土器の受容と在地性の変質・解体という点では，後者からその次の段階（在地性の解体はさらに進行するが，いまだ畿内布留系甕が基本的には出現しない段階）[29]への土器の変遷も同様に一連のものであり，その画期の大きさも同様である。したがって，月影I式期から布留系甕の出現直前の段階までの各段階間の画期のうち，最も大きなものは谷内尾編年でいう月影II式期のなかにおかれる可能性が高く，その前後をあわせて「月影式土器」とした場合，月影II式期設定時の矛盾（両面価値性）が，さらに拡大されることになると考えられ，検討を要する。いずれにせよ，「月影式土器」に付与された「強固な在地性」という概念と，月影遺跡土壙出土土器とは一体のものであるから，少なくとも谷内尾編年でいう「月影I式土器」と「月影II式土器」の古相は，「月影式土器」から逸脱することはないという認識にたち，以下の検討を進めていきたい。

4　各器種の検討

第4章第1節では，大溝中層・下層出土土器を8つの器種（形式）に分類したが，ここではそ

の分類にしたがって器種ごとに検討することとする。

最初に高坏形土器から触れていきたい。Ⅰ類第26図179・182～184（以下，土器番号のみとする）は，口径25～28cmと比較的大形で，高座遺跡東調査区出土高坏[30]に類似する。御経塚ツカダ遺跡[31]の同タイプのものは口径が21cm前後とやや小形であり，それらに先行する月影Ⅰ式期の所産であろう。180・181は口径21～23cmを測り，他のものに比べやや後出的な印象を受ける。Ⅱ類185の類例は少なく御経塚ツカダ遺跡80－7号住居跡出土高坏[32]があげられる程度であるが，同例は185に比べ坏底部が小さい。その差異は時期差と考えておきたい。Ⅲ類188・189は塚崎遺跡B16号土壙[33]・金沢市南新保三枚田遺跡A－5，6区沼状遺構[34]出土高坏に類品をみるが，189は脚部のつくりが重厚で前者に近い。Ⅳ類の小型高坏については宮本哲郎氏の論攷[35]がある。それによれば，186はAⅡbグループ，187はAⅠbグループに属すると考えられる。186・187の類例としては，南新保D遺跡A区大溝[36]，近岡ナカシマ遺跡2号溝下層[37]，御経塚ツカダ遺跡80－3号住居跡[38]出土高坏があげられ，その下限を月影Ⅱ式期古相（一つの型式として設定可能と思われるが，ここではこう表現しておく。以下同様。）におくことができる。上限についてははっきりしないが，186・187は下限からそれほど大きな差はないと考えている。Ⅴ類190の類例は松寺遺跡A1号溝[39]，南新保D遺跡D区T－104溝状遺構[40]，金沢市戸水C遺跡（第6次）前方後方形周溝状遺構[41]出土高坏などがあげられる。出自については特定しがたいが，外来系土器のひとつで，その上限は南新保D遺跡BG－20土壙出土土器併行の段階（月影Ⅱ式期新相に対応し，一つの型式として設定可能と思われるが，3で述べた理由によりこう表現しておく。以下同様。）である。190もその段階の所産であろう。

器台形土器はⅠ～Ⅳ類の中型器台とⅤ～Ⅶ類の小型器台に大別し得る。Ⅰ類191は南新保D遺跡A区大溝出土器台[42]，Ⅱ類192・193は高座遺跡東調査区出土器台[43]，Ⅲ類194・195は金沢市北安江遺跡C16溝上層出土器台[44]がそれぞれ類例としてあげられる。Ⅰ～Ⅳ類は，能登においては法仏Ⅰ式期併行の確認例があるが[45]，加賀では月影期に出土例が多い。しかも，こうした中型器台は外来系の器台（小型器台など）の出現とともに退化・小型化する（南新保D遺跡BG－20土壙出土例[46]など）と考えられることから，191～196も月影Ⅰ式期～月影Ⅱ式期古相（特に月影Ⅰ式期を中心とする）の所産であろう。Ⅴ～Ⅶ類198～202の小型器台は受部径（9.5～12.0cm）と器高（9.2～10.1cm）が比較的大きいものである。Ⅴ類198～200は南新保D遺跡C区P－11－2土壙[47]に，Ⅵ類201は同遺跡D区T－104溝状遺構[48]に，Ⅶ類202は金沢市古府クルビ遺跡D区下層[49]・金沢市二口六丁遺跡（第一次）小溝(1A)[50]にそれぞれ出土例をみる。このうちⅦ類202は，類例に比べ脚頂部のつくりがしっかりしており先行する要素をもつ。したがって，Ⅴ～Ⅶ類198～202は高坏Ⅴ類190と同期の所産と考えられる。

結合器台は月影式土器を代表する器種のひとつ[51]であり，該期の遺跡・遺構ではよく出土をみるが，土器全体に占める比率は1～2％と考えられる[52]。Ⅲ類208～211が通有のタイプで，その上限は月影Ⅱ式期古相，下限は退化形式が布留系甕出現期直前まで残存する[53]。208～211は下限にまで下ることはないと思われる。これにたいしてⅠ・Ⅱ類203～206は，法量・受端部のつくり，口縁部ののび，透穴の形状などがⅢ類と異なっており，御経塚ツカダ遺跡[54]（Ⅲ類のみ出土）などに

例をみず松任市竹松遺跡出土器台[55]に類似することから，Ⅲ類に先行する月影Ⅰ式期の所産と考えられる。特にⅠ類203・204は，器台と鉢(あるいは壺)が結合したものという印象を強く与える。その比べⅡ類205・206は定型化したⅢ類により近いと考えることもできよう。なお，Ⅳ類212は金沢市西念・南新保遺跡G区T－103溝状遺構出土品[56]を類例とすれば，208～211の下限でⅢ類と共伴することが考えられるが，212にいわゆる垂下帯がないことから今後の検討課題としておきたい。

鉢形土器のうちⅠ類213～219は法仏期から月影期にかけてみられるもので，213～215のタイプは時期が下るにつれて徐々に小形化し全体のバランスを失っていく。本来の形態を保持しているのは御経塚ツカダ遺跡80－3号住居跡[57]・塚崎遺跡第6号竪穴出土例[58]など，月影Ⅱ式期古相までで，それ以後は急速に退化・小型化する。(南新保D遺跡BG－20土壙出土品[59]など。) このことは中型器台の退化・小型化と無関係ではない。本例(特に214)は類例より古相を示し，むしろ塚崎遺跡第7号竪穴・第21号竪穴出土鉢[60](塚崎Ⅱ式古，法仏Ⅱ式)に近く，月影Ⅰ式期の所産であろう。217～219もタイプは若干異なるが，月影Ⅰ式期を大きく逸脱することはないと考えている。Ⅱ類221～228のうち，222は高座遺跡東調査区[61]に，225は御経塚ツカダ遺跡82－2号住居跡[62]に，228は塚崎遺跡第11号竪穴[63]にそれぞれ出土例があり，Ⅰ類同様月影Ⅰ式期(～月影Ⅱ式期古相)の所産と思われる。Ⅱ類の上限が北加賀では法仏期に遡れていないことを考えると，器台Ⅰ～Ⅳ類との関連が注目されよう。Ⅳ類232は南新保D遺跡A区大溝[64]に，Ⅴ類234は御経塚ツカダ遺跡80－6号住居跡[65]にそれぞれ類品をみる。

小型土器は器形が多種多様でその変遷を系統的に把握するのは容易ではないため，器形の類似性が比較的高いⅣ類242～244を中心に若干触れることにしたい。Ⅳ類のうち243・244は赤彩品である。この種の赤彩品は北安江遺跡C16溝[66]・南新保D遺跡A区大溝[67]出土品などにみられ，土器祭式に関わるものであることは疑い得ない。これにたいして，こうした祭式土器とセットをなすものが在地系土器のなかには見い出しがたいことから，Ⅰ～Ⅲ類は別としてもⅣ類242～244・Ⅴ類246といったタイプの小型土器は，外来系祭式土器(小型器台など)の流入と在地系祭式土器(結合器台・中型器台・在地系鉢など。壺については後述する。)の変質の段階に出現する(少なくとも急増する)のではないかという予測的見解をもっており，今後の検討課題としている。

蓋形土器のうち，Ⅵ類177は体部に二孔一対の孔をもつもので，南新保D遺跡D区T－103溝状遺構[68]・南新保三枚田遺跡1号溝[69]等出土の無頸丸底壺(口縁部に対応する孔をもつ)などとセットをなすと考えられる。塚崎遺跡B16号土壙出土品[70]が類例となる。Ⅴ類175・176は鈕部に通気孔を穿つもので法仏期の類例は多い[71]。175・176がその月影期に下る例となるかどうかは今後の類例の増加を待って判断したい。

壺形土器Ⅰ類99・100は，塚崎遺跡第21号竪穴[72]，押水町上田出西山遺跡第11号土壙および包含層[73]，津幡町谷内石山遺跡第2号溝[74](以上法仏Ⅱ式期併行)，御経塚ツカダ遺跡80－7号住居跡[75]出土品に類例をみる。法仏Ⅱ式期のものが多いが，Ⅰ類自体は少なくとも月影Ⅰ式期までは残存すると考えている。Ⅱ類101・102は南新保D遺跡A区大溝[76]，南新保三枚田遺跡1号溝[77]出土土器などに類例があり，月影期を代表する形式のひとつである。Ⅲ類104～106とⅦ類124・125はともに月影期の所

産と思われるが，口縁形態が異なる。細頸のⅢ類の類例は，北安江遺跡C16溝[78]，宇ノ気町鉢伏茶臼山遺跡（第4号住居跡他）[79]出土品などがあげられる。後者の例（法仏Ⅱ式期～月影Ⅰ式期併行）から，104～106も月影Ⅰ式期の所産と考えておきたい。有段広口のⅦ類124・125は，塚崎遺跡第6号竪穴出土土器[80]（124・125にやや後出する）に類例をみる。Ⅲ類104～106と同時期かやや後出すると考えられる。Ⅷ類128・129は月影期を代表する形式のひとつであるが，完器の出土例は意外と少ない。Ⅷ類などの在地系の壺は，外来系土器（畿内系・東海系装飾壺など）の流入とともに激減・退化すると考えられ，128・129も月影Ⅱ式期古相の所産であろう。これに対して，Ⅴ類116は近岡ナカシマ遺跡2号溝上層では壺の中核をなしている[81]。また胴部が球形（あるいはやや扁平な楕円体）の114・120～122も月影期の主体的な壺の器形とはいえず，116とともにⅧ類128・129より後出するものと思われる。130も東海系の壺の影響を窺わせるもので，同期の所産であろう。103は西念・南新保遺跡に[82]，119は北安江遺跡C16溝上層[83]にそれぞれ類例をみる。103は月影期を若干遡るのかもしれない。Ⅳ類111～113・Ⅵ類117・118は今後の類例の増加を待って検討したい。

甕E～G類90～98は，いずれも外来系土器である。E類受口状口縁系90～92は，近岡ナカシマ遺跡2号溝(90・92は下層，91は上層）[84]に出土例がある。滋賀県では90・91は湖北に，92は湖南に類例が多く，その差異は時期差ではなく地域差と考えられる[85]。F類「S」字状口縁系93・94は，松寺遺跡B2号土壙[86]，近岡ナカシマ遺跡2号溝上層[87]，北安江遺跡C16溝下層[88]，南新保D遺跡BG－20土壙[89]，金沢市古府クルビ遺跡D地区下層[90]（他のものより後出する）に類例をみる。G類山陰系95～98のうち典型的なものはⅠ類96で，Ⅰ類97・Ⅱ類98は山陰地方では類例に乏しい。E～G類90～98は概ね南新保D遺跡BG－20土壙出土土器併行の所産と考えられるが，G類については一般に北加賀においてはその初現が他の外来系土器のそれより一段階遅れる[91]とされており，95～98がその例外となるものかどうかについては，類例の増加を待って再検討の要がある。甕C類81～89のうち，Ⅲ～Ⅴ類84～89は畿内庄内式土器の影響を受けたもので，甕E～G類と同期のものであろう。肩がやや張るⅠ類81は84～89よりやや古相を示す可能性がある。Ⅱ類82・83は両者の中間的なタイプといえる。なお，甕C類・甕E～G類のうち，胎土・焼成が他と異なるものは甕CⅣ類86・甕E類92・甕GⅠ類96であり，今後そうした観点からの検討も必要と考えている。甕D類72～80は能登に多く出土をみるので，将来的には能登と加賀の対応関係等を考えるうえで貴重な形式のひとつとなろう。

在地系の甕A・B類は，形式としては布留系甕出現期直前まで残存する。その変遷は全体としては大きく明瞭なものであるが，それ自体はゆるやかな変化であって，小形式差という横の並びも考慮しなければならないため，連続する型式の各々の段階を個々の土器を通して把握するのは容易ではない。1～71は，月影Ⅰ式期～月影Ⅱ式期古相のものが多く，一部それらに先行するものと後出するものがあると考えているが，溝資料ということもあり，個々の土器に型式論的な枠をはめることの限界と弊害とを鑑み，量的に主流を占める甕A類1～51のうち，古相を示すと思われる土器の様相について，大まかな傾向性を指摘するにとどめたい。

まず，法仏期の所産と考えられるⅠ・Ⅱ類1～5を除くⅢ～Ⅹ類6～51のうち，古相を示すも

のとしてあげられる第一の特徴は，内面頸部に幅の狭い面をもつものが多く（Ⅲ類６～９，Ⅳ類11～15，Ⅴ類21・22，Ⅵ類28，Ⅶ類33～36など），同部にハケ調整痕を残すもの（量的には少ない）も肩部近く（肩上位といってもよい）にわずかに認められるものが多い（Ⅲ類８，Ⅳ類11，Ⅴ類21・22など）ことである。第二の特徴は，口縁部内面に認められる指頭圧痕の間隔が狭く，上位に押圧されるものが多い（Ⅲ類７～９，Ⅳ類11・12，Ⅸ類44・50など）ことである。これらの特徴は，高座遺跡東調査区出土土器[92]にみられるものと基本的には同じである。口縁部はやや外傾・外反する程度のものが多いが，端部の形態は反転するもの（Ⅲ類９など），押圧によってのばすもの（Ⅳ類12など），はねあげ状を呈するもの（Ⅴ類21など）など個体差があるほか，口縁部自体が内傾するもの（Ⅸ類44）もある。また，口縁内面に指頭圧痕が認められないものも少なくなく，なかでも内面は「く」の字状を呈するⅦ類33～36は重厚なつくりをしており，Ⅸ類43は外面肩部に波状文を施す[93]などの特徴をもつ。このほか，口縁外面上位の擬凹線をヨコナデによって消しているもの（Ⅲ類９，Ⅸ類46など）がある。これらの特徴のすべてがそのまま月影Ⅰ式期の様相であるとは考えてはいないが，その点も含めて今後さらに検討していきたい。

ところで，甕Ａ～Ｇ類のうち，甕Ｅ～Ｇ類と甕Ｃ類の大部分は月影Ⅱ式期古相より新しい時期のものと考えられることから，本大溝の月影Ⅰ式期～月影Ⅱ式期古相の甕は，Ａ・Ｂ類の大部分とＣ・Ｄ類の一部で占められるといえる。しかも，Ｃ・Ｄ類は全体でも8.6％にすぎないことを考えあわせると，それはほとんどがＡ・Ｂ類（在地系）で占められるといってもよく，本大溝出土甕の類構成比の特徴のひとつである。

5　おわりに

以上，大溝出土土器について若干の検討を試みてきたが，当初考えていたいくつかの重要な問題は，筆者の力量不足のためにほとんど触れることができなかった。もとより本文および本報告書は，埋文センターの職員はもちろんのこと，社団法人 石川県埋蔵文化財整理協会の職員の方方，昨年から続いている弥生時代～古墳時代を対象とした研究会の参加者，とりわけその中心的なメンバーである宮本哲郎，谷内尾晋司，出越茂和，楠　正勝，増山　仁，吉田　淳の諸氏からいただいた種々の有益な御教示に負うところが大きく，記して深謝の意を表したい。また，それらの御教示を十分に生かすことができなかったことについては深く反省している。いずれにせよ，今後に残された課題は多く，諸先学の御批判・御叱正をいただければ幸いである。

註

（１）　谷内尾晋司「北加賀における古墳出現期の土器について」『北陸の考古学』（『石川考古学研究会々誌』第26号）石川考古学研究会　1983年　金沢。

（２）　田嶋明人「漆町遺跡にみる古墳時代土器の変遷」石川考古学研究会研究発表会資料　1985年　金沢。

（３）　谷内尾晋司「鹿首モリガフチ遺跡出土土器の様相と占める位置（Ｔ18調査区出土土器を中心に）』『鹿首モリガフチ遺跡　能登海浜道関係埋蔵文化財調査報告書』Ⅱ　石川県立埋蔵文化財センター　1984年　金沢。

（4）　吉岡康暢・小嶋芳孝・他　『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』 II　石川県教育委員会　1976年　金沢。

（5）　河北潟の潟汀線の復元は，弥生時代～古墳時代を対象としたものではないが，最近では平口哲夫氏が下記の文献で扱っている。

平口哲夫　「北陸における縄文時代の動物遺体出土遺跡と水域環境――上山田貝塚の立地分析を中心に――」『石川考古学研究会々誌』 第28号　石川考古学研究会　1985年　金沢。

（6）　宮本哲郎　「金沢市近岡遺跡発掘調査報告」『金沢市大友・近岡遺跡』 金沢市教育委員会　1984年　金沢。

（7）　楠　正勝　「金沢市近岡カンタンボ遺跡調査報告」『金沢市新保本町東遺跡・西遺跡　金沢市近岡カンタンボ遺跡』 金沢市・金沢市教育委員会　1985年　金沢。

（8）～（10）　註（1）に同じ。

（11）　中島俊一　『辰口町・高座遺跡発掘調査報告』 石川県教育委員会　1978年　金沢。

（12）　宮本哲郎・他　『金沢市無量寺B遺跡』 金沢市教育委員会　1982年　金沢。

（13）　楠　正勝・宮本哲郎　『金沢市南新保三枚田遺跡』 金沢市教育委員会　1984年　金沢。

（14）・（15）　註（1）に同じ。

（16）　浜岡賢太郎・吉岡康暢　「加賀・能登の古式土師器」『古代学研究』 第32号　古代学研究会　1962年　堺。

（17）　橋本澄夫・荒木繁行　「金沢市下安原海岸遺跡の第I次調査」『石川考古学研究会々誌』 第18号　石川考古学研究会　1975年　金沢。

（18）　橋本澄夫・四柳嘉章・平田天秋・他　『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』 III　石川県教育委員会　1976年　金沢。

（19）　註（4）に同じ。

（20）　この場合の外来系土器とは，他地域からの搬入土器のみをいうのではなく，他地域の土器の影響を受けそれを模して在地で製作したものも含む。

（21）　吉田　淳　『御経塚ツカダ遺跡（御経塚B遺跡）発掘調査報告書』 I　石川県野々市町教育委員会　1984年　石川県野々市町。

（22）　出越茂和・他　『金沢市松寺遺跡』 金沢市・金沢市教育委員会　1985年　金沢。

（23）　註（16）に同じ。

（24）　註（4）に同じ。

（25）　註（18）に同じ。

（26）　宮本哲郎・栃木英道・他　『金沢市南新保D遺跡』 金沢市教育委員会　1981年　金沢。

（27）　谷内尾晋司氏は，月影II式期における外来系土器の流入（受容）の問題を，下記の論攷で扱っている。

谷内尾晋司　「北加賀出土の布留系土器について――北安江遺跡出土の布留系甕の分析から――」『金沢市北安江遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター　1985年　金沢。

それによれば，「この期で廃絶する遺跡は……外来系土器をほとんど含まないことが多く，この期に開始される遺跡ときわだった傾向性の違いを示す」としたうえで，「それが時期差に基因するものか，遺跡の性格に基因するものか，今後の検討課題」としている。

各遺跡の存続期間は，遺跡全体を調査した場合を除き明確にはしがたく，またこの期で廃絶するとされている金沢市西念・南新保遺跡（註(56)　文献）は外来系土器を含んでおり（G区方形周溝墓など），この期に開始されるとされている御経塚ツカダ遺跡（註(21)　文献）は外来系土器を含まないなどの問題がある。現状ではその差異は時期差と考えざるを得ないが，本文でも触れているように問題はその間の画期の大きさであろう。

（28）　出越茂和氏の御教示による。その点については同氏が註(22)文献で触れており，また今年度報告書が刊行される。

(29)　北加賀においては，布留系甕とA類甕を主体とする在地系甕のこれまでの共伴例は，ほとんどが溝・沼状遺構出土であり，土坑(壙)・住居跡等出土で確実な例はない。これにたいして布留系甕が確実に一定量出現する最古の段階（金沢市押野西遺跡L－4土坑，金沢市畝田・寺中遺跡1号方形周溝墓など）では，在地系甕は基本的には消失している（少なくとも，在地系甕が残存することがその段階の主たる要素ではない）と考えられる。したがって，古府クルビ式といわれるもののなかから，南新保D遺跡BG－20土壙出土土器併行の段階に後続するものとして，布留系甕を基本的には含まない一群が型式として捉えられる可能性が大きいと考えている。その段階とは田嶋明人氏の漆町編年（註(2)文献）では6段階，谷内尾編年（註(1)・(27)文献）では古府クルビ式期古相のことである。

a　南　勉「金沢市押野西遺跡第II次発掘調査のL－4土坑の概要」『金沢市二口町遺跡』　金沢市教育委員会　1983年　金沢。

b　南　久和・楠　正勝・他『金沢市畝田・寺中遺跡』　金沢市教育委員会　1984年　金沢。

(30)　註（11）に同じ。

(31)・(32)　註（21）に同じ。

(33)　註（4）に同じ。

(34)　註（13）に同じ。

(35)　宮本哲郎「小型高坏の一考察――北加賀における小型高坏形土器の出現と変移についての基礎的考察――」『石川考古学研究会々誌』　第28号　石川考古学研究会　1985年　金沢。

(36)　註（26）に同じ。

(37)　註（35）文献および出越茂和氏の御教示による。今年度報告書刊行の予定。

(38)　註（21）に同じ。

(39)　註（22）に同じ。

(40)　註（26）に同じ。

(41)　戸澗幹夫・栃木英道・他『金沢市戸水C遺跡　金沢港泊地造成事業関係埋蔵文化財発掘調査概要報告書』(6)　石川県教育委員会　1983年　金沢。

(42)　註（26）に同じ。

(43)　註（11）に同じ。

(44)　谷内尾晋司・垣内光次郎・山本直人・栃木英道・他『金沢市北安江遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター　1985年　金沢。

(45)　谷内尾晋司「柳田うわの遺跡」『羽咋市史　原始古代編』　羽咋市　1973年　羽咋。
柳田うわの式期（法仏I式期併行）の溝状遺構Aより出土している。

(46)　註（18）に同じ。

(47)・(48)　註（26）に同じ。

(49)　註（18）に同じ。

(50)　南　久和・森川洋子・栃木英道・他『金沢市二口六丁遺跡』　金沢市教育委員会　1983年　金沢。

(51)　栃木英道「器台形土器の形態の変遷について」『北陸の考古学』(『石川考古学研究会々誌』　第26号)　石川考古学研究会　1983年　金沢。

(52)　栃木英道・宮本哲郎「装飾性を帯びた器台形土器（いわゆる装飾器台）について」『金沢市南新保D遺跡』　金沢市・金沢市教育委員会　1981年　金沢。

(53)　註（2）に同じ。

(54)　註（21）に同じ。

(55)　四柳嘉章「竹松遺跡出土の土器」『土師式土器集成』　本編I　東京堂出版　1971年　東京。

(56)　宮本哲郎・楠　正勝・栃木英道・他『金沢市西念・南新保遺跡』　金沢市教育委員会　1983年　金沢。

(57)・(62)・(65)　註（21）に同じ。

(58)・(60)・(63)・(70)・(72)　註（4）に同じ。
(59)　註（18）に同じ。
(61)　註（11）に同じ。
(64)・(67)・(68)　註（26）に同じ。
(66)　註（44）に同じ。
(69)　註（13）に同じ。
(71)　註（56）に同じ。
(73)　三浦純夫『上田出西山遺跡』押水町教育委員会　1980年　石川県押水町。
(74)　西野秀和・他『津幡町谷内石山遺跡』津幡町教育委員会　1980年　石川県津幡町。
(75)　註（21）に同じ。
(76)　註（26）に同じ。
(77)　註（13）に同じ。
(78)　註（44）に同じ。
(79)　米沢義光氏の御教示による。
(80)　註（4）に同じ。
(81)　出越茂和氏の御教示による。今年度報告書刊行。
(82)　楠　正勝氏の御教示による。
(83)　註（44）に同じ。
(84)　註（81）に同じ。
(85)　用田政晴「近江における弥生時代後期後葉の土器群――その再検討――」『県営かんがい排水事業関連遺跡発掘調査報告書　II－3――長浜市大辰已遺跡――』滋賀県教育委員会・財団法人 滋賀県文化財保護協会　1985年　大津。

90～92は用田氏に実物をみていただいている。同氏の編年（上記文献）では，「庄内式」に併行する土器群のうち，古相の一群に対応するものとの御教示を得ている。

なお，甕E～G類と甕C類の大部分（III～V類84～89など）は，本文でも触れているようにほぼ同時期（南新保D遺跡BG－20土壙出土土器併行）の所産と考えており，それに後続する時期も庄内式併行と考えられる（註(29)参照）ことから，上記の一群は少なくとも庄内式古相併行にまで遡るものと思われ，その点で用田氏の御教示はたいへん参考になった。

(86)　註（22）に同じ。
(87)　註（81）に同じ。
(88)　註（44）に同じ。
(89)・(90)　註（18）に同じ。
(91)　田嶋明人「加賀地域にみるいわゆる「山陰系土器」について」『第18回埋蔵文化財研究会　弥生時代後期から古墳時代初頭のいわゆる山陰系土器について　発表記録』第18回埋蔵文化財研究会事務局　1986年　松江。
(92)　註（11）に同じ。
(93)　金沢市無量寺B遺跡（第一次）に出土例がある。（註(12) 文献参照。）

大溝出土土器観察表

図番号 層位	器種	法量(cm)	胎土／焼成	色調外内	備考
12－1 下層	甕AⅠ	口径 18.5	やや良／良	暗褐色	擬凹線4（以下条数のみ）外煤・内炭化物付着
2 下層	〃	〃 20.0	並／やや良	淡褐色	7、外面煤着
3 下層	〃	〃 16.1	並／並	暗褐色	3、外面煤付着
4 下層	甕AⅡ	〃 17.0	良／良	淡褐色	7～8、外面煤付着
5 下層	〃	〃 15.1	〃	橙褐色～暗茶褐色	5、外面煤付着
6 下層	甕AⅢ	〃 19.8	並／並	淡褐色	7、内外面摩耗
7 下層	〃	〃 18.4	〃	橙褐色	9、外面煤付着
8 下層	〃	〃 18.4	やや良／良	淡黄褐色	8、外面煤付着
9 下層	〃	〃 18.8	〃	橙褐色	8～9、外面煤付着
10 下層	〃	〃 17.6	並／良	淡黄褐色	9、外面煤付着
11 下層	甕AⅣ	〃 16.8	やや良／良	茶褐色	6、外面煤付着
12 下層	〃	〃 17.8	〃	淡褐色	8、外面煤付着
13 下層	〃	〃 20.3	やや良／並	〃	7、内外面摩耗
14 中層	〃	〃 19.0	良／良	橙褐色	6、外面煤付着
15 中層	〃	〃 19.8	並／良	茶褐色	8、外面煤付着
13－16 下層	〃	〃 17.6	良／良	淡黄褐色	9、
17 中層	〃	〃 18.2	〃	淡茶褐色	8、外面煤付着
18 中層	〃	〃 17.4	並／良	茶褐色～暗茶褐色	〃
19 中層	〃	〃 19.4	並／並	淡茶褐色	9、外面煤付着
20 中層	〃	〃 20.8	〃	〃	7、外面煤付着
21 下層	甕AⅤ	〃 22.6	並／良	淡褐色	8、外面煤付着
22 中層	〃	〃 22.0	やや良／良	淡茶褐色	10、外面煤付着
23 中層	甕AⅥ	〃 18.0	並／並	淡褐色	8、内外面摩耗
24 下層	〃	〃 17.7	〃	暗茶褐色	7、外面煤付着
25 下層	〃	〃 20.2	並／やや不良	茶褐色	〃
26 中層	〃	〃 19.3	並／並	暗茶褐色	〃
27 中層	〃	〃 17.0	〃	淡褐色～暗褐色	9、外面煤付面
28 中層	〃	〃 17.6	〃	淡黄褐色	7、外面煤付着
13－29 中層	甕AⅥ	口径 19.8	やや良／良	淡茶褐色	7、外面煤付着
14－30 下層	〃	〃 17.4	並／並	褐色	9、外面煤付着
31 中層	〃	〃 15.8	並／良	淡褐色～褐色	7、外面煤付着
32 下層	甕AⅦ	〃 14.8	並／並	淡橙褐色	4、外面煤付着
33 下層	〃	〃 19.0	〃	淡褐色	4、外面煤付着
34 下層	〃	〃 19.2	並／やや良好	〃	8、外面煤付着
35 下層	〃	〃 21.6	並／並	〃	8、外面煤付着
36 中層	〃	〃 21.6	〃	暗茶褐色	7、外面煤付着
37 下層	甕AⅧ	〃 18.8	並／良	茶褐色～褐色	〃
38 下層	〃	〃 19.9	〃	橙褐色	8、外面煤付着
39 中層	〃	〃 19.6	並／やや良好	〃	7、内外面摩耗
40 下層	〃	〃 18.8	並／並	茶褐色	7、外面煤付着
41 中層	〃	〃 17.0	〃	暗茶褐色	7、外煤、内炭化物付着
42 中層	〃	〃 15.4	〃	茶褐色～暗茶褐色	7、外面煤付着
15－43 中・下	甕AⅨ	〃 22.6	〃	淡橙褐色	7、
44 下層	〃	〃 20.6	良／良	淡茶褐～暗茶褐色	7、外面煤付着
45 下層	甕AⅤ	〃 33.6	〃	淡褐色	8、外面煤付着
46 下層	甕AⅨ	〃 27.8	並／並	〃	7、
47 下層	〃	〃 24.2	〃	〃	10、内外面摩耗
48 下層	甕AⅩ	〃 12.0	〃	〃	5、外面煤付着
49 中層	〃	〃 13.8	並／良	黄褐色	7、外面煤付着
16－50 中層	甕AⅨ	〃 26.4	並／並	淡橙褐～淡茶褐色	7、
51 中・下	〃	〃 30.6 底径 5.6 器高 45.0	良／良	黄褐色～暗褐色	10、外面煤付着
17－52 下層	甕BⅠ	口径 14.4	やや不良／良	黄褐色	内外面ヨコナデ
53 下層	〃	〃 13.4	〃	〃	外面・口縁内面ヨコナデ、外面煤付着
54 中層	〃	〃 15.0	良／良	茶褐色	口縁・外頸ヨコナデ、外面煤付着
55 下層	〃	〃 15.5	並／良	淡褐色	口縁・頸ヨコナデ、外煤付
56 下層	〃	〃 15.9	〃	〃	口・頸ヨコナデ、外煤付着

図番号 層位	器種	法量(cm)	胎土／焼成	色調外内	備考
17－57 中層	甕BⅠ	口径 18.5	並／良	淡褐色	口・頸ヨコナデ、外煤付着
58 中層	〃	〃 19.5	良／良	〃	〃
59 下層	〃	〃 24.6	〃	〃	〃
60 下層	甕BⅡ	〃 21.9	〃	〃	口・頸ヨコナデ、胴内削り
61 中層	甕BⅢ	〃 19.0	やや不良／並	橙褐色	内外面摩耗、外面煤付着
62 下層	〃	〃 15.6	並／並	黄橙褐色	口縁ヨコナデ、胴外面摩耗
63 下層	甕BⅥ	〃 13.8	並／良	淡褐色	口縁ヨコナデ、外面煤付着
64 下層	〃	〃 16.4	良／良	〃	〃
18－65 下層	〃	〃 13.9	〃	淡黄褐色	〃
66 下層	甕BⅤ	〃 12.8	〃	淡褐色	口縁ヨコナデ、外煤・内炭化物付着
67 下層	〃	〃 17.2	やや不良／良	黄褐色	内外面摩耗
68 下層	〃	〃 15.1	やや良／並	淡黄橙色	外・内口縁ヨコナデ
69 下層	〃	〃 19.9	不良／不良	〃	口縁ヨコナデ、胴外面摩耗
70 中・下	甕B	〃 19.6 (推定)	良／良	淡褐色	内外面ヨコナデ外煤付着
71 中層	〃	口径 10.4 底径 1.7 器高 14.9	〃	黄褐色	口縁ヨコナデ
72 下層	甕DⅠ	口径 19.2	〃	淡黄褐色	口縁ヨコナデ、外面煤付着
73 下層	〃	〃 16.2	〃	淡褐色	〃
74 中層	〃	〃 12.0	〃	褐色	〃
75 下層	〃	〃 16.0	〃	淡褐色	〃
76 下層	〃	〃 15.0	〃	褐色～橙褐色	外・内口ナデ、外煤・内炭化物付着
77 下層	〃	〃 16.0	やや良／良	淡褐色	口縁ヨコナデ、外面煤付着
78 下層	甕DⅡ	〃 14.0	やや良／良好	〃	〃
79 下層	〃	〃 13.9	良／良	淡橙褐色	〃
80 下層	〃	〃 11.9	〃	暗褐色 褐色	頸部外面ナデ
19－81 中層	甕CⅠ	口径 13.9 底径 3.5 器高 25.3	やや良／やや良	黄褐色～暗褐色	口縁外面・胴部内面ナデ、外面煤付着
82 下層	甕CⅡ	口径 16.4	並／やや良好	暗褐色	外面煤・内面炭化物付着
83 中層	〃	口径 14.8 底径 3.0 器高 25.2	やや良好／良	淡褐色	〃
84 中層	甕CⅢ	口径 13.5 底径 1.9 器高 17.4	良／良	暗灰褐色	〃
19－85 中層	甕CⅢ	口径 18.6	良／良	淡褐色	口縁内面ナデ、外面煤付着
86 中層	甕CⅣ	〃 14.4	〃	〃	口縁ナデ、外面煤付着
87 中層	甕CⅤ	〃 17.8	〃	淡橙褐色	口縁ナデ
88 下層	〃	〃 14.6	並／良	淡褐色	〃
89 下層	〃	〃 19.6	良／良	〃	
20－90 中層	甕E	口径 15.2	良／良	淡黄褐色	内外面ナデ
91 中層	〃	〃 16.7	〃	淡茶褐色	口縁部・胴部内面ナデ、口縁外面煤付着
92 中層	〃	〃 17.2	やや良好／良	淡褐色	口縁・胴内面ナデ、外煤・内炭化物付着
93 中層	甕F	口径 11.4 脚台径 7.5 器高 19.4	やや不良／良好	淡褐色～黄褐色	口縁・脚台部(ヨコ)ナデ
94 中層	〃	口径 10.8 脚台径 7.2 器高 15.6	〃	〃	口縁・脚台部・胴部内面(ヨコ)ナデ
95 中層	甕GⅠ	口径 13.6	やや不良／良	黄橙褐色	内外面摩耗
96 中層	〃	〃 17.7	やや良好／良	淡褐色	内外面ヨコナデ、外面煤付
97 中層	〃	口径 14.4 器高 23.2	〃	〃	口縁ヨコナデ、外煤・内胴下半炭化物付着
98 中層	甕GⅡ	口径 25.2	〃	橙褐色	口縁ヨコナデ、外面煤付着
21－99 下層	壺Ⅰ	口径 17.2	良／良	黄橙褐色	外上位・内面ナデ
100 下層	〃	〃 16.4	〃	淡黄褐色	〃
101 下層	壺Ⅱ	〃 20.4	やや不良／良	灰褐色	口縁内外ナデ
102 下層	〃	〃 21.6	良／良	黄褐～褐色	口縁内外ナデ
103 中・下	壺	〃 14.6	〃	淡(茶)褐色	
104 中・下	壺Ⅲ	〃 9.0	良／やや不良	黄褐色	内面摩耗、擬凹線35
105 中・下	〃	〃 8.6	良／良	淡褐色	擬凹線22、外・内口端赤彩
106 下層	〃	〃 8.8	〃	〃	外面・内面上位赤彩
22-107 下層	壺	〃 9.8	〃	暗褐色	内摩耗、外煤付、擬凹線9
108 下層	〃	〃 11.2	〃	茶褐色	内外面摩耗
109 中層	〃	〃 9.6	〃	淡黄褐色	胴部内面摩耗、外面赤彩痕
110 下層	〃	〃 11.2	〃	黄褐色	外面頸ナデ、内面頸摩耗
111 下層	壺Ⅳ	〃 13.4	〃	黄橙色	外面・内面上位摩耗
112 下層	〃	〃 16.4	〃	淡黄褐色	外面一部ナデ、内面摩毛

図番号 層位	器種	法量(cm)	胎土／焼成	色調 外 内	備考
22-113 中層	壺 Ⅳ	口径 14.0	並／良	淡褐色	口縁ナデ
114 中・下	壺	〃 16.0	良／良	黄褐色～ 淡茶褐色	口縁端部ナデ
115 中層	壺 Ⅴ	〃 16.2	不良／ 並	淡茶褐色	外面ナデ、内面 摩耗
116 下層	〃	〃 14.2	良／良	黄橙褐色	外口縁・内頸部 ナデ
117 下層	壺 Ⅵ	〃 16.8	〃	淡茶褐色	内面口縁・胴部 ナデ
118 中層	〃	〃 12.6	やや良 ／良	橙褐色	外面摩耗、内面 口頸ナデ
23-119 下層	壺	〃 15.4	良／良	茶褐色	擬凹線22、口縁 内赤彩痕
120 中層	〃	〃 11.6	〃	淡褐色	口縁外ナデ・内 摩耗、外面下位 煤付着
121 中・下	〃	〃 10.4	やや良 ／良	黄褐色	口縁・胴内面ナ デ、外・口内面 赤彩痕
122 中層	〃	〃 10.4	良／良	灰褐色	外口頸ナデ、外 面煤付着
123 下層	壺 Ⅶ		〃	淡褐色	内外面摩耗、擬 凹線3
124 下層	〃	〃 9.9	〃	〃	外面・口縁内面 赤彩
125 下層	〃	〃 10.2	〃	〃	胴部内面下位煤 状のもの付着、 外面・口縁内面 赤彩
126 下層	壺 Ⅷ	〃 13.3	〃	淡茶褐色	外面・頸部以下 内面摩耗
127 下層	〃	〃 11.6	〃	淡褐色	外面煤付着
24-128 中・下	〃	口径 12.0 器高(推) 17.7	〃	〃	口縁内面下位ヨ コナデ、外面煤 付着
129 下層	〃	口径 11.0 底径 3.1 器高 15.1	〃	黄褐色	外面赤彩痕
130 中層	壺	底径 4.5	並／良	淡茶褐色	
131 下層	〃		良／良	淡褐色～ 黄褐色	内面ナデ、外面 上から櫛描文5 以上、山形文、 櫛描文8、山形 文、外面赤彩痕
132 中層	〃	底径 3.0	〃	淡褐色	
133 中層	〃	〃 2.5	並／並	橙褐色	外面煤付着
134 下層	甕	〃 2.0	〃	褐色	外面煤・内面炭 化物付着
135 下層	〃	〃 4.4	良／良	淡褐色	外面煤付着
136 中層	(底部)	〃 6.4	並／並	黄褐色	外ナデ、外煤・ 内炭化物付着
137 下層	〃	〃 4.8	〃	暗灰褐色	〃
138 中層	〃	〃 9.0	並／や や良好	淡褐色	外ナデ、底部内 面摩耗

図番号 層位	器種	法量(cm)	胎土／焼成	色調 外 内	備考
24-139 中層	甕	底径 2.8	並／良	淡褐色	外面煤・内面炭 化物付着
140 下層	〃	〃 2.7	〃〃	褐色	外面煤付着
141 下層	〃	〃 1.9	〃	〃	外煤・内炭化物 付着
142 下層	〃	〃 3.7	〃	淡黄褐色	
143 中層	〃	〃 3.0	並／並	褐色	
144 下層	壺	〃 3.0	良／良	茶褐色	外摩耗（ヘラ研 磨か）
145 下層	(底部)	底径 2.0 孔径 1.0	並／良	灰茶褐色	内面ナデ、底部 穿孔
146 下層	〃	底径 3.5 孔径 0.9	良／良	淡褐色	内外面ナデ、底 部穿孔
147 下層	〃	底径 3.0 孔径 1.5	〃	淡茶褐色	底部穿孔
148 中層	甕	底径 2.6	〃	淡褐～ 灰褐色	外面煤付着
25-149 下層	蓋 Ⅰ	鈕部径 3.8	並／良	黄橙褐色	体部内面はナデ
150 中層	〃	〃 4.0	やや良 ／良好	〃	鈕端部はヨコナ デ
151 中・下	〃	鈕部径 4.4 口径13.4 器高 5.2	〃	黄褐色	外面・鈕部内面 摩耗
152 下層	〃	鈕部径 4.3	〃	淡褐色	外面一部黒斑
153 中層	〃	〃 4.4	並／や や良好	〃	内外面摩耗
154 中層	〃	〃 2.8	良／良	茶褐色	鈕部外面摩耗
155 下層	〃	〃 2.4	やや良 ／良好	褐色	外面に煤状のも の付着
156 下層	〃	鈕部径 3.4 口径 9.8 器高 3.7	〃	淡褐色	鈕部・口縁端部・ 体部内面上位は ナデ
157 下層	〃	鈕部径 3.4 口径 9.2 器高 4.4	〃	赤茶褐色	鈕部内面はヘラ 研磨か
158 下層	〃	鈕部径 1.9 口径 7.6 器高 3.7	良／良	淡褐色	鈕部内面はナデ、 鈕部外面は煤付 着
159 中層	蓋 Ⅱ	鈕部径 3.8 口径17.4 器高 7.0	やや不 良／並	黄褐色 褐色	鈕部ナデ、体部 内面摩耗、内外 面煤付着
160 下層	〃	鈕部径 4.8	〃	淡黄褐色	鈕部外面に煤付 着
161 下層	〃	鈕部径 4.8 口径12.2 器高 4.8	やや不 良／良	黄褐色	鈕部はナデ、体 部内外面に煤付 着
162 下層	〃	鈕部径 4.8	〃	淡褐色	内外面摩耗
163 中層	蓋 Ⅲ	〃 3.1	良／良	黄褐色 褐灰色	鈕部内面中位摩 耗
164 下層	〃	〃 3.4	〃	淡褐色	内外面に煤状の もの付着
165 下層	〃	〃 3.0	やや良 好／良	黄褐色	内外面赤彩
166 中層	〃	〃 2.6	良／良	淡褐色	〃

図番号 層位	器種	法量(cm)	胎土／焼成	色調外内	備考
25-167 下層	蓋 Ⅲ	鈕部径 3.0	やや不良／良	淡 褐 色	体部内外面煤付着
168 下層	〃	〃 4.2	やや良／良好	〃	体部内面はナデ
169 下層	〃	〃 4.0	並／良	淡黄褐色	体部内面に煤状のもの付着
170 中層	蓋 Ⅳ	〃 4.2	やや良／良好	淡 褐 色	鈕部の一部に黒斑
171 下層	〃	〃 4.2	〃	黄橙褐色	鈕部摩耗（ナデか）
172 下層	〃	鈕部径 4.0 口 径10.4 器 高 5.0	〃	赤茶褐色	鈕部内面摩耗
173 下層	〃	鈕部径 3.2 口 径 7.9 器 高 3.9	良／良	淡 褐 色	外面・体部内面下位赤彩
174 下層	〃	鈕部径 3.4	やや良好／良	黄橙褐色	
175 中層	蓋 Ⅴ	鈕部径 3.8 孔 径 1.1	良／良	淡 褐 色	体部内外面に煤状のもの付
176 下層	〃	鈕部径 3.6 孔 径 2.1	やや良／良好	黄 褐 色	内外面摩耗
177 下層	蓋 Ⅵ	口 径 8.2 器 高 2.5 孔 径 0.3	良／良	淡 褐 色	体部に孔（二孔一対）、内外面赤彩
178 下層	蓋 Ⅶ	鈕部径 2.0 口 径 5.0 器 高 2.9	やや不良／良好	黄 褐 色	手捏ね品
26-179 中・下	高坏Ⅰ	口径 28.0	良／良	淡黄褐色 淡灰褐色	
180 中・下	〃	〃 23.0	良／やや良好	黄橙褐色	坏底部摩耗
181 下層	〃	〃 21.0	やや良好／良	淡 褐 色	内外面赤彩
182 下層	〃	〃 27.0	良／良	茶 褐 色	
183 下層	〃	〃 25.0	やや良／良好	淡 橙 色 黄 橙 色	外面摩耗（ヘラ研磨か）
184 中・下	〃	〃 25.8	良／良	褐 色	内外面に煤状のもの付着
185 下層	高坏Ⅱ		やや良／並	黄 橙 色	坏内面摩耗、坏内面黒斑
186 下層	高坏Ⅳ	口径 11.2	良／良	茶 褐 色	口縁端部内面赤彩(痕)
187 下層	〃	〃 10.4	やや良／並	淡 橙 色	坏底部～脚部外面摩耗
188 下層	高坏Ⅲ		やや良／良	淡橙褐色	内外面剝離・摩耗
189 下層	〃	脚部径16.8 孔 径 0.6	良／並	淡 橙 色	口縁部内面摩耗、脚孔4
190 下層	高坏Ⅴ	口 径19.6 脚部径16.2 器 高14.8	良／良	黄 褐 色	脚部に三孔一対の孔（孔径1.2cm）
27-191 下層	器台Ⅰ	受部径21.4	良／良	淡桃褐色	
192 下層	器台Ⅱ	〃 22.2	良／やや良好	淡橙褐色	受部内外面赤彩
193 下層	〃	〃 23.8	やや良／良好	茶 褐 色	〃
194 下層	器台Ⅲ	〃 19.2	〃	赤 褐 色	

図番号 層位	器種	法量(cm)	胎土／焼成	色調外内	備考
27-195 下層	器台Ⅲ	受部径20.4	やや良／良好	黄橙褐色	内外面摩耗（ヘラ研磨か）
196 下層	器台Ⅳ	受部径22.2 脚部径14.2 器 高14.8	良／良	茶 褐 色	受部内外面に赤彩痕あり
197 下層	器台	脚部径14.4 孔 径 0.5	やや良好／並	淡 橙 色	脚部に孔4
198 中層	器台Ⅴ	受部径 9.5 脚部径11.8 器 高 9.2	やや良好／良好	灰 褐 色	脚部に孔3（径0.8cm）
199 下層	〃	受部径10.2	〃	淡 褐 色	脚部に孔3（径0.9cm）
200 中層	〃	受部径10.1 脚部径11.9 器 高 9.6	〃	暗黄褐色	脚部に孔3（径0.9cm）
201 中層	器台Ⅵ	受部径10.5 脚部径11.9 器 高10.1 孔 径 0.9	〃	淡橙褐色	受部・脚下位外面、脚内面ナデ、脚部に孔4
202 中層	器台Ⅶ	受部径12.0 孔 径 1.2	良／良	桃 褐 色	内外面摩耗、脚部に孔3
28-203 下層	結合 器台Ⅰ	受部径23.4 (推) 孔 径 0.5	〃	灰茶褐色	体部に透穴（形状不明）、脚部に孔4、擬凹線5
204 中・下	〃	受部径22.6 脚部径16.0	〃	淡黄褐色	脚部外面赤彩(痕)
205 中・下	結合 器台Ⅱ	口 径17.4 受部径15.6	〃	淡褐色～黄褐色	口縁部・体部透穴各6組12
206 下層	〃	口径 15.6	〃	茶 褐 色	透穴3組6か
207 中層	結合 器台	受部径16.8	〃	淡灰褐色	透穴数不明、擬凹線10
208 中層	結合 器台Ⅲ	口径 17.0	やや良／良	黄橙褐色	内外面摩耗、透穴8組16
209 下層	〃	受部径14.8 孔 径 0.8	良／良	黄 褐 色	雨滴形透穴5組10、円形透穴4または6
210 中層	〃	受部径14.2	〃	淡 褐 色	透穴数不明、擬凹線7
211 下層	〃	受部径14.0 脚部径13.0 孔 径 0.9	〃	淡褐色～淡橙褐色	雨滴形透穴4組8、円形透穴3、脚部に未貫通孔4
212 中層	結合 器台Ⅳ		やや良／良	淡 褐 色	透穴11（形状不明）
29-213 下層	鉢 Ⅰ	口径 21.6	やや良／良	淡 褐 色	外面煤付着
214 下層	〃	口径 20.8 底径 1.7 器高 7.7	良／良	淡 灰 色	
215 下層	〃	口径 19.8	〃	淡 褐 色	
216 中層	〃	〃 15.9	やや不良／良	〃	内外面摩耗
217 中・下	〃	口径 16.4 底径 2.2 器高 8.6	やや良／良	〃	口縁部内面ナデ底部穿孔(径0.6cm)
218 下層	〃	口径 15.0	〃	橙 褐 色	内外面ナデ・煤付着
219 下層	〃	〃 14.6	良／良	褐 色	内外面煤状のもの付着

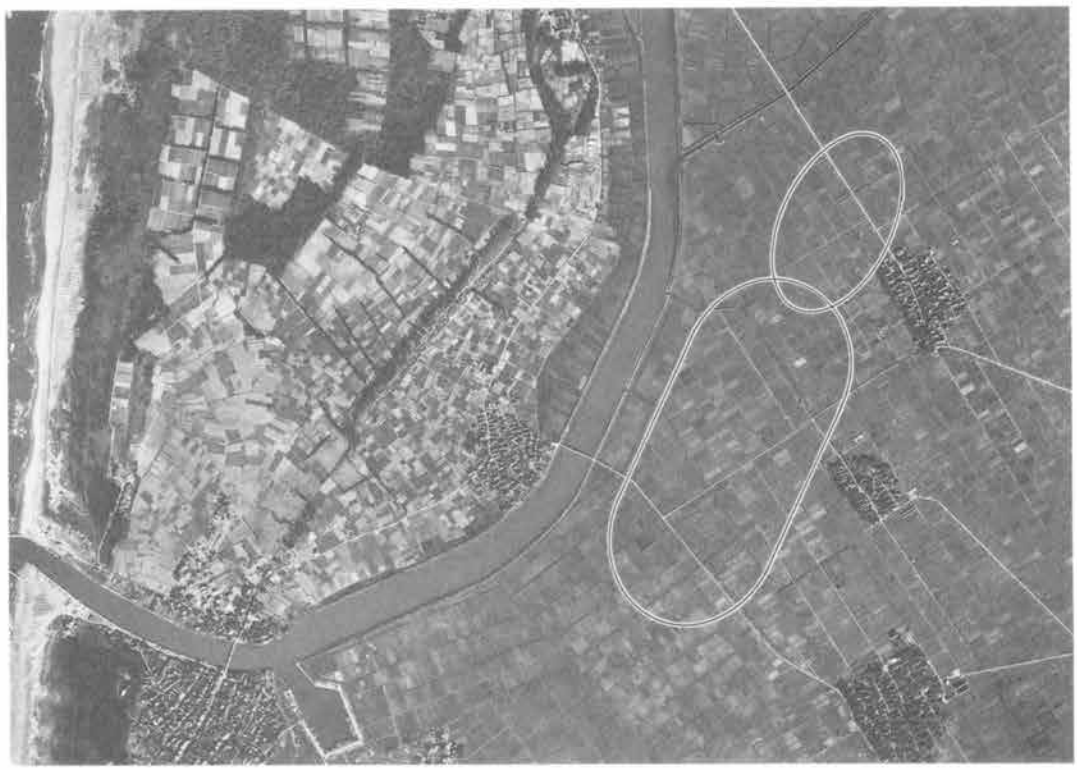
図番号 層位	器種	法量(cm)	胎土／焼成	色調 外 内	備考
29-220 中層	鉢	口径 15.0	並／良	淡黄褐色	外面摩耗・煤付着、口縁部内面ナデ
221 下層	鉢 II	〃 7.7	やや不良／良	淡褐色	外面摩耗
222 中・下	〃	口径 10.2 底径 2.8 器高 4.8	良／良	茶褐色	内外面赤彩
223 中層	〃	口径 10.7 底径 2.3 器高 4.1	〃	淡褐色	
224 中層	〃	口径 13.6	やや不良／良	〃	
225 中層	〃	口径 14.6 底径 7.2 器高 4.6	良／良	茶褐色	口縁部外面・体部内面ナデ
226 下層	〃	口径 18.4	やや良／良	淡褐色	口縁端部内外面ナデ
227 下層	〃	〃 19.6	良／良	茶褐色	
228 下層	〃	口径 17.4 底径 3.6 器高 9.0	並／良	淡褐色	外面赤彩
30-229 中・下	鉢 III	口径 18.4 底径 2.0 器高 13.3	やや不良／良	茶褐色	口縁部内面ナデ、底部穿孔(径1.0cm)
230 中・下	〃	口径 16.8	〃	淡褐色	口縁部内外面ナデ・赤彩痕
231 下層	〃	口径 15.4 底径 2.0 器高 13.6 孔径 0.8	〃	淡茶褐色	外面ハケのちナデ、口縁部内面ナデ、底部穿孔
232 中層	鉢 IV	口径 12.4 底径 3.6 器高 5.6	並／良	黄灰褐色	内外面一部黒斑
233 中層	鉢 V	口径 12.8 脚台径 7.6 器高 8.7	やや不良／良	黄褐色	内外面摩耗、外面煤付着
234 下層	〃	口径 12.2	良／良	褐色	脚内面ナデ
235 下層	小型 土器 I	口径 7.5 底径 3.2 器高 3.9	並／並	黄褐色	
236 下層	〃	口径 6.7 底径 3.7 器高 5.2	並／不良	黒灰色	内面ナデ
237 中層	小型 土器 II	口径 7.8 底径 1.6 器高 5.6	やや不良／やや良好	黄褐色	
238 下層	〃	口径 7.7 底径 3.6 器高 4.4	やや良好／良	淡褐色	
239 中層	小型 土器 III	口径 10.8 底径 2.4 器高 11.2	良／良	〃	内面下位一部に黒斑
240 中層	〃	口径 12.6 底径 3.0 器高 10.8	並／並	茶褐色	口縁部ヨコナデ、胴下半外面煤付着
241 下層	〃	口径 10.4 底径 1.4 器高 8.3	良／良	黄橙色	外面上半・内面ナデ、外面一部に黒斑

図番号 層位	器種	法量(cm)	胎土／焼成	色調 外 内	備考
30-242 中・下	小型 土器 IV	口径 9.6 底径 3.0 器高 9.3	良／良	淡褐色(内面一部橙褐色)	口縁部外面・胴部内面ナデ、器高は推定
243 中・下	〃	口径 9.6 底径 2.0 器高 9.0	〃	淡茶褐色	外面・口縁部内面赤彩、器高は推定
244 中層	〃	口径 9.2 底径 2.5 器高 8.3	〃	淡灰褐色	〃
245 中層	〃	口径 8.6	良／良	淡茶褐色	外面上半(ヨコ)ナデ
246 下層	小型 土器 V	口径 9.0 器高 7.8	〃	〃	孔一対（2、径0.5cm）
247 中層	小型 土器	底径 2.8	〃	淡褐色～淡茶褐色	
31－1 下層	深鉢		やや不良／並	褐色	外面条痕文、煤付着、内面ナデ
2 下層	〃		〃	黄褐色	外面縄文地、上位2条の沈線間に2段の列点文、下位3条の沈線、内面ナデ
3 下層			良／良	黒(褐)色	ヘラ状具による細い沈線、2箇所に透穴、内外面ヘラ研磨
4 下層	甕	口径 13.5	並／良	橙褐色～暗褐色	外面煤付着
5 下層	〃	〃 13.2	〃	黄橙色	内外面ハケのちナデ
6 下層	〃	〃 15.8	〃	暗褐色	外面煤・内面炭化物付着
7 下層	〃	〃 18.6	〃	黄褐色	〃
8 下層	〃	〃 17.2	良／良	茶褐色	内面ナデ
9 上層	〃	〃 14.8	並／良	淡褐色	擬凹線7条、外面頸～肩・内面口～頸ナデ、外面煤付着
10 上層	〃	〃 23.2	〃	黄褐色	擬凹線9条、外頸・内口～頸ナデ、外面煤付着
11 上層	〃	〃 19.6	〃	淡褐色	外面・内口縁ナデ、外面煤付着
12 上層	〃	〃 16.0	やや良／良	〃	外口～肩上位・内口～頸ナデ、外面煤付着
13 上層	高坏		良／良	淡橙褐色	坏部・脚内面上位ナデ

図　　版

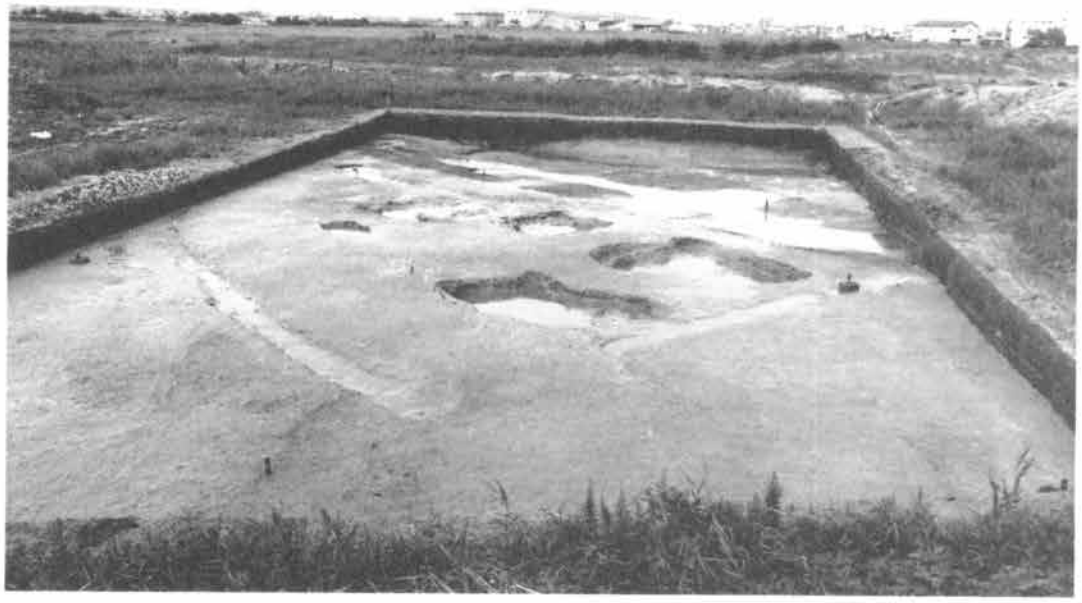
（図版中の遺物番号は本文挿図および遺物番号に一致する）

図版第１

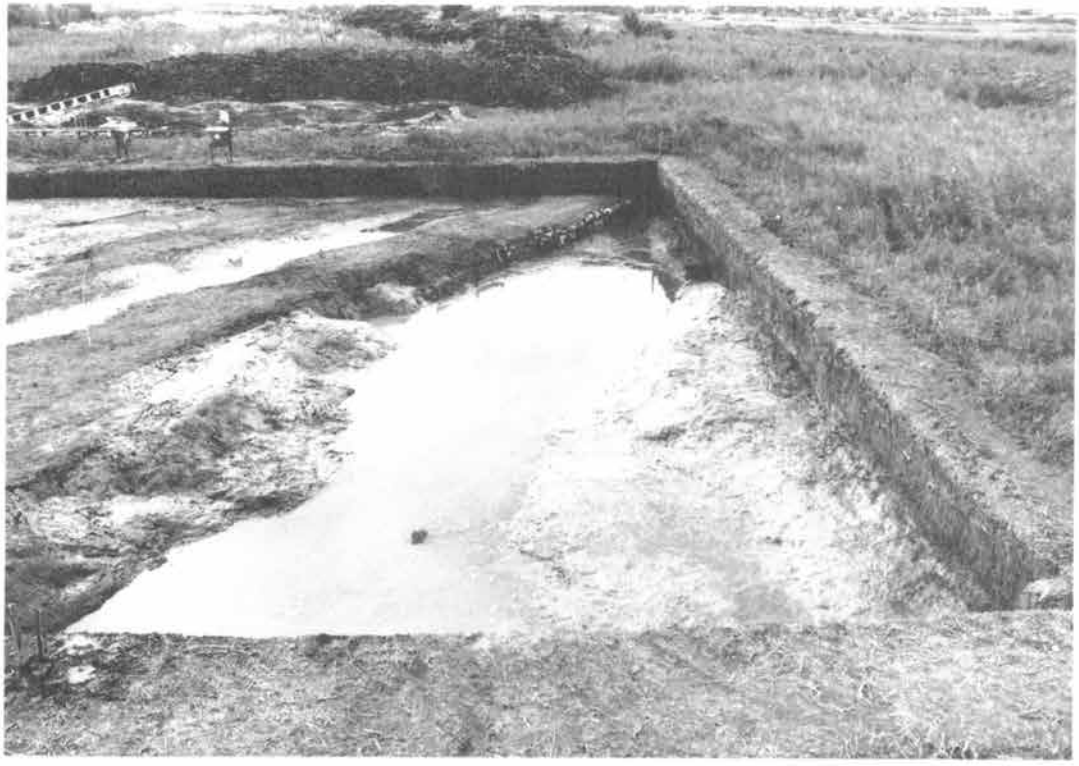


近岡遺跡(◯印上)・戸水Ｃ遺跡(同下)周辺航空写真(昭和36年撮影、セントラル航業提供)

同　　上　　(昭和57年撮影、同上)



調　査　区　全　景（南西より）



大　溝　完　掘　状　況（南東より）

図版第３

大溝土器出土状況

大溝石器出土状況

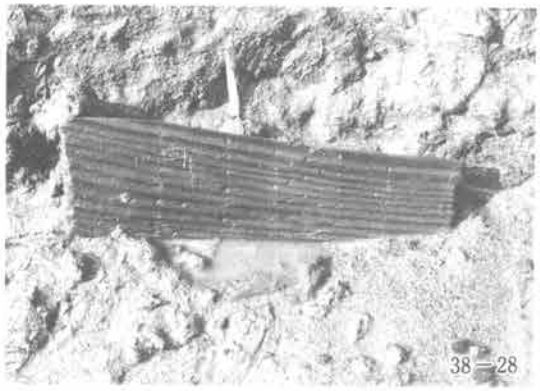
同　　上

同　　上

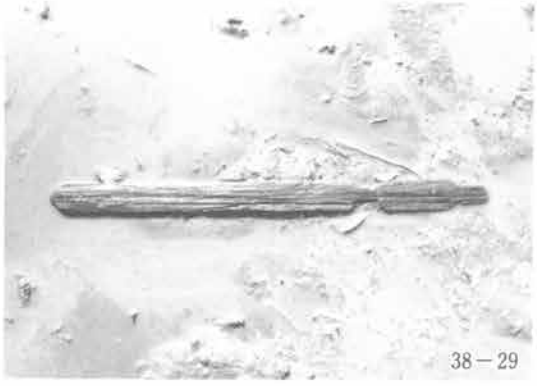
大溝木器・木製品出土状況

34－1

38－24


38－28

36－16

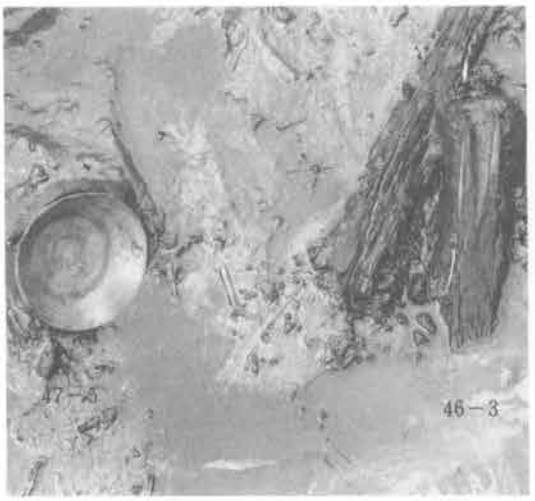

38－29

37－18

38－25

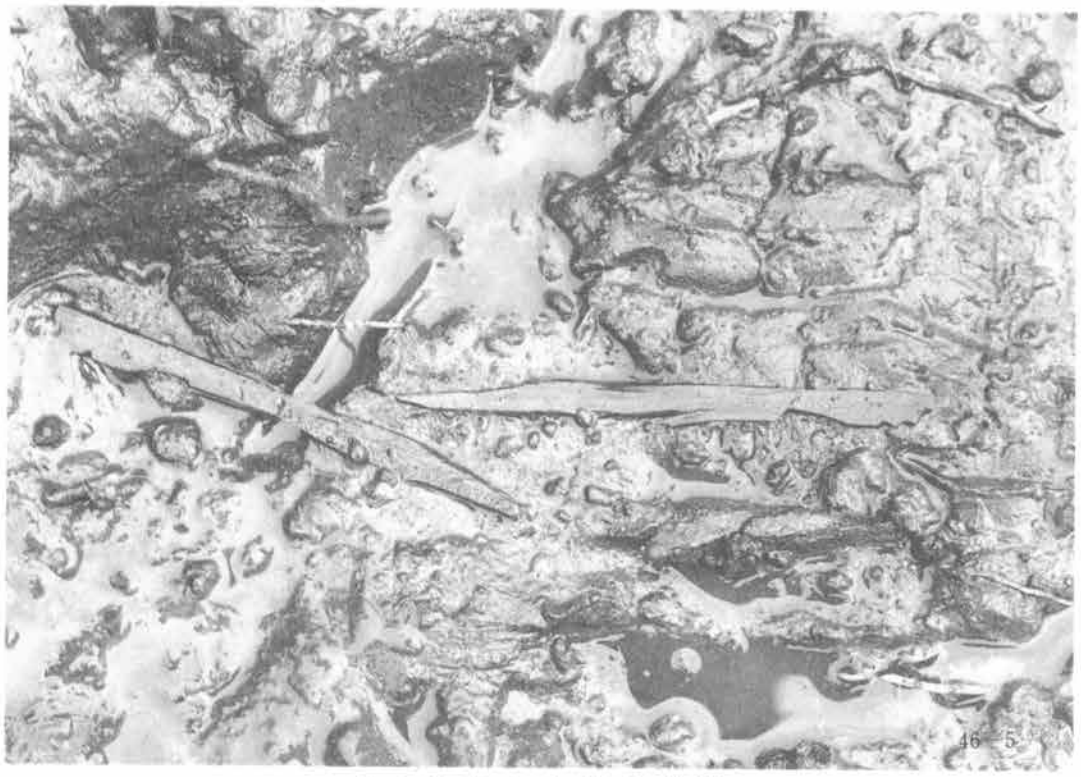
大溝木器・木製品出土状況

第6号溝墨書須恵器・人形等出土状況

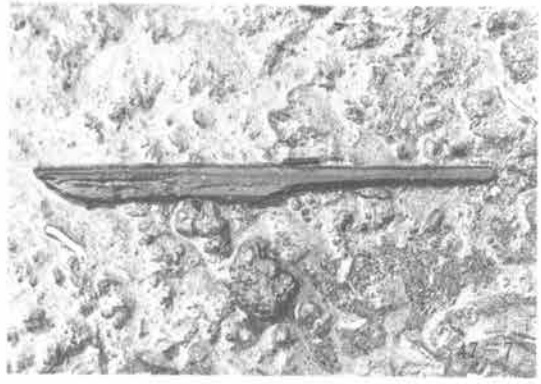


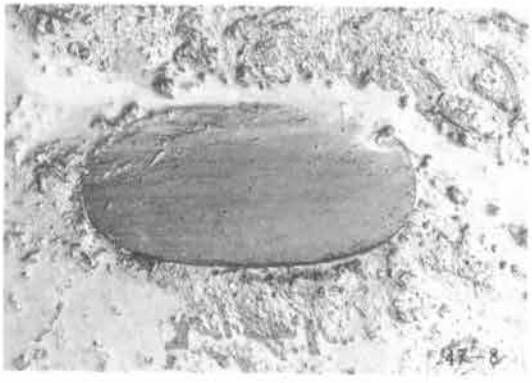
同　上　拡　大

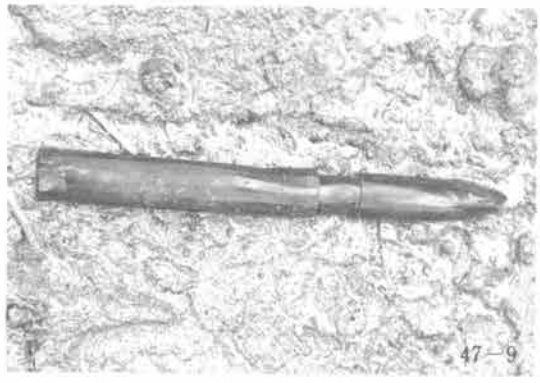
同　上　拡　大



第6号溝人形出土状況







第6号溝木器・木製品出土状況

16－51

20－93

20－94

19－81

23－124

20－97

24－128

大溝中層・下層出土土器

25－161

26－190

25－173

28－204

25－177

27－200

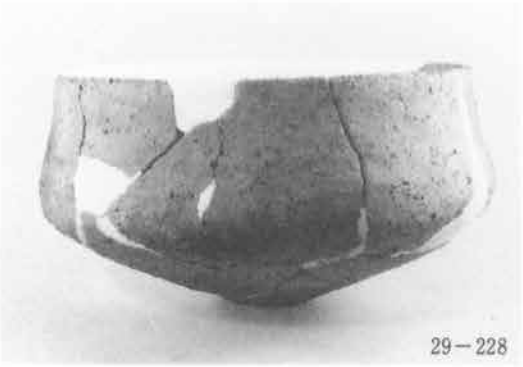
25－178

28－205

大溝中層・下層出土土器

29－214

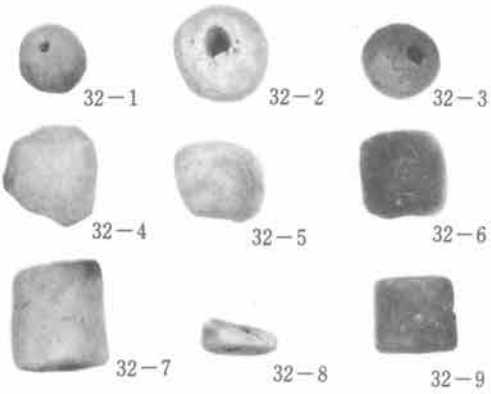
30－237


29－228

30－244

30－231

30－246



大溝中層・下層出土土器、大溝出土土製品

34－2

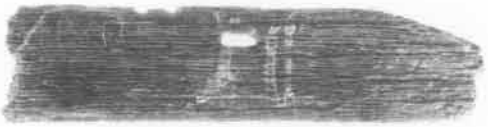
35－4

35－3

35－8

35－9

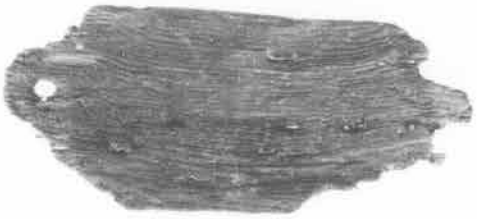
大溝出土木器・木製品



36－11

36－12

36－13



36－15

38－30

38－28

36－16

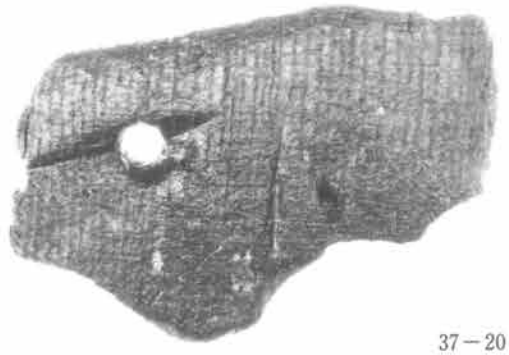
39－32

39－33

大溝出土木器・木製品

35－10

35－7



37－20

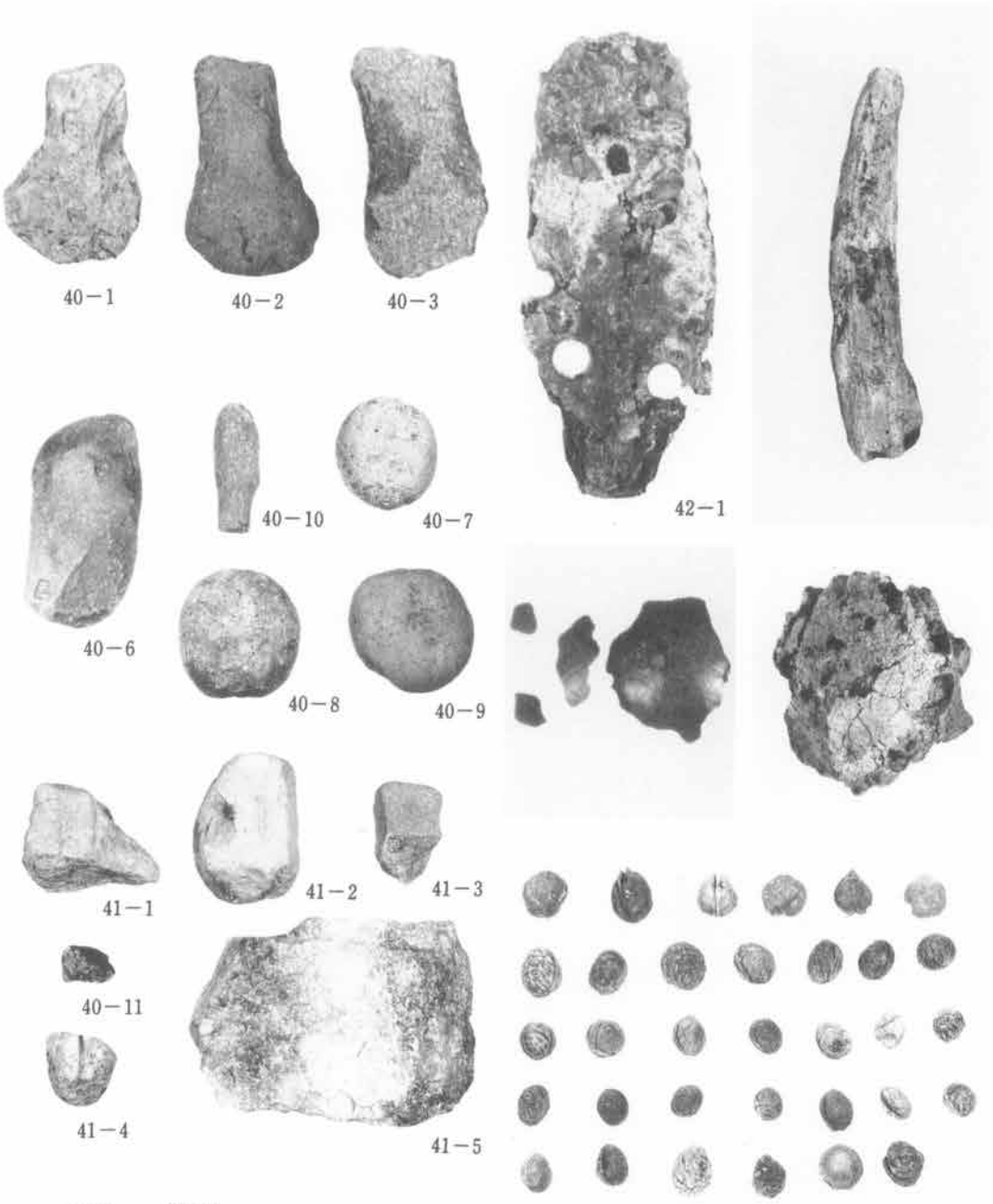
38－24

37－21

38－25

37－23

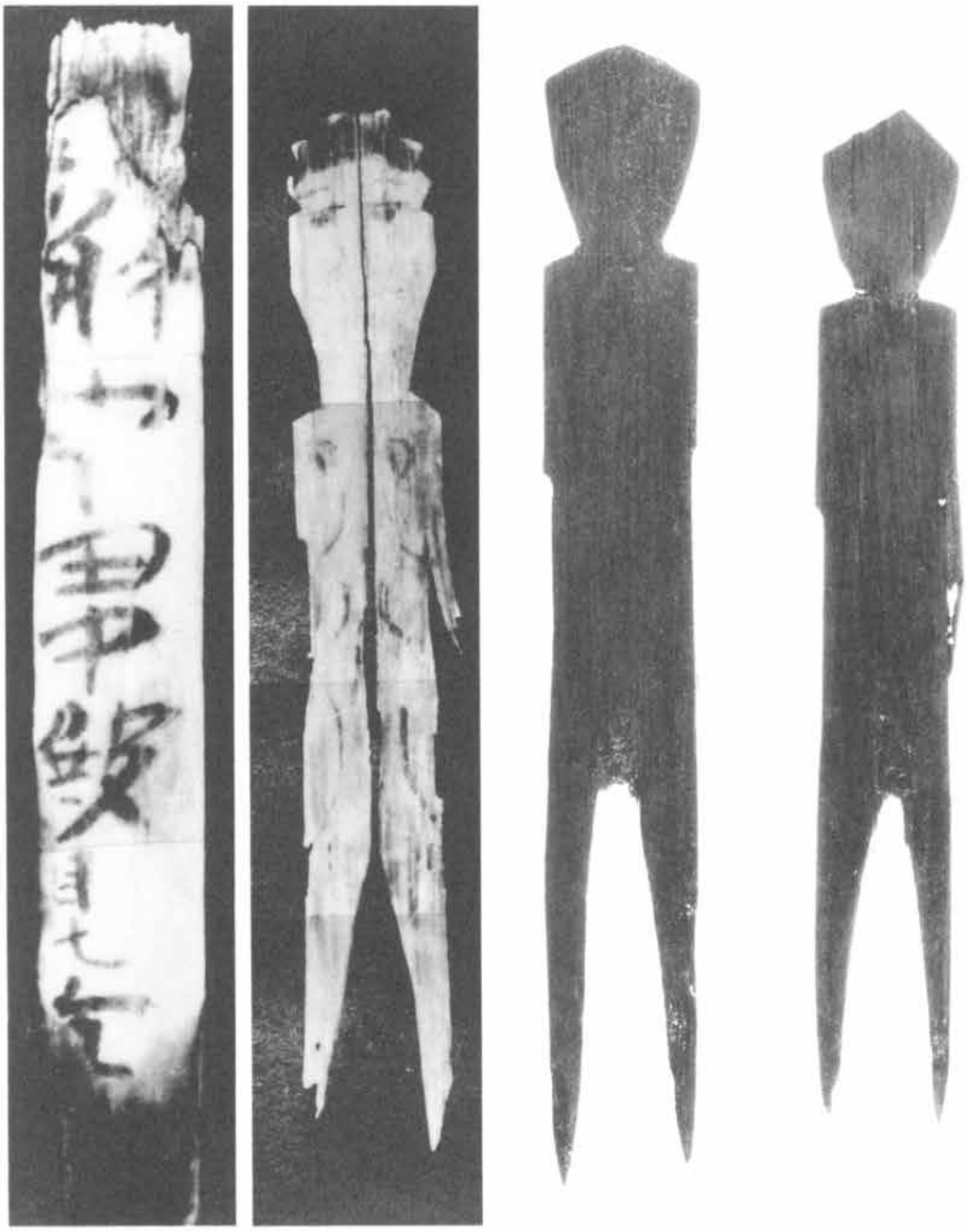
大溝出土木器・木製品



石器・石製品
上　打製土掘具
中　磨石・敲石
下　砥石・その他の石製品

上左　鉄器
上右・中右　シカ(角)
中左　ヒョウタン
下　クルミ・モモ

大溝出土石器・石製品、鉄器、動物遺体、植物遺体



木　簡
（第46図１）

人　形
（第46図５）

人　形
（第46図２）

人　形
（第46図３）

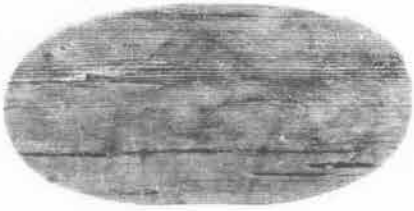
第６号溝出土木簡・人形

46－4

47－5

47－5

47－9



47－8

47－7

第 6 号 溝 出 土 遺 物

近　岡　遺　跡

昭和61年3月20日　印刷
昭和61年3月28日　発行

編集・発行　石川県立埋蔵文化財センター
石川県金沢市米泉町4丁目133番地
〒921　電話（0762）43－7692番(代)

印　　刷　ヨシダ印刷株式会社
石川県金沢市御影町19番1号

© 石川県立埋蔵文化財センター　1986
本文用紙：書籍用紙イエローＡＰ　72kg
表　　紙：きぬもみ　220kg
写真図版：ダイヤホワイトＡＰ　130kg